2017/8/2

推薦図書

沖縄教員塾

目　次

第1章 全般 …… 3
1-1 学習法 …… 3
1-2 全般 …… 3
第2章 政治・経済・社会 …… 4
2-1 全般 …… 4
2-2 法律 …… 4
2-3 政治 …… 5
2-4 経済 …… 5
第3章 歴史 …… 8
3-1 全般 …… 8
3-2 日本史 …… 8
3-3 諸外国史 …… 10
第4章 日本論 …… 12
4-1 全般 …… 12
4-2 差別 …… 12
第5章 国際関係 …… 14
5-1 世界・国際連合 …… 14
5-2 アメリカ …… 14
5-3 アジア …… 14
5-4 イスラーム …… 15
5-5 ヨーロッパ・アフリカ …… 16
第6章 沖縄 …… 17
6-1 沖縄戦 …… 17
6-2 基地・沖縄問題 …… 17
6-3 琉球・沖縄史 …… 18
6-4 琉球・沖縄文化 …… 19
第7章 人間・心理・精神医学 …… 21
7-1 心理 …… 21
7-2 精神医学 …… 21
7-3 人間 …… 22
第8章 言語 …… 24
8-1 全般 …… 24
8-2 英語 …… 24
第9章 日本語・日本文学論 …… 26
9-1 日本語 …… 26
9-2 漢字・かな …… 28
9-3 古文 …… 29
9-4 漢文 …… 31
9-5 日本文学論（小説） …… 31
9-6 日本文学論（詩・短歌・俳諧・俳句） …… 32
9-7 国語教科書 …… 34
9-8 国語教育 …… 34
第10章 教育 …… 37
10-1 全般 …… 37
10-2 世界の教育 …… 39
10-3 教育史 …… 39
10-4 国家による教育統制 …… 40
10-5 教育格差 …… 41

10-6 学力……41
10-7 いじめ・暴力・体罰……42
10-8 高校中退・生徒指導……43
10-9 進路指導・職業教育……44
10-10 沖縄の教育……45
10-11 特別支援教育……45

第11章 自然科学……48
11-1 全般……48
11-2 数学……48
11-3 宇宙……48
11-4 生物……48
11-5 赤ちゃん……49

第12章 共生社会・看護・医療……51
12-1 高齢者……51
12-2 子ども……51
12-3 障害者……52
12-4 看護・医療……53

第13章 哲学・宗教・思想……55
13-1 哲学全般……55
13-2 ギリシア哲学……56
13-3 宗教全般……57
13-4 キリスト教・イスラーム……57
13-5 仏教……58
13-6 諸子百家・儒教・儒学……58
13-7 ヨーロッパの思想……59
13-8 日本の思想・宗教……61

第14章 小説・随筆・詩集・ノンフィクション……64
14-1 日本……64
14-2 沖縄……66
14-3 海外……67

第15章 芸術・趣味・スポーツ・マンガ……69
15-1 芸術……69
15-2 趣味……69
15-3 中日ドラゴンズ……69
15-4 マンガ……70

第16章 絵本・図鑑・児童文学……71
16-1 絵本……71
16-2 図鑑……75
16-3 児童文学……76

ジャンルは便宜上のものです。

すべて上高が読んだものだけです。

絶版の本もあります。古本屋（ネット含む）で買えます。

出版社の記載がないものは各種文庫・青空文庫などで。

塾生・元塾生には，分野・著者・作家などを指定してもらえば，どの本から読んだらいいかアドバイスします。また掲載している本で塾にないものは，塾生が必ず読む場合には購入しますから，申し出てください。

本は本屋（店舗）で買いましょう（古本屋含む）。

アマゾンなどのオンライン書店をできる限り使わないようにしましょう。

子どもたちが本を自分の手に取って，本を選べる社会を残しましょう。

第1章　全般

1-1　学習法

『勉強法が変わる本―心理学からのアドバイス』市川伸一（岩波ジュニア新書）
『学習力トレーニング』海保博之（岩波ジュニア新書）
以上の2冊は，教育心理学・学習心理学の成果に基づいた科学的学習法である。

1-2　全般

『朝日キーワード』（朝日新聞社）
『術語集―気になることば』『術語集Ⅱ』中村雄二郎（岩波新書）
『17歳のための世界と日本の見方―セイゴオ先生の人間文化講義』松岡正剛（春秋社）
『知の編集術』松岡正剛（講談社現代新書）
『一日一言―人類の知恵』桑原武夫編（岩波新書）
『知の逆転』ジャレド・ダイアモンド，ノーム・チョムスキー，オリバー・サックス，マーゼン・ミンスキー，
トム・レイトン，ジェームズ・ワトソン，吉成真由美［インタビュー・編］（NHK出版新書）
『知の英断』ジミー・カーター，フェルナンド・カルドーゾ，グロ・ハーレム・ブルントラント，
メアリー・ロビンソン，マルッティ・アハティサーリ，リチャード・ブランソン，
吉成真由美［インタビュー・編］（NHK出版新書）
『大学受験に強くなる教養講座』横山雅彦（ちくまプリマー新書）
『思考の整理学』外山滋比古（ちくま文庫）
外山滋比古はお茶の水女子大学名誉教授。専攻は英文学。1923年生まれ。2008年東大・京大で一番読まれた本。出版は1983年で86年に文庫化された。発売から21年かけて17万部ゆっくり売れたのが，100万部突破のベストセラーになった。
『読書力』齊藤孝（岩波新書）
『古典力』齊藤孝（岩波新書）
『福岡ハカセの本棚』福岡伸一（メディアファクトリー新書）
『岩波新書で「戦後」をよむ』小森陽一・成田龍一・本田由紀（岩波新書）
『新潮文庫20世紀の100冊』関川夏央（新潮新書）

第2章　政治･経済･社会

2-1　全般

『新・世界経済入門』西川潤（岩波新書）

西川潤は早稲田大学名誉教授。NAFTAの結果，「メキシコ農業ではアメリカ農産物の輸入が大きく増え，農業の大農場集中が進む反面，中小農が離農し，多くがアメリカに労働移民（不法移民を含む）として移動し，アメリカ農業を支えることになった。メキシコ人口の1割以上が，いまではアメリカで暮らしている。」

『世界経済図説　第三版』宮崎勇・田谷禎三（岩波新書）

『日本経済図説　第四版』宮崎勇・本庄真・田谷禎三（岩波新書）

『地球環境報告Ⅱ』石弘之（岩波新書）

『社会学の名著30』竹内洋（ちくま新書）

竹内洋は京都大学名誉教授・関西大学名誉教授。専攻は歴史社会学・教育社会学。以下は30冊の一部。カール＝マルクス／フリードリッヒ＝エンゲルス『共産党宣言』。マックス＝ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』。ユルゲン＝ハーバーマス『公共性の構造転換』。ミシェル＝フーコー『監獄の誕生』。デイヴィッド＝リースマン『孤独な群衆』。イヴァン＝イリッチ『脱学校の社会』。

『現代社会の理論―情報化・消費化社会の現在と未来』見田宗介（岩波新書）

『3・11複合被災』外岡秀俊（岩波新書）

『福島原発事故―県民健康管理調査の闇』日野行介（岩波新書）

『1968－若者たちの叛乱とその背景』『1968－叛乱の終焉とその遺産』小熊英二（新曜社）

小熊英二は慶應義塾大学総合政策学部教授。2016年4月から朝日新聞の論壇時評を担当している。

『対話の回路―小熊英二対談集』小熊英二（新曜社）

対談者は，村上龍・島田雅彦・網野善彦・谷川健一・赤坂憲雄・上野千鶴子・姜尚中・今沢裕。

『真剣に話しましょう―小熊英二対談集』小熊英二（新曜社）

対談者は，古市憲寿・高原基彰・上野千鶴子・小川有美・酒井啓子・篠田徹・湯浅誠・保坂展人・東浩紀・菅原琢・韓東賢・木村草太。

『私たちはいまどこにいるのか―小熊英二時評集』小熊英二（毎日新聞社）

『社会を変えるには』小熊英二（講談社現代新書）

新書大賞2013受賞。

『ヒーローを待っていても世界は変わらない』湯浅誠（朝日文庫）

『共同取材　見たくない思想的現実を見る』金子勝・大澤真幸（岩波書店）

『独立国家のつくりかた』坂口恭平（講談社現代新書）

『モバイルハウス三万円で家をつくる』坂口恭平（集英社新書）

坂口恭平は1978年生まれ。建築家・作家・絵描き・踊り手・歌い手。2012年5月，新政府を樹立し，初代内閣総理大臣に就任。早稲田大学理工学部建築学科卒。

2-2　法律

『日本国憲法　第六版』芦部信喜（岩波書店）

『比較のなかの改憲論―日本国憲法の位置』辻村みよ子（岩波新書）

辻村みよ子は明治大学法科大学院教授。専攻は憲法学，比較憲法，ジェンダー法学。

『上野千鶴子の選憲論』上野千鶴子（集英社新書）

『法とは何か』渡辺洋三（岩波新書）
『日本人の法意識』川島武宜（岩波新書）
『人が人を裁くということ』小坂井敏晶（岩波新書）

2-3 政治

『政治学の名著30』佐々木毅（ちくま新書）
佐々木毅は東京大学名誉教授・元総長。以下は30冊の一部。プラトン『ゴルギアス』。マキアヴェッリ『君主論』。ヴェーバー『職業としての政治』。アリストテレス『政治学』。ホッブズ『リヴァイアサン』。ロック『政府論』と『寛容書簡』。モンテスキュー『法の精神』。プラトン『国家（ポリテイア）』。孔子『論語』。アウグスティヌス『神の国』。カルヴァン『キリスト教綱要』。孫武『孫子』。カント『永遠平和のために』。アダム＝スミス『国富論』。ヘーゲル『法の哲学』。マルクス，エンゲルス『共産党宣言』。ロールズ『正義論』。ルソー『社会契約論』。J.S.ミル『代議政体論』。福沢諭吉『文明論之概略』。孫文『三民主義』。アレント『全体主義の起源』。
『現代政治学の名著』佐々木毅編（中公新書）
『戦略論の名著―孫子，マキアヴェリから現代まで』野中郁二郎編著（中公新書）
野中郁二郎は一橋大学名誉教授。以下は取り上げられる名著の一部。孫武『孫子』。マキアヴェリ『君主論』。毛沢東『遊撃戦論』。
『姜尚中の政治学入門』姜尚中（集英社新書）
『新版　行政ってなんだろう』新藤宗幸（岩波ジュニア新書）
『コミュニティーを問いなおす―つながり・都市・日本社会の未来』広井良典（ちくま新書）
広井良典は千葉大学法経学部教授。2009年度大佛次郎論壇賞受賞。
『生き方の不平等―お互いさまの社会に向けて』白波瀬佐和子（岩波新書）
『政党崩壊―永田町の失われた十年』伊藤惇夫（新潮新書）
『日本改造計画』小沢一郎（講談社）
『新しい国へ―美しい国へ　完全版』安倍晋三（文春新書）
法の支配と立憲主義の歴史的意味を理解していないことを隠さず，法の支配と立憲主義を否定する。34ページ分を「日米同盟」にあてているが，沖縄の「お」の字も出てこない。『美しい国へ』（安倍晋三・文春新書）の全文を収録し，新論文を追加している。
『大臣　増補版』菅直人（岩波新書）
『東電福島原発事故総理大臣として考えたこと』菅直人（幻冬舎新書）
『首相官邸の前で―Tell the Prime Minister』小熊英二（集英社）
同じタイトルの映画のDVD付き。映画『首相官邸の前で―Tell the Prime Minister』の上映会を沖縄教員塾で2017年3月5日に行った。沖縄では初上映だった。
『地方消滅』増田寛也編著（中公新書）
新書大賞2015受賞。
『暴走する地方自治』田村秀（ちくま新書）
『ボランティア―もうひとつの情報社会』金子郁容（岩波新書）

2-4 経済

『経済学の名著30』松原隆一郎（ちくま新書）
松原隆一郎は東京大学大学院総合文化研究科教授。専攻は社会経済学・相関社会科学。ロック『統治論』。

ヒューム『経済論集』。スミス『道徳感情論』と『国富論』。リカード『経済学および課税の原理』。リスト『経済学の国民的体系』。J.S.ミル『経済学原理』。マルクス『資本論』。シュンペーター『経済発展の理論』。ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』と『若き日の信条』。フリードマン『資本主義と自由』。ロールズ『正義論』。セン『不平等の再検討』。

『戦後世界経済史―自由と平等の視点から』猪木武徳（中公新書）

猪木武徳は国際日本文化研究センター元所長。07～08年日本経済学会会長。2009年エコノミストが選ぶ経済図書第1位。新書大賞2010第4位。むすびの最後のことばは，次の通り。「知育・徳育を中心とした教育問題こそがこれからの世界経済の最大の課題であることは否定すべくもない。」

『経済学とは何だろうか』佐和隆光（岩波新書）

『経済学のことば』根井雅弘（講談社現代新書）

『ＷＴＯ―貿易自由化を超えて』中川淳司（岩波新書）

『グローバル恐慌』浜矩子（岩波新書）

『資本主義の終焉と歴史の危機』水野和夫（集英社新書）

新書大賞2015第2位。「いくら資本を再投資しようとも，利潤をあげるフロンティアが消滅すれば，資本の増殖はストップします。そのサインが利子率ゼロということです。利子率がゼロに近づいたということは，資本の自己増殖が臨界点に達していること，すなわち資本主義が終焉期に入っていることを意味しています。」

『財政から読み解く日本社会―君たちの未来のために』井手栄策（岩波ジュニア新書）

『デフレの正体―経済は「人口の波」で動く』藻谷浩介（角川oneテーマ21新書）

藻谷浩介は，日本政策投資銀行参事役。平成合併前の約3200市町村の99.9%と海外59か国を訪問した。50万部のベストセラー。新書大賞2011第2位。著者による要約。「経済を動かしているのは，景気の波ではなくて人口の波，つまり生産年齢人口＝現役世代の数の増減だ」。沖縄経済を知る上でも推薦。

『里山資本主義―日本経済は「安心の原理」で動く』藻谷浩介・NHK広島取材班（角川oneテーマ21新書）

新書大賞2014受賞。

『雇用身分社会』森岡孝二（岩波新書）

『ルポ　雇用劣化不況』竹信三恵子（岩波新書）

『ブラック企業―日本を食いつぶす妖怪』今野晴貴（文春新書）

今野晴貴はNPO法人POSSE代表。社会政策，労働経済学。1983年生まれ。2013年度大佛次郎論壇賞受賞。

『ルポ　生活保護―貧困をなくす新たな取り組み』本田良一（中公新書）

本田良一は北海道新聞社釧路支社報道部編集委員。「子どもが貧困から抜け出す有効な手段となる教育だが，教育を受ける費用は異常に高い。頼みの奨学金さえ，有利子となり，返済できない人が増える」。「貧しい家庭に生まれた子どもは，ずっと貧しい生活を送るしかない――そんな社会は子どもたちから希望と可能性を奪い，彼らの不満と反撥を招くだろう。優秀な人材と能力を埋もれさせ，社会の活力を衰退させるだろう。いま，日本はその瀬戸際にある。」「貧困の連鎖の中にいることの多い生活保護世帯の親は高校，大学生活を経験した人が少なく，進学や学校生活，勉強について具体的にアドバイスができない」。

『豊かさとは何か』暉峻淑子（岩波新書）

『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？―身近な疑問からはじめる会計学』山田真哉（光文社新書）

『自動車の社会的費用』宇沢弘文（岩波新書）

『原発のコスト―エネルギー転換への視点』大島堅一（岩波新書）

大島堅一は立命館大学国際関係学部教授。専攻は環境経済学，環境・エネルギー政策論。2012年大佛次郎論壇賞受賞。「福島第一原発事故は，原発を15基（1基廃炉中）かかえる福井県出身の私にとって，衝撃的な出来事でした。これまで，原子力政策を政治経済学的立場から研究してきましたが，原子力政策の異常な推進体制をしっかり国民に伝えきれたかどうかを振り返り，心から反省しました。一般書を書こうと決意したのはこのためです。注をつけず，大学入学したての1年生が読んでも理解できるように努力しました。これまでの歴史

上の大きな変革は，常に若者によって先導されました。私は，若者に賭けたいと思います。」

『家計からみる日本経済』橘木俊詔（岩波新書）

『格差社会』橘木俊詔（岩波新書）

『夫婦格差社会―二極化する結婚のかたち』橘木俊詔・迫田さやか（中公新書）

『「格差」の戦後史―階級社会 日本の履歴書【増補版】』橋本健二（河出ブックス）

『階級都市―格差が街を侵食する』橋本健二（ちくま新書）

橋本健二は武蔵大学社会学部教授（社会学）。次のような指摘は，新自由主義への根底的な批判である。「経済格差の大きさと死亡率の関係を都市別にみると，不平等な都市ほど死亡率が高くなる。……データは，不平等な社会に住めば，どんな所得レベルの人でも死亡率が上がってしまうことを示している。格差が大きくなると，低所得の人々のみならず，平均的な，さらには平均以上の所得のある豊かな人々でも，死亡率が上昇するのである。」

『競争と公平感―市場経済の本当のメリット』大竹文雄（中公新書）

大竹文雄は大阪大学社会経済研究所教授。労働経済学専攻。新書大賞2011第4位。著者自身がワーカーホリックなので，ワーカーホリックに経済合理性があると自己肯定しているのが，同じワーカーホリックとして笑えた。

『「ニート」って言うな！』本田由紀・内藤朝雄・後藤和智（集英社新書）

『下流社会』『下流社会　第2章』三浦展（光文社新書）

『反貧困―「すべり台社会」からの脱出』湯浅誠（岩波新書）

湯浅誠は反貧困ネットワーク事務局長，NPO法人自立生活サポートセンター・もやい事務局長。2008年度大佛次郎論壇賞受賞。岩波新書の3冊『ルポ　貧困大国アメリカ』堤未果・『反貧困―「すべり台社会」からの脱出』湯浅誠・『子どもの貧困』阿部彩は，「貧困3部作」としてまとめて推薦する。

『正社員が没落する』堤未果・湯浅誠（角川oneテーマ21新書）

『貧困についてとことん考えてみた』湯浅誠・茂木健一郎（NHK出版新書）

『弱者の居場所がない社会―貧困・格差と社会的包摂』阿部彩（講談社現代新書）

『世代間格差』加藤久和（ちくま新書）

『貧困世代―社会の監獄に閉じ込められた若者たち』藤田孝典（講談社現代新書）

藤田孝典はNPO法人ほっとプラス代表理事，社会福祉士。1982年生まれ。台湾の本屋で翻訳書が大きく宣伝されていた。台湾は日本と同じで都市部であればどこに行ってもコンビニがある。つまりそれだけ最低時給の低賃金で働く若者たちがいる。

『ルポ貧困女子』飯島裕子（岩波新書）

『性風俗のいびつな現場』坂爪真吾（ちくま新書）

『日本でいちばん大切にしたい会社』『日本でいちばん大切にしたい会社2』坂本光司（あさ出版）

坂本光司は法政大学大学院政策創造研究科教授。専門は中小企業経営論・地域経済論・産業論。計50万部のベストセラー。「50年前に知的障害をもつ2人の少女を，「私たちみんなでカバーしますから」という社員たちのたっての願いで採用した日本理化学工業。今，この会社の障害者雇用率は，社員の7割に及んでいます。」沖縄教員塾でも日本理化学工業のチョークを使用している。

第3章　歴史

3-1　全般

『歴史とは何か』E.H.カー（清水幾太郎訳）（岩波新書）
『歴史学の名著30』山内昌之（ちくま新書）
　山内昌之は東京大学名誉教授。専門はイスラーム地域研究と国際関係史。教育再生実行会議委員。以下は30冊の一部。司馬遷『史記』。ホイジンガ『中世の秋』。慈円『愚管抄』。新井白石『読史余論』。カエサル『ガリア戦記』。チャーチル『第二次世界大戦』。ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』。フーコー『監獄の誕生』。
『銃・病原菌・鉄（上下）―1万3000年にわたる人類史の謎』ジャレド・ダイアモンド（草思社文庫）
　ジャレド・ダイアモンドはカリフォルニア大学ロサンゼルス校教授。生理学者，進化生物学者，生物地理学者。朝日新聞「ゼロ年代の50冊」第1位。「歴史は，異なる人びとによって異なる経路をたどったが，それは，人びとのおかれた環境の差異によるものであって，人びとの生物学的な差異によるものではない」。
『現代史を学ぶ』溪内謙（岩波新書）
『二〇世紀の歴史』木畑洋一（岩波新書）
『史論の復権―與那覇潤対論集』與那覇潤（新潮新書）

3-2　日本史

『ともに学ぶ　人間の歴史　中学社会　歴史的分野』（学び舎）
　文部科学省検定済の中学校社会（歴史）の教科書である。現場の中学校教員たちが作った。歴史学習の面白さに圧倒される。歴史を暗記教科だと間違った認識を持っている人は，ぜひ手に取ってほしい。
『日本社会の歴史（上中下）』網野善彦（岩波新書）
『日本の歴史（上中下）』井上清（岩波新書）
メディア（2011年7月の文章）
　私はテレビを見ない，基本的に。子どもが生まれて，テレビを見せないようにしていたら，自分もテレビを見る必要がないことに気づいた。私の家にはインターネットもない。
　しかし，情報の入手で特に困ることはない。新聞と本で充分である。会社でインターネットは使うけれど。
　日本語で新聞（新しく聞くこと），英語でnewspaper（新しい紙），フランス語でjournal（日々のもの）である。
　新しさだけに商品価値があるかのようで，その日の新聞は，新鮮なその日のうちに読まなければならない感じがする。
　しかし，ちょっと大きな図書館に行って，例えば自分が生まれる前の新聞を，例えば1週間分読んでみよう。政治・経済・社会・スポーツ欄はもちろん，広告欄やテレビの局数・放送時間帯まで興味が尽きない。
　下手な小説よりは，よほどおもしろい。
　新しいニュースにはほとんど意味がない。ニュースは，時間の経過の中で，その価値がはっきりしてくる。
　自分の顔は距離が近すぎて見えない。
　ニュースも時間的距離を取らないと，その意味は見えない。
　そもそも新聞は，連載やコラムや広告など，その日に読む必然性がないものが多い。その日にしか使えないものは，テレビ・ラジオ欄だけである（沖縄では死亡広告も）。
　かつて岩波新書『日本の歴史（上・中・下）』の著者である井上清（京都大学名誉教授・故人）の自宅を訪ねた際に，「今日ヨーロッパからもどったばっかりで，ずっと新聞を読んでいるところだ」とおっしゃっていたことがある。
　海外旅行中の日本の新聞を読んでいたのは間違いない。歴史学者は，たまった古新聞を読んでいたのである。
　私が自宅で購読しているのは朝日新聞だ。仕事が終わり，夕食を終えた23時過ぎに（もっと遅いことも多いが）に，前日の夕刊と当日の朝刊を読む。毎朝，東京から那覇に飛行機でやってくるものだ。
　その日の朝刊を読まずに，1日の仕事を終えるが特に困ることはない。
　沖縄タイムスと琉球新報は，会社の古新聞をもらって読んでいる。それぞれ数ヵ月後に，別の時期に読む。同じ日の3種の新聞を，3回に分けて違う時期に読んでいる。
　同じ歴史を3回なぞることができる。
　日本の15年戦争の始まりとなった柳条湖事件（いわゆる「満州事変」）も，アメリカの本格的なベトナム戦争突入となったトンキン湾事件も，

侵略する側のでっち上げの嘘の情報が，「真実」として報じられた。ほとんどすべての国民が，それを信じた。
最近のイラク戦争ですら，イラクに大量破壊兵器があることが，イラク侵略の口実とされ，アメリカは国連にもそのように報告した。実際にはイラクに大量破壊兵器はなかった。
日本の新聞・テレビは，原子力発電を容認し，その安全性を報道し，政府や東京電力などの「原発は安全」という広告を垂れ流してきた。
新聞は，大広告主である政府や電力会社の批判ができない。広告料（CM放映料）のみによって成り立つテレビは，なおさらそうである。
フクシマの報道では，メルトダウンが起きていたのに，それを東京電力が認めたのは約2ヶ月後であるし，冷却水の注水中断が首相の責任問題として国会で議論されていたのに，実際には注水は中断されていなかった。
軍部の情報をそのまま垂れ流して報道したように，東京電力の情報をそのまま垂れ流しただけだ（政府すら軍部・東京電力にだまされていることに注意）。
メディアにどのようなバイアス（歪み・偏り）がかかっているかを学び，メディア・リテラシー（メディアを読みとる力）を高めなければならない。
勧められることは，さまざまな本を読むことと，さまざまな考えの人に直接会うことだ。
それぞれの「私」は，政府であれ，大企業であれ，「私」自身であれ，すべてを自由に批判することができる。
私たちは，歴史に学ばないから，国民国家とマスメディアの誕生以降，同じ過ちを何度も何度も，あまりにも何度も繰り返してきた。
※今は自宅にインターネットがあり，会社を辞め，新聞は4紙読んでいる。

『日本の歴史をよみなおす（全）』網野善彦（ちくま学芸文庫）

『日本文化史　第二版』家永三郎（岩波新書）

家永三郎（1913～2002年）の専攻は日本思想史。家永教科書裁判の家永三郎である。

『日本文化の歴史』尾藤正英（岩波新書）

『未来のための江戸学―この国のカタチをどう作るのか』田中優子（小学館101新書）

田中優子は法政大学総長。専攻は日本近世文化・アジア比較文化。以下は私塾について。「藩校に比べ時代に沿った新しい学問が特徴で，しかもそれぞれの土地に根差している。彼らは現実の農村の荒廃や社会の矛盾，変化を眼前に見ており，その現実こそが学問の動機であった。地に足のついた学問は地方で育ったのである。荻生徂徠は少年のころ父親が江戸払いとなって現在の千葉県茂原市に暮らすことになり，人々の暮らしを骨身にしみて知った。そこから書を読むと，何でもよく理解できたという。彼はこれを「南総の力」といっている。旅も学問や思想に大きな力となった。福岡に生まれた貝原益軒は，旅することで日本の本草学を確立した」。

『日本近代史』坂野潤治（ちくま新書）

新書大賞2013第3位。

『伊藤博文―知の政治家』瀧井一博（中公新書）

瀧井一博は国際日本文化研究センター教授。2010年度サントリー学芸賞（政治・経済部門）受賞。新書大賞2011第5位。日本最初の首相はテロリストだった。「1862年12月には，高杉晋作らによる品川御殿山に建設中のイギリス公使館焼き打ちに参加，その数日後には，国学者塙次郎（忠宝。塙保己一の息子）が廃帝の故事を調査中との誤伝を信じて，山尾庸三とともにこれを斬殺している」。「松陰没後の伊藤は，このように立派なテロリストであり，その行動を支えていたのは，晩年の松陰が到達した尊王攘夷に基づく倒幕思想だった」。

『治安維持法―なぜ政党政治は「悪法」を生んだか』中澤俊輔（中公新書）

『それでも，日本人は「戦争」を選んだ』加藤陽子（新潮文庫）

加藤陽子は東京大学大学院人文社会系研究科教授。専攻は日本近現代史。栄光学園の歴史研究部の高校生・中学生を対象にした講義録。

『これだけは知っておきたい日本と朝鮮の一〇〇年史』和田春樹（平凡社新書）

和田春樹は東京大学名誉教授。専門はロシア・ソ連史，現代朝鮮研究。日本は大きくなったり小さくなったりしてきた。「昭和15（1940）年の国勢調査を見ると，日本本土には7311万人，朝鮮半島に2433万人，台湾島に587万人，その他関東州などで300万人，総計1億500万人，これが日本の臣民だということです。……一億人の戦士のうち7割は日本人で，2割5分，つまり4人に1人は朝鮮人だということです。」

『きけわだつみのこえ―日本戦没学生の手記』日本戦没学生記念会編（岩波文庫）

『天皇の戦争責任』井上清（岩波同時代ライブラリー）

『昭和天皇―「理性の君主」の孤独』古川隆久（中公新書）

古川隆久は日本大学文理学部教授。2011年度サントリー学芸賞（政治・経済部門）受賞。新書大賞2012第2

位。

『ノモンハン戦争―モンゴルと満洲国』田中克彦（岩波新書）

田中克彦は一橋大学名誉教授。専攻は，言語学・モンゴル学。新書大賞2010第5位。最も信頼する言語学者。

『朝鮮人強制連行』外村大（岩波新書）

『朝鮮と日本に生きる―済州島から猪飼野へ』金時鐘（岩波新書）

『ヒロシマ・ノート』大江健三郎（岩波新書）

次のように記された本が発行されたのは約50年前である。「僕は沖縄の被爆者の鋭い棘にみちた言葉を書きとめておくほかにさしあたってなにひとつできないことを恥じるのみである。《日本人はもっと誠意をもってもらいたい。いつもアメリカのご機嫌をとっていて，人間の問題を放置している。もし，やるつもりがあるなら，すぐにもやってくれ，すぐさま行動に示してくれ。それがみんなの心です》」。

『自伝的戦後史（上下）』羽仁五郎（講談社文庫）

『羊の歌―わが回想』『続　羊の歌―わが回想』加藤周一（岩波新書）

『増補版　敗北を抱きしめて―第二次大戦後の日本人（上下）』ジョン・ダワー（岩波書店）

『戦後史』中村政則（岩波新書）

『戦後史の正体』孫崎享（創元社）

孫崎享は，元外務省官僚・駐ウズベキスタン大使・駐イラク大使・防衛大学校教授。第二次世界大戦後は，傭兵ではない外国の軍隊が駐留していても主権国家と言うようになった。はたして日本は主権国家といえるのか。

『永続敗戦論―戦後日本の核心』白井聡（太田出版）

『〈民主〉と〈愛国〉―戦後日本のナショナリズムと公共性』小熊英二（新曜社）

小熊英二は慶應義塾大学総合政策学部教授。2016年4月から朝日新聞の論壇時評を担当している。2003年度大佛次郎論壇賞受賞。

『生きて帰った男―ある日本兵の戦争と戦後』小熊英二（岩波新書）

第14回小林秀雄賞受賞。新書大賞2016第2位。

『戦争が遺したもの』鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二（新曜社）

『従軍慰安婦と靖國神社―一言語学者の随想』田中克彦（KADOKAWA）

『日中国交正常化―田中角栄，大平正芳，官僚たちの挑戦』服部龍二（中公新書）

服部龍二は中央大学総合政策学部教授。日本外交史・東アジア国際政治史専攻。2011年度大佛次郎論壇賞受賞，アジア・太平洋賞特別賞受賞。昔の自民党はまだよかった，と慨嘆する。

3-3　諸外国史

『朝鮮史』梶村秀樹（講談社現代新書）

『北朝鮮現代史』和田春樹（岩波新書）

『科挙―中国の試験地獄』宮崎市定（中公新書）

『奇人と異人の中国史』井波律子（岩波新書）

『故事成句でたどる楽しい中国史』井波律子（岩波ジュニア新書）

『台湾―四百年の歴史と展望』伊藤潔（中公新書）

『娘と話すアウシュヴィッツっなに？』アネット・ヴィヴィオルカ（現代企画室）

訳者は上高の大学の同級生。

『物語　ウクライナの歴史―ヨーロッパ最後の大国』黒川祐次（中公新書）

黒川祐次は外務省入省後に駐ウクライナ大使・モルドバ大使（兼務），駐コートジボアール大使，駐ベナン・ブルキナファソ・ニジェール・トーゴー大使（兼任）を歴任。日本大学国際関係学部教授。「1914年にはロシ

ア極東地方では，ロシア人の2倍にあたる200万人のウクライナ人が定住していた。したがって現在でもロシア極東地方の住民は，過半数がウクライナ人だといわれる。」

『物語　ストラスブールの歴史―国家の辺境，ヨーロッパの中核』内田日出海（中公新書）

内田日出海はストラスブール大学で歴史学博士に。フランス語でストラスブールは，ドイツ語読みでシュトラースブルクと呼ばれる。アルザスの中心都市で，EU議会が置かれ，旧市街は世界遺産となっている。人口27万人。独仏が交互に領有した国境の町である。EUの歴史はECSC（欧州石炭鉄鋼共同体）から始まるが，その目的は二度の世界大戦となった独仏対立に終止符を打つことにあった。

『物語　エルサレムの歴史―旧約聖書以前からパレスチナ和平まで』笈川博一（中公新書）

笈川博一の専門は古代エジプト言語学，現代中東学。イスラエルのヘブライ大学に留学，同大学で教えた。ベギン元首相の聖書研究会の講師を務めたこともある。

『ロシア革命史（1～5)』トロツキー（岩波文庫）

『世界をゆるがした十日間（上下)』ジョン・リード（岩波文庫）

『歴史としての社会主義』和田春樹（岩波新書）

『アメリカ黒人の歴史』本田創造（岩波新書）

『好戦の共和国アメリカ―戦争の記憶をたどる』油井大三郎（岩波新書）

第4章　日本論

4-1　全般

『日本の思想』丸山真男（岩波新書）
『翻訳と日本の近代』丸山真男・加藤周一（岩波新書）
対談ではなく，加藤周一（1919～2008年）が問いかけ，丸山真男（1914～1996年）が答える，という「問答」である。森有礼が“Education in Japan”で「英語を国語にしろという有名な議論を展開した……大和言葉というのは抽象語がないから」と書いた話や，「総計300万部出た『学問のすゝめ』のうち，実質20万部くらいを除いてほとんどが偽版」であった話などが出てくる。ちなみに“copyright”を「版権」と訳したのは福沢諭吉である。
『「世間」とは何か』『「教養」とは何か』阿部謹也（講談社現代新書）
阿部謹也（1935～2006年）は一橋大学名誉教授。専攻はドイツ中世史。
『近代化と世間―私が見たヨーロッパと日本』阿部謹也（朝日新書）
『東西／南北考―いくつもの日本へ』赤坂憲雄（岩波新書）
『日本辺境論』内田樹（新潮新書）
内田樹は神戸女学院大学名誉教授。専門は，フランス現代思想，映画論，武道論。新書大賞2010受賞。
『中国化する日本　増補版―日中「文明の衝突」一千年史』與那覇潤（文春文庫）
『転換期の日本へ―「パックス・アメリカーナ」か「パックス・アジア」か』
ジョン・W・ダワー，ガバン・マコーマック（NHK出版新書）
『ネグリ，日本と向き合う』アントニオ・ネグリ
市田良彦，伊藤守，上野千鶴子，大澤真幸，姜尚中，白井聡，毛利嘉孝，三浦信孝（NHK出版新書）
『国家の品格』藤原正彦（新潮新書）
『上司は思いつきでものを言う』橋本治（集英社新書）
『日本の難点』宮台真司（幻冬舎新書）
『絶望の国の幸福な若者たち』古市憲寿（講談社＋α文庫）
『だから日本はズレている』古市憲寿（新潮新書）
『不幸な国の幸福論』加賀乙彦（集英社新書）
『科学と宗教と死』加賀乙彦（集英社新書）
加賀乙彦は1929年生まれ。精神科医・作家。東京拘置所医務技官を務めフランス留学。上智大学教授など。カトリック信徒。「残念ながら，日本は為政者が国民に対して平気で嘘を言う国だと感じます。」
『メディアと日本人―変わりゆく日常』橋元良明（岩波新書）
橋元良明は東京大学大学院情報学環教授。専攻はコミュニケーション論。1995年から2010年までの著者らによる「日本人の情報行動調査」に基づくメディア論。
『世界カワイイ革命―なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか』櫻井孝昌（PHP新書）

4-2　差別

『〈日本人〉の境界―沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮　植民地支配から復帰運動まで』小熊英二（新曜社）
『日本という国』小熊英二（理論社）
小熊英二は慶應義塾大学総合政策学部教授。2016年4月から朝日新聞の論壇時評を担当している。福沢諭吉の天賦人権論の一側面について。「彼は1882年3月の「遺伝之能力」という評論で，こう書いている。「北海道

の土人の子を養(やしない)て之に文を学ばしめ，時を費し財を捐(す)てゝ辛苦教導するも，其成業の後に至り我慶應義塾上等の教員たる可(べか)らざるや明(あきらか)なり。蓋(けだ)し其本人に罪なし，祖先以来精神を練磨したることなくして遺伝の智徳に乏しければなり」。つまり福沢によれば，アイヌは遺伝的に能力が劣るから，どんなに教育しても慶應義塾の教員にはなれないというわけだ」。

『越境の時―1960年代と在日』鈴木道彦（集英社新書）

『獄中19年―韓国政治犯のたたかい』徐勝（岩波新書）

『在日』姜尚中（集英社文庫）

『ルポ　差別と貧困の外国人労働者』安田浩一（光文社新書）

安田浩一はジャーナリスト。「米国務省が毎年発表している「世界の人身売買の実態に関する報告書」では2007年度版から，日本の研修生問題が取り上げられている。報告書は研修制度について「一部の外国人労働者は強制労働（forced labor）の状況にある」と指摘。研修制度が人身売買の一形態であるとの認識を示した。」

『ヘイトスピーチ―「愛国者」たちの憎悪と暴力』安田浩一（文春新書）

『差別と日本人』野中広務・辛淑玉（角川oneテーマ21新書）

麻生元首相の部落出身である野中への差別発言が書かれている。新書大賞2010第2位。

第5章　国際関係

5-1　世界・国際連合

『世界を見る目が変わる50の事実』ジェシカ・ウィリアムズ（草思社）
『国際関係論―同時代史への羅針盤』中嶋嶺雄（中公新書）
『国際政治のキーワード』西川恵（講談社現代新書）
『国際連合―軌跡と展望』明石康（岩波新書）
『国連とアメリカ』最上敏樹（岩波新書）
『過激派で読む世界地図』宮田律（ちくま新書）
『帝国を壊すために―戦争と正義をめぐるエッセイ』アルンダティ・ロイ（岩波新書）

5-2　アメリカ

『歴代アメリカ大統領総覧』高崎通浩（中公新書ラクレ）
『アメリカの保守本流』広瀬隆（集英社新書）
『9・11ジェネレーション―米国留学中の女子高生が学んだ戦争』岡崎玲子（集英社新書）
『ルポ　貧困大国アメリカ』『ルポ　貧困大国アメリカⅡ』『㈱貧困大国アメリカ』堤未果（岩波新書）
『ルポ　貧困大国アメリカ』は新書大賞2009受賞，『㈱貧困大国アメリカ』は新書大賞2014第3位。堤未果はジャーナリスト。国連婦人開発基金・アムネスティインターナショナルをへて米国野村證券勤務中に9・11を経験。アメリカを見習うとどういう社会になるかがわかる。
2010年の時点でアメリカ国内のワーキングプア人口は1億5000万人（2人に1人）を突破，うち4人に1人が，八大低賃金サービス業（ウェイター・ウェイトレス，レジ係，小売店の店員，メイド，運転手，調理人，用務員，介護士）に就いており，給料の手取り額が貧困ライン以下だという。
岩波新書の3冊『ルポ　貧困大国アメリカ』堤未果・『反貧困―「すべり台社会」からの脱出』湯浅誠・『子どもの貧困』阿部彩は，「貧困3部作」としてまとめて推薦する。
『アメリカから〈自由〉が消える』堤未果（扶桑社新書）
これまでの戦争には終わりがあった。「テロとの戦い」には終戦がない。戦争国家アメリカは，戦争を永遠に続けられる。
『沈みゆく大国アメリカ』『沈みゆく大国アメリカ〈逃げ切れ！　日本の医療〉』堤未果（集英社新書）
『政府は必ず嘘をつく　増補版』『政府はもう嘘をつけない』堤未果（角川新書）
『社会の真実の見つけかた』堤未果（岩波ジュニア新書）

5-3　アジア

『アジア政治を見る眼―開発独裁から市民社会へ』岩崎育夫（中公新書）
『老いてゆくアジア―繁栄の構図が変わるとき』大泉啓一郎（中公新書）
『アジア力の世紀―どう生き抜くのか』進藤榮一（岩波新書）
『女たちがつくるアジア』松井やより（岩波新書）
『多民族国家　中国』王柯（岩波新書）
王柯は神戸大学国際文化学部教授（中国出身）。専攻は中国近現代史。中国の少数民族の入門書である（少数民族といってもチョワン族は約1,692万人，満州族は約1,038万人）。著者は2014年3月中国出張の際に現地

警察によって18日間にわたって拘束された。イスラームを信仰するウイグル族を研究対象としていることが理由だと推測されている。

『おどろきの中国』橋爪大三郎×大澤真幸×宮台真司（講談社現代新書）

『ナグネ―中国朝鮮族の友と日本』最相葉月（岩波新書）

『観光コースでない台湾』片倉佳史（高文研）

『台湾とは何か』野嶋剛（ちくま新書）

『日本の国境問題―尖閣・竹島・北方領土』孫崎享（ちくま新書）

『「戦地」派遣―変わる自衛隊』半田滋（岩波新書）

『3・11後の自衛隊―迷走する安全保障のゆくえ』半田滋（岩波ブックレット）

『日本は戦争をするのか―集団的自衛権と自衛隊』半田滋（岩波新書）

半田滋は東京新聞編集委員。在ジブチ自衛隊基地の状況も書かれている。

『ＯＤＡ援助の現実』鷲見一夫（岩波新書）

『バナナと日本人―フィリピン農園と食卓のあいだ』鶴見良行（岩波新書）

『エビと日本人』『エビと日本人Ⅱ』村井吉敬（岩波新書）

『東アジア共同体―経済統合のゆくえと日本』谷口誠（岩波新書）

『ブータンに魅せられて』今枝由郎（岩波新書）

今枝由郎はフランス国立科学研究センター研究ディレクター。東洋仏教史。1981～90年にブータン国立図書館顧問としてブータンに赴任した。ブータンは「国民総幸福」を提唱した仏教国（チベット仏教ドゥク派が国教）である。教育と医療は原則的に全面無料。「国民の福祉・利益の最優先がブータンの近代化政策の基本である」。異なる国・社会・人間のあり方に興味がある人にお勧め。ブータンに魅せられます。

5-4 イスラーム

『現代アラブの社会思想―終末論とイスラーム主義』池内恵（講談社現代新書）

池内恵は東京大学先端科学技術研究センター准教授。イスラーム政治思想史，中東地域研究が専門。2002年度大佛次郎論壇賞受賞。現代アラブの「思想的袋小路」が描かれている。イスラームを高所から批判する高飛車な態度はいやだが，反駁の仕様がないほど現実的＝論理的である。

『イスラーム国の衝撃』池内恵（文春新書）

新書大賞2016第3位。

『ヨーロッパとイスラーム―共生は可能か』内藤正典（岩波新書）

『イスラムの怒り』内藤正典（集英社新書）

『イスラム―癒しの知恵』内藤正典（集英社新書）

『イスラームから世界を見る』内藤正典（ちくまプリマー新書）

『イスラム戦争―中東崩壊と欧米の敗北』内藤正典（集英社新書）

内藤正典は同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授。専門は多文化共生論，現代イスラーム地域研究。1980年代前半のシリアに留学していた。現代のイスラームについてお薦め。

『アフガニスタン―戦乱の現代史』渡辺光一（岩波新書）

アフガニスタン（2008年11月の文章）

アフガニスタンについて書く。

生涯訪れることもない土地について書くのは気が重い。それでも乏しい知識で書かなければならない。アフガニスタン人にアフガニスタンの手料理を食べさせてもらったことがある日本人は，数少ないはずだからだ。

今年8月にペシャワール会の伊藤和也さん（当時31歳）が殺された。ペシャワール会は，第1回沖縄平和賞を代表の中村哲医師が受賞したこともあり，沖縄との縁は深い。

伊藤氏は現地で6年目を迎え，サツマイモ栽培などの農業指導を行い，パシュトゥン語も達者だったということだ。彼は，電気もないスタッフハウスに現地スタッフと起居していたということだ。

ご遺族は「家族の誇りです」ときっぱりとおっしゃった。

さて，この事件の直後に，教員の二次試験対策があった。面接練習で「最近興味関心を持ったニュースは」という質問に，この事件をあげた受験生が何人かいた。さらに「どのように思いましたか」と尋ねると，「現地の人のために活動していた人が，現地の人に殺されるのはやりきれない」という同じような答えが返ってきた。

この受け答えは，面接試験の受け答えとして何の問題もない。

しかし，個人的にはどうしてもやりすごせない点がいくつかある。

第一に，日本のアフガニスタンに対する関わりの問題である。

2001年9・11アメリカ同時多発テロが起きる。アメリカはその首謀者をアルカイダとビン＝ラディンと断定し，アフガニスタンのタリバン政権がビン＝ラディンを保護しているという理由で，10月7日にイギリスともにアフガニスタンへの空爆を開始する。11月には米軍の支援を受けた北部同盟軍が首都カブールを制圧する。

日本はこの「戦争」を支持し，テロ特措法によって，11月に海上自衛隊をインド洋に派遣し，米軍などへの給油支援活動を行っている。

今回の伊藤氏殺害事件は，単なる金目当てである可能性が高いようだ。しかし，アフガニスタンの現地の人々が，自らの土地を侵略し続けている米軍を支援する敵国人として日本人を見るのは当然のことなのだ。

今年6月には，日本政府が陸上自衛隊のアフガニスタン派遣を検討していることが報道された（その後断念）。

中村哲氏は，「日本人スタッフの安全が保てなくなる」ということで，これを強く非難した。

いつ解散するのかだけが焦点になっている国会で，何の実質的審議もなく新テロ特措法が延長され，海上自衛隊のインド洋派遣が継続されようとしている（10/28現在）。

米軍によるアフガニスタン戦争の実態は，国同士の「戦争」ですらなく，歴史の上で「アフガニスタン大虐殺」「アフガニスタン無差別殺戮」と呼ばれる日が来ると考えている人は少なくない。私もその一人だ。

伊藤氏のかけがえのない命が奪われた。それと同じように，かけがえのない，アフガニスタンの人々の何千人もの命を奪う戦争に，私たち自身が加担している。

第二に，アフガニスタンの歴史と現実である。

「アメリカ・ソ連の2国に侵略された国はどこでしょう。」

クイズや世界史で必ず出題されるだろう問題である。

答えは，アフガニスタンである。20世紀の二大強国に直接侵略されたアフガニスタンでは，大麻のためのケシ栽培が主要産業となっている。

アフガニスタンの手料理をごちそうしてくれた留学生は，タリバンなどがない時代に日本にやってきたが，政治的事情で故国に帰ることはありえないという「亡国の人」であった。

タリバンだ，アルカイダだと「悪の元凶」を決めつけて，それを一掃すれば，平和が訪れるというような単純な発想は，国際政治でははじめから間違っている。

大国の侵略と介入を受け続けてきた，政治的・経済的な傷跡は深い。それに絶望せず，現地の人々の自立をはかるペシャワール会の活動には頭が下がる。

琉球新報9月3日村上優氏の伊藤氏への追悼文を参考にしました。

伊藤氏とアフガニスタンの多くの人々の死を悼み，ご冥福を祈ります。

5-5 ヨーロッパ・アフリカ

『拡大ヨーロッパの挑戦―アメリカに並ぶ多元的パワーとなるか』羽場久泥子（中公新書）

『バチカン』郷富佐子（岩波新書）

郷富佐子は朝日新聞記者。シドニー支局長（2017年7月現在）。

『アフリカ・レポート―壊れる国，生きる人々』松本仁一（岩波新書）

『新・現代アフリカ入門―人々が変える大陸』勝俣誠（岩波新書）

第6章 沖縄

6-1 沖縄戦

『証言　沖縄「集団自決」―慶良間諸島で何が起きたか』謝花直美（岩波新書）
『沖縄戦「集団自決」を生きる―渡嘉敷島，座間味島の証言』森住卓（高文研）
『沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕―国内が戦場になったとき』石原昌家（集英社新書）
『写真記録「これが沖縄戦だ」改訂版』大田昌秀（那覇出版社）
『久米島の「沖縄戦」―空襲・久米島事件・米軍政―』大田昌秀（沖縄国際平和研究所）
大田元知事が亡くなった日に読了した。軍隊は住民を守らない。軍隊は住民を虐殺する。
『戦場の宮古島と「慰安所」―12のことばが刻む「女たちへ」』
日韓共同「日本軍慰安所」宮古島調査報告団・洪伸玩編（なんよう文庫）
日本軍性奴隷制被害者の女性たちの故郷の12の言語―つまりオーストラリア，ビルマ，中国・台湾，グアム，インドネシア，マレーシア，日本，韓国・朝鮮民主主義人民共和国，オランダ，タイ，フィリピン，東チモール，ベトナムの12の言語で祈念碑は刻まれている。ベトナム語は，ベトナム戦争で韓国軍兵士による性暴力被害を受けたベトナムの女性たちのためのものである。
『フォト・ドキュメント 骨の戦世―65年目の沖縄戦』比嘉豊光・西谷修編（岩波ブックレット）
『戦争と沖縄』池宮城秀意（岩波ジュニア新書）
池宮城秀意は琉球新報元社長・会長（1907～89年）。
比嘉春潮「私は大和世になって11年目の明治22年に，結髪姿で大和世式の西原小学校に5つ上の兄といっしょに入学した。そのころは西原のような農村では，農業をするには学問は要らないと，なかなか学校には行き手がない。それで各村（いまの字）に生徒数を割り当てて強制的に入れた。まるで徴兵制であった。ただし兄と私は首里からの居住人（士族が廃藩のために田舎に移り住んだ）だからみずから進んで入学した。いわば志願兵であった」「今日では小学児童というが，そのころの生徒は児童ではなかった。私のように10歳以下のは1，2割くらいで，だいたいが14，5歳。17，8歳以上の者も相当数いて，なかには煙草入れをぶらさげて，休み時間になると小使室に行って煙をはいている者もいた」
『兵隊先生―沖縄戦，ある敗残兵の記録』松本仁一（新潮社）
松本仁一は元朝日新聞記者。カラシニコフなど戦争を追う記者の執念の原点が沖縄にあった。沖縄の戦後，米軍統治，教育がどのようにして始まったのか，ある敗残兵を通して知ることができる。
『ぼくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ―サトウキビの島は戦場だった』具志堅隆松（合同出版）

6-2 基地・沖縄問題

『米軍と農民―沖縄県伊江島』阿波根昌鴻（岩波新書）
『沖縄ノート』大江健三郎（岩波新書）
1935年・37年生まれの教師が中心になった劇団の活動場所として，越来中学校が出てくる。「沖縄からコザ高校の学生200人近くが万国博を見物にやってくる」とコザ高校も出てくる。
『沖縄密約―「情報犯罪」と日米同盟』西山太吉（岩波新書）
『沖縄「戦後」ゼロ年』目取真俊（NHK出版新書）
元県立高校教師として，沖縄県の教育は津嘉山教育長以降悪くなったと名指しで批判している。
『同盟漂流（上下）』船橋洋一（岩波現代文庫）
『「アメとムチ」の構図―普天間移設の内幕』渡辺豪（沖縄タイムス社）

『沖縄基地とイラク戦争―米軍ヘリ墜落事故の深層』伊波洋一・永井浩（岩波ブックレット）
『本土の人間は知らないが，沖縄の人はみんな知っていること―沖縄・米軍基地ガイド』
　須田慎太郎写真・矢部宏治文・前泊博盛監修（書籍情報社）
　ルース＝ベネディクトの『菊と刀』について。「オーストラリア大学のガバン・マコーマック教授によると，「ベネディクトは，長期にわたって日本を米国に従属させるためには，日本文化の基底には言葉にできない，非アジア的な天皇中心の『文化パターン』がある，という考えを広めると効果があると結論づけた。日本が心理的にアジアと距離をおけば，決してアジア諸国と共同歩調をとれないだろうし，アメリカに依存しつづけるはずだと分析したのだ」ということです」。日本人はベネディクトに集団洗脳されてしまったのだろうか。
『本当は憲法よりも大切な「日米地位協定入門」』前泊博盛編著（創元社）
『もっと知りたい！　本当の沖縄』前泊博盛（岩波ブックレット）
『沖縄と米軍基地』前泊博盛（角川oneテーマ21新書）
　前泊博盛は沖縄国際大学大学院教授。元琉球新報論説委員長。
『犠牲のシステム　福島・沖縄』高橋哲哉（集英社新書）
『沖縄の米軍基地―「県外移設」を考える』高橋哲哉（集英社新書）
　高橋哲哉は東京大学大学院総合文化研究科教授。専攻は哲学。
『無意識の植民地主義』野村浩也（御茶の水書房）
『沖縄独立宣言―ヤマトは帰るべき「祖国」ではなかった』大山朝常（現代書林）
『沖縄発―復帰運動から40年』川満信一（情況新書）
　川満信一は詩人。反復帰論・琉球共和社会憲法C私（試）案で有名。2016年4月24日沖縄教員塾で講演会をしていただいた。
『焼きすてられた日の丸〔増補版〕―基地の島・沖縄読谷から』知花昌一（社会批評社）
『本音の沖縄問題』仲村清司（講談社現代新書）
『これが沖縄の生きる道』仲村清司＋宮台真司（亜紀書房）
『消えゆく沖縄―移住生活20年の光と影』仲村清司（光文社新書）
　仲村清司は作家・沖縄大学客員教授。大阪市生まれの沖縄人2世。同じころに沖縄移住しているので，目で見ている沖縄が同じ期間なので共感するところが多い。
『癒しの島，沖縄の真実』野里洋（ソフトバンク新書）
『沖縄力の時代』野里洋（ソフトバンク新書）
『沖縄幻想』奥野修司（洋泉社の新書y）
『お笑い沖縄ガイド―貧乏芸人のうちなーリポート』小波津正光（NHK出版新書）
『沖縄の不都合な真実』大久保潤・篠原章（新潮新書）
『国防政策が生んだ沖縄基地マフィア』平井康嗣・野中大樹（七つ森書館）
『沖縄　本土メディアが伝えない真実』古木杜恵（イースト新書）
『世界　臨時増刊2015年4月号　沖縄何が起きているのか』（岩波書店）
『沖縄問題―リアリズムの視点から』高良倉吉編著（中公新書）
『観光コースでない沖縄』新崎盛暉・謝花直美・松元剛他（高文研）
『100の指標からみた沖縄県のすがた』沖縄県企画部統計課（沖縄県統計協会）

6-3 琉球・沖縄史

『教養講座 琉球・沖縄史』新城俊昭（東洋企画）
『本音で語る沖縄史』仲村清司（新潮文庫）
『沖縄現代史　新版』『日本にとって沖縄とは何か』新崎盛暉（岩波新書）

『沖縄現代史―米国統治，本土復帰から「オール沖縄」まで』櫻澤誠（中公新書）
『フォト・ストーリー　沖縄の70年』石川文洋（岩波新書）
『島人もびっくり　オモシロ琉球・沖縄史』上里隆史（角川ソフィア文庫）
『海の王国・琉球―「海域アジア」屈指の交易国家の実像』上里隆史（歴史新書y）
上里隆史は早稲田大学琉球・沖縄研究所招聘研究員。専攻は古琉球史，海域アジア史。
『琉球王国』高良倉吉（岩波新書）
『ナツコ―沖縄密貿易の女王』奥野修司（文春文庫）
奥野修司はフリージャーナリスト。戦後直後の「沖縄」を知ることができる。
「当時は「男は戦果，女は体当たり」という言葉が流行った。“体当たり”とはむろん売春のことである。米軍には若い兵隊が多く，沖縄女性の“体当たり”は効果てきめんだった。現在の沖縄市がコザ市と呼ばれた頃に4期16年間市長を務め，基地経済からの脱却を生涯にわたって訴えつづけた大山朝常は，死去する2年前の1997年，こんな話を飄々と2時間以上にわたって語ってくれたことがある。
「戦後，私は小学校の校長をしていました。職員の給料は1日米1合でした。これじゃ生きて生かれんです。3人の仲間とトラックを借りましてね。米軍の倉庫に行ったです。そのとき女も連れていきました。英語のうまい仲間が米兵と交渉するんです。女が欲しければ目をつむってくれって。すると『欲しいものがあれば全部持って行け』ですよ。日本軍なら在庫を計算するが，連中はそんなことやらない。それより女が欲しいから，女をくっつけたらすぐOKです。おかげでトラックいっぱいの缶詰を運びました。材木もいらないというから，これも運んで校舎を建てましたよ。ただ，連中は見えるとこでもナニするもんだから，女が嫌がって困ったことがありました。あれは女次第ですなぁ。」」
『沖縄だれにも書かれたくなかった戦後史（上下）』佐野真一（集英社文庫）

6-4　琉球・沖縄文化

『沖縄からアジアが見える』比嘉政夫（岩波ジュニア新書）
『沖縄を識る―琉球列島の神話と祭り』比嘉政夫（歴博ブックレット④）
比嘉政夫（1936～2009年）は琉球大学教授・沖縄大学地域研究所長などを務めた。専攻は社会人類学。『沖縄からアジアが見える』は，沖縄生まれの人に一番のお薦めの本。県立高校入試でも出題された。ある店で，著者ご本人と偶然会うことができた。その際に『沖縄を識る―琉球列島の神話と祭り』をサイン入りでいただいた。
『新書　沖縄読本』下川裕治・仲村清司著編（講談社現代新書）
『沖縄文化論―忘れられた日本』岡本太郎（中公文庫）
平成26年度実施選考試験・専門国語で出題された。
『日本人の魂の原郷　沖縄久高島』比嘉康雄（集英社新書）
『まれびとたちの沖縄』与那原恵（小学館101新書）
与那原恵はノンフィクションライター。「第2章　為朝はまた来る？　「琉球本」の系譜」で，滝沢馬琴『椿説弓張月』について触れられている。他の章では，田島利三郎・ベッテルハイム・田辺尚雄と日劇ダンシングチームが取り上げられている。
『甦える海上の道―日本と琉球』谷川健一（文春新書）
谷川健一は民俗学者（1921～2013年）。第一尚氏の起源として，折口信夫の説が以下のように紹介されている。「肥後の佐敷は，折口信夫が琉球国の第一尚氏の出自の地として重視しているところである。このことはすでに馬琴も気が付いていて『弓張月』の末尾に……「琉球の地名に，九州の地名を擬したりとおもうものすくなからず，肥後に佐敷と唱うる所あり」……琉球の佐敷が第一尚氏の根拠地であったことは言うまでもない。」肥後八代の「名和氏の一統あるいは分派」は「肥後海賊のくずれで伊平屋の島を経て沖縄島の東南部，

知念半島の一角に上陸して，佐敷に根拠地を設けた。それが第一尚氏のはじまりであることは，折口信夫の説くところである。」第一尚氏の「初代王の尚思紹は，苗代大親（なわしろうふや）と称した。苗は名和に通じ，代は八代に通じる，と折口はいう。」名和＝苗＝尚であり，筆者はこの説を支持している。

『沖縄生活誌』高良勉（岩波新書）

『ウチナーグチ（沖縄語）練習帖』高良勉（NHK出版新書）

高良勉は詩人，元県立高校教師（化学）。結婚式で同席したことがある。

『沖縄を撃つ！』花村萬月（集英社新書）

『母なる海から日本を読み解く』佐藤優（新潮文庫）

「沖縄・久米島から日本国家を読み解く」から改題。

『よくわかる御願ハンドブック〈増補改訂〉』（ボーダーインク）

『沖縄苗字のヒミツ』武智方寛（ボーダー新書）

『沖縄イメージを旅する―柳田國男から移住ブームまで』多田治（中公新書ラクレ）

多田治は琉球大学法文学部助教授から一橋大学大学院社会学研究科教授。家族の住む沖縄と職場の東京との二重生活をしている。1970年生まれ。現在の沖縄の歴史・文化ブームは，日本最大の広告代理店「電通」によって作り出されたというような「目から鱗（うろこ）が落ちる」話がたくさんある。1924年まで大阪から台湾は1万トンの船で4日間，沖縄は1,500トンの船で1週間かかったということなので，「本土」から台湾よりは沖縄の方が遠かった。この時代に訪れたのが柳田国男や折口信夫。1937年4,700トンの船の導入に伴い，本格的な「沖縄パックツアー」が誕生する（1940年まで）。この時代に繰り返し訪れたのが柳宗悦。

『那覇の市場で古本屋―ひょっこり始めた〈ウララ〉の日々』宇田智子（ボーダーインク）

『本屋になりたい―この島の本を売る』宇田智子（ちくまプリマー新書）

宇田智子さんは，市場の古本屋「ウララ」店主。2016年2月28日に沖縄教員塾で講演をしていただいた。その前後の話を，講談社の「読書人の雑誌『本』」の連載エッセー「ほんの序の口28」に書いていただいた（2016年4月号）。

第7章　人間･心理･精神医学

7-1 心理

『やさしい教育心理学　第 4 版』鎌原雅彦・竹綱誠一郎（有斐閣アルマ）
『心理学の名著30』サトウタツヤ（ちくま新書）
パブロフ・スキナー・ボウルビー・ヴィゴーツキー・ピアジェ・ケーラー・レヴィン・マズロー・ブルーナーなど教育心理学で出題される人々が出てくる。
『カウンセラーは何を見ているか』信田さよ子（医学書院）
『セラピスト』最相葉月（新潮文庫）
ロジャーズが日本にどのように受容されたのかがわかる。
『感じない子ども―こころを扱えない大人』袰岩奈々（集英社新書）
袰岩奈々は，心理カウンセラー，不登校生徒と家族の元教育相談員。不登校の子どもとのかかわりについて次のように記している。「彼らとのやりとりのなかで「どうして学校に行けないの？」と問うことが，どんなに意味のないことかを学んだ。彼らは質問されることにうんざりしている。自分だってそれがわからなくてイライラしているというのに。だから，彼らと話すときにはよく「私」の話をした」。
『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか―児童精神科医の現場報告』古荘純一（光文社新書）
古荘純一は青山学院大学教育人間科学部教授，小児科医，児童精神科医。「ユニセフの幸福度調査で，「孤独を感じる」と答えた15歳児の割合が，日本は29.8％で突出した1位（2位はアイスランドの10.3％。最下位のオランダは2.9％）だった。
『おとなが育つ条件―発達心理学から考える』柏木惠子（岩波新書）
柏木惠子は東京女子大学名誉教授。専攻は発達心理学・家族心理学。1932年生まれ。
『増補　オオカミ少女はいなかった―スキャンダラスな心理学』鈴木光太郎（ちくま文庫）
鈴木光太郎は新潟大学人文学部教授。専門は実験心理学。人間はオオカミの乳を消化できない。オオカミに育てられることはありえない。カマラが「オオカミのように」木に登っている写真が残っているが，オオカミは木に登ることができない。その他たくさんの理由によって，「オオカミ少女はいなかった」と結論づけている。
オオカミ少女以外に7つの心理学の神話を取り上げている。行動主義心理学を創始したワトソンが，有名な「アルバート坊やの実験」の助手を務めた大学院生と不倫関係になり，大学から追放されてしまう話はおもしろい。37歳でアメリカ心理学会会長を務めたワトソンの心理学者としてのキャリアは，そのとき42歳で終わっているのだ。
『ヒトの心はどう進化したのか―狩猟採集生活が生んだもの』鈴木光太郎（ちくま新書）
『「死ぬくらいなら会社辞めれば」ができない理由』汐街コナ（あさ出版）
過労で，うつ病になる前に読むべき本である。ほぼ漫画。

7-2 精神医学

『やさしさの精神病理』大平健（岩波新書）
『ゆたかさの精神病理』大平健（岩波新書）
『純愛時代』大平健（岩波新書）
『貧困の精神病理―ペルー社会とマチスタ』大平健（岩波書店）
『顔をなくした女―〈わたし〉探しの精神病理』大平健（岩波現代文庫）

『マンガで考える精神病理』大平健（講談社）
『食の精神病理』大平健（光文社新書）
『診療室にきた赤ずきん―物語療法の世界』大平健（新潮文庫）
大平健は精神科医。彼の著作が読まれた理由は，『岩波新書で「戦後」をよむ』小森陽一・成田龍一・本田由紀（岩波新書）で分析されている。同書で取り上げられた全21冊の岩波新書のうちの1冊が『やさしさの精神病理』である。
『「悩み」の正体』香山リカ（岩波新書）
『いまどきの「常識」』香山リカ（岩波新書）
『若者の法則』香山リカ（岩波新書）
『犯罪心理学入門』福島章（中公新書）
『犯罪精神医学入門―人はなぜ人を殺せるのか』福島章（中公新書）
『死刑囚の記録』加賀乙彦（中公新書）
『精神鑑定の事件史』中谷陽二（中公新書）
『精神科医になる―患者を〈わかる〉ということ』熊木徹夫（中公新書）
『精神医療に葬られた人びと―潜入ルポ　社会的入院』織田淳太郎（光文社新書）
『精神医学とナチズム―裁かれるユング，ハイデガー』小俣和一郎（講談社現代新書）
『精神医学の歴史』小俣和一郎（レグルス文庫）
『異常とは何か』小俣和一郎（講談社現代新書）
小俣和一郎は精神科医・精神医学史家。ユングの戦争責任をしっかりと追及している。この点に問題意識すらもたないユング系の心理学者・カウンセラーばかりの中で，信頼できる人である。
『はじめての認知療法』大野裕（講談社現代新書）
大野裕は国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター長。認知療法を開発したアメリカの精神科医ベックに直接学んでいる。
『はじめての森田療法』北西憲二（講談社現代新書）
『思春期ポストモダン―成熟はいかにして可能か』斎藤環（幻冬社新書）
斎藤環は精神科医。専門は，思春期・青年期の精神病理学，病跡学，ラカンの精神分析，「ひきこもり」問題の治療・支援ならびに啓蒙活動。「いじめ体験はしばしば，もっとも重いタイプのPTSDをもたらすことがある」。「長くいじめを経験した人は，加害者の攻撃性をそのまま自分のものにしてしまうことがある。結果として，いじめの被害者まで非常に攻撃的な人間になってしまうのだ。その矛先が他人に向かうと家庭内暴力などになるし，自分に向かうと自殺になってしまいかねない。実際，いじめ体験から何年も経って自殺する事例は少なくないのだ」。
「2002年度にはじめて，不登校が減少に転じたことがあった」。「2002年4月から公立校の週5日制がはじまったことが一番大きな原因だったように思う」。「それを「登校刺激」と呼ぶかどうかはともかく，教師や家族が不登校の子どもになんとかして「関わり」を持ち続けようとする努力は，むしろ欠かせないものではないだろうか」。
『博士の奇妙な思春期』斎藤環（日本評論社）
『関係する女　所有する男』斎藤環（講談社現代新書）

7-3　人間

『ケータイを持ったサル―「人間らしさ」の崩壊』正高信男（中公新書）
『父親力―母子密着型子育てからの脱出』正高信男（中公新書）
『家族幻想―「ひきこもり」から問う』杉山春（ちくま新書）

『バカの壁』『死の壁』『「自分」の壁』養老孟司（新潮新書）
『人は見た目が9割』『やっぱり見た目が9割』竹内一郎（新潮新書）
面接試験は第一印象が一番大切です。そのためには日々の生活です。
『言ってはいけない―残酷すぎる真実』橘玲（新潮新書）
新書大賞2017受賞。
『悩む力』『続・悩む力』姜尚中（集英社新書）
『現実脱出論』坂口恭平（講談社現代新書）
『自分を愛する力』乙武洋匡（講談社現代新書）
乙武洋匡は『五体不満足』の著者。杉並区立杉並第四小学校教諭を3年務めた。「むずかしいことはわかっている。それでも，僕らが「平均」や「標準」というモノサシを捨て，その子なりの特性や発育のペースを尊重してあげることができたら，――きっと，幸せな子どもが増えていくと思うのだ。」
『動詞人間学』作田啓一・多田道太郎（講談社現代新書）
『子どもと話すマッチョってなに？』クレマンティーヌ・オータン（現代企画室）
著者はフェミニスト，強姦被害者。訳者は上高の大学の同級生。
「下町に住んでいて，社会から除け者にされていると感じているような若者は，マッチョな言動に身を任せてしまいがちというのもまた確か。社会から締め出されていても，女性に対する優越感を表現することによって自分の価値を高めることができて，自己愛を取り戻せるからね。」

第8章 言語

8-1 全般

『ことばと国家』田中克彦（岩波新書）

田中克彦は言語学者。一橋大学名誉教授。専攻は，言語学・モンゴル学。上高の言語の先生です。沖縄の国語教師の必読書。ウチナーグチを日本語の方言ととらえるか，それとも独立した言語ととらえるかは，政治の問題であることがわかる。

『言語学とは何か』田中克彦（岩波新書）

『エスペラント―異端の言語』田中克彦（岩波新書）

「1922年には『武士道――日本の魂』の著者として知られる新渡戸稲造と民俗学者の柳田国男が共同で国際連盟に働きかけ，世界中の公立学校でエスペラントを教えるよう決議を求めた。提案は，フランス語以外の言語は世界語たるの資格がないと主張するフランスの強い反対を押しきって可決された」。

『名前と人間』田中克彦（岩波新書）

『日本語と外国語』鈴木孝夫（岩波新書）

『対論　言語学が輝いていた時代』鈴木孝夫・田中克彦（岩波書店）

鈴木孝夫は慶応大学名誉教授。専攻は，言語社会学。

『ことばの力学―応用言語学への招待』白井恭弘（岩波新書）

『外国語学習の科学―第二言語習得論とは何か』白井恭弘（岩波新書）

白井恭弘はピッツバーグ大学言語学科教授。専攻は言語学，言語習得論。

『消滅する言語―人類の知的遺産をいかに守るか』デイヴィッド・クリスタル（中公新書）

『世界の言語入門』黒田龍之介（講談社現代新書）

『言語世界地図』町田健（新潮新書）

『ナチ・ドイツと言語―ヒトラー演説から民衆の悪夢まで』宮田光雄（岩波新書）

『コミュニケーション力』齊藤孝（岩波新書）

『アイヌ語地名で旅する北海道』北道邦彦（朝日新書）

8-2 英語

『日本の英語教育』山田雄一郎（岩波新書）

『英語教育はなぜ間違うのか』山田雄一郎（ちくま新書）

山田雄一郎は広島修道大学教授，専攻は言語政策，英語教育。英語教育論で信頼できる学者の一人。

『TOEFL・TOEICと日本人の英語力』鳥飼玖美子（講談社現代新書）

『英語教育，迫り来る破綻』大津由紀雄・江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子（ひつじ書房）

鳥飼玖美子は立教大学教授。アポロ11号の月面着陸などの同時通訳を行った。小学校での英語教育に反対する論陣を張っている。英語教育論で信頼できる学者の一人。

江利川春雄は和歌山大学教授。「学びの共同体」にも関わっている。

『英語の歴史―過去から未来への物語』寺澤盾（中公新書）

寺澤盾は東京大学教授。軍事＝政治＝経済の力で，インド＝ヨーロッパ語族の中でも，「特殊」で「厄介」な言語が国際語になってしまったことが分かる。たとえば，綴り字と発音に対応関係がなかったり，語順ではなく助動詞doで疑問文を作ったりする英語は，ヨーロッパの諸言語の中でも「特殊」である。

『日本人の英語』マーク・ピーターセン（岩波新書）

著者は明治大学政治経済学部教授。アメリカ出身。コロラド大学で英米文学，ワシントン大学大学院で日本文学を専攻，1980年フルブライト留学生として来日，東京工業大学にて「正宗白鳥」を研究。

『語源でふやそう英単語』小池直己（岩波ジュニア新書）

第9章　日本語･日本文学論

言語と文学（とりわけ詩）は，歴史的にも本質的にも切り離すことができない。だから日本語と日本文学論の項目は，長くなるが一つにまとめている。

9-1　日本語

『日本語練習帳』大野晋（岩波新書）
『日本語の教室』大野晋（岩波新書）
『日本語の源流を求めて』大野晋（岩波新書）
『日本語の文法を考える』大野晋（岩波新書）
『古典文法質問箱』大野晋（角川ソフィア文庫）
『古典基礎語の世界―源氏物語のもののあはれ』大野晋（角川ソフィア文庫）

大野晋（1919～2008年）は国語学者。学習院大学名誉教授。上高の日本語の先生です。

古語辞典は**『岩波古語辞典　補訂版』**，国語辞典は**『角川必携国語辞典』**がお薦めである。いずれも大野先生が編者である。

『孤高　国語学者大野晋の生涯』川村二郎（集英社文庫）
『日本文学史序説（上下)』加藤周一（ちくま学芸文庫）

加藤周一（1919～2008年）は評論家。英・仏・独・伊・韓・中・ルーマニアなどの各国語に翻訳されている。十返舎一九の伝説として次の話が紹介されている。辞世の狂歌「此世をば　どりやおいとま　せん香と　ともにつひには　灰左様なら」。「そして遺言として，棺のなかに花火を仕掛けさせた。その屍を焼くと，花火は四方に飛び散ったという」。

『日本文学史序説補講』加藤周一（かもがわ出版）

札幌農学校について。「教師は従軍経験者だったのです。彼らは，ニューイングランドから来た信仰の篤いプロテスタントの牧師たちでした。明治維新が1868年で，牧師たちは1870年代に来日しますから，アメリカで南北戦争が終ったところだった。維新前のサムライの息子たちが教会で出会った牧師は，戦場を駆け巡った経験のある北軍の元将校だった。維新の動乱のなかを生き抜いてきたサムライの子弟にとって，話を聞いてみると，彼らはうちの親父に似ている，ということになったでしょう」。内村鑑三も新渡戸稲造も武士の子であり，彼らはいずれも「武士道とプロテスタント」を一つのものと主張した。

『日本文学史』小西甚一（講談社学術文庫）
『日本語の歴史』山口仲美（岩波新書）

山口仲美は明治大学国際日本学部教授。専攻は日本語学（日本語史，擬声語研究)。一般向けに，日本語史の焦点を，奈良時代（文字)・平安時代（文章)・鎌倉室町（文法)・江戸時代（音韻語彙）と変えているのが斬新で読みやすかった。

『日本語の古典』山口仲美（岩波新書）

30作品について1つのテーマを設けて，解説している。『曾根崎心中』について。「(1703年4月7日の）2人の心中事件は，当時の人々の心を打ち，すぐに歌舞伎となって演じられました。一方，近松門左衛門も心中現場に取材に行き，人形の演じる語り物『曾根崎心中』を僅か20日余りで書き下ろし，5月7日に竹本座で上演」。「実にリズミカルな名文。なにしろ，七音と五音の繰り返しから成り立っている。一番整えにくい会話までも七五調なんですよ！」

『犬は「びよ」と鳴いていた―日本語は擬音語・擬態語が面白い』山口仲美（光文社新書）
『翻訳語成立事情』柳父章（岩波新書）

日本語を考える・教える上で必読の一冊です。

『日本語教室』井上ひさし（新潮新書）

井上ひさし（1934～2010年）は作家。母校・上智大学での連続講義録なので読みやすい。

『日本語の奇跡―〈アイウエオ〉と〈いろは〉の奇跡』山口謡司（新潮新書）

『日本語と時間―〈時の文法〉をたどる』藤井貞和（岩波新書）

藤井貞和は立正大学文学部教授，詩人。専攻は日本古典文学，言語態分析。次の考えに賛成。「〈詩のことば〉があって，そこから散文のことばが発達してきた。散文という複雑な言語装置の持つ基本の基本，出発点は〈詩のことば〉のうちにあるはずだ。」

『百年前の日本語―書きことばが揺れた時代』今野真二（岩波新書）

今野真二は清泉女子大学教授。専攻は日本語学。表記の統一などという面倒なことが，百年前にはなかったことがわかる。

『日本語の考古学』今野真二（岩波新書）

「藤原定家は，少なくとも18回『古今和歌集』を書写したことが，現在残されている『古今和歌集』の奥書などからわかっている。」

『増補　日本語が亡びるとき―英語の世紀の中で』水村美苗（ちくま文庫）

水村美苗は作家で，アメリカのプリンストン大学などで日本近代文学を教えた。日本語と英語のバインリガルで，フランス語で講演を行ったことがある。2009年小林秀雄賞受賞。

「学校教育とは，ある言葉を教えることによって，その言葉を〈国語〉に育て上げることもできる代わりに，ある言葉を教えないことによって，その言葉を亡ぼすこともできる」。

「教育とは最終的には時間とエネルギーの配分でしかない」。

「教育とは家庭環境が与えないものを与えることである。教育とは，さらには，市場が与えないものを与えることである」。

「日本の国語教育はまずは日本近代文学を読み継がせるのに主眼を置くべきである」。「具体的には，翻訳や詩歌も含めた日本近代文学の古典を次々と読ませる。しかも，最初の一頁から最後の一頁まで読ませる」。

『曲り角の日本語』水谷静夫（岩波新書）

水谷静夫は国語学者。『岩波国語辞典』の編纂に初版（1963年）から第7版（2009年）までかかわる。

『日本の方言』柴田武（岩波新書）

柴田武（1918～2007年）の専攻は言語学。1958年の出版なので，沖縄が日本ではなかった時代に書かれた「日本の方言」についての本である。だから「琉球も，今後，ながい間，内地と政治的に分離されることがあれば，たとえば，奄美群島の方言とのちがいはいっそう大きくなる可能性がある」とある。尾鷲を「オワシ」と読むのか，「オワセ」と読むのかについて書かれているのが興味深い。尾鷲の方言では「オワシェ」だったのである。

『さすらいの仏教語―暮らしに息づく88話』玄侑宗久（中公新書）

『「国語」の近代史―帝国日本と国語学者たち』安田敏郎（中公新書）

『外国語としての日本語』佐々木瑞枝（講談社現代新書）

『日本語という外国語』荒川洋平（講談社現代新書）

『日本語の宿命―なぜ日本人は社会科学を理解できないか』薬師院仁志（光文社新書）

薬師院仁志は帝塚山学院大学リベラルアーツ学部教授。専攻分野は社会学理論，現代社会論，教育社会学。

『女ことばと日本語』中村桃子（岩波新書）

『やさしい日本語―多文化共生社会へ』庵功雄（岩波新書）

9-2 漢字･かな

『漢字―生い立ちとその背景―』白川静（岩波新書）
『漢字百話』白川静（中公新書）
『白川静―漢字の世界観』松岡正剛（平凡社新書）
白川静（1910～2006年）の専攻は中国文学。白川静の**『常用字解［第二版］』**（平凡社）を小学校教師・国語教師は活用してください。
『漢字伝来』大島正二（岩波新書）
『部首のはなし―漢字を解剖する』『部首のはなし２―もっと漢字を解剖する』阿辻哲次（中公新書）
『漢字を楽しむ』阿辻哲次（講談社現代新書）
『漢字再入門―楽しく学ぶために』阿辻哲次（中公新書）
阿辻哲次は京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専門は中国語学，とりわけ漢字を中心とする文化史。小学校の国語教科書の編集にも携わっている。上高の漢字の先生です。
『日本の漢字』笹原宏之（岩波新書）
『訓読みの話―漢字文化圏の中の日本語』笹原宏之（角川ソフィア文庫）
笹原宏之は，早稲田大学社会科学部・社会科学総合学術院教授。経済産業省の「JIS漢字」，法務省法制審議会の「人名用漢字」，文部科学省・文化庁文化審議会国語分科会の「常用漢字」などの制定・改正に携わる。中学生で『大漢和辞典』を購入し通覧するほどの漢字オタク。上高の漢字の先生です。
沖縄の最古の寺院は浦添の補陀落山極楽寺だが，補陀落山は観音菩薩の住む浄土である。それは，チベットの宮殿「ポタラ宮」とも，日光とも同じ語源である。「ポータラカ山」（サンスクリット語）→漢字を当てて「補陀落（フダラク）山」→発音が変わり「ふたら山」→漢字で「二荒山」→音読みして「ニコウ山」→佳字（縁起がよい漢字）が当てられ「日光山」→江戸時代の漢学者が一字に詰めて「晃山」の表記も。
『漢字の歴史―古くて新しい文字の話』笹原宏之（ちくまプリマー新書）
『漢字に託した「日本の心」』笹原宏之（NHK出版新書）
『漢字からみた日本語の歴史』今野真二（ちくまプリマ―新書）
「日本語を書くための文字としての仮名がうまれてからも漢字を使い続けている。したがって，「日本語を漢字で書く」ということは，日本語の歴史全体を覆っていることがらであることになる。つまり「日本語を漢字で書く」ということに関しては，日本語の歴史は一貫していて，どこにも「切れ目」がないともいえる。」
『振仮名の歴史』今野真二（集英社新書）
『漢字は日本語である』小駒勝美（新潮新書）
『漢字が日本語をほろぼす』田中克彦（角川SSC新書）
『筆順のはなし』松本仁志（中公新書ラクレ）
松本仁志は広島大学大学院教育学研究科准教授。専門は文学・書写の教育。「小学校学習指導要領解説国語編」作成協力者。広島大学附属中・高等学校教諭も経験。
『かな―その成立と変遷』小松茂美（岩波新書）
『かなづかいの歴史』今野真二（中公新書）
「片仮名は漢文を訓読する場において，訓点（ヲコト点，返り点，送り仮名など）を書くためにうまれたと考えられている。漢文に訓点を施すためにうまれたのだから，片仮名はそもそも漢字と併用することが前提であったことになる。一方平仮名にはそうした前提はなかった。漢字と併用することが前提なのだから，片仮名が独立した文字となるためには漢字から離れる必要が必要があった。しかしまた併用が前提であるのだから，形態的にあまり漢字と離れすぎると融和性がなくなる。片仮名が漢字の部分を採っているのは，そうしたことにも関わりがあると考える。」

9-3 古文

『検定絶対不合格教科書　古文』田中貴子（朝日新聞社）

田中貴子は甲南大学教授。専門は中世の説話文学。上高の古文の先生です。「第一部　教科書を読み直す」では，多くの教科書にとりあげられている5作品（『宇治拾遺物語』『枕草子』『伊勢物語』『徒然草』『平家物語』）について，最新の研究から疑問点・批判点が示されている。たとえば，「児のそら寝」『宇治拾遺物語』について，「かいもちひ」を作っていた僧たちが，「児」に敬語を使っているのは，僧たちが「児」を性愛の対象として見ていたからではないか，と筆者は推測している。

「第二部　教科書には載らない古文を読む」では，教科書で隠蔽されている性も宗教もすべてあり。ロストバージンも『源氏物語』「紫の上」含め2つ取り上げられている。

「第三部　論説編―国語教科書の古文，ここがヘン！」では，国語教育批判が行われている。学習指導要領を，「もっとも近い『外国』である朝鮮の文学との関係はいまだに無視されたままであるし，『日本のなかの外国』として扱われることの多い琉球についてもなんら言及がない」と批判している。「古文でも現代文でも，深い読書行為を行った場合，必ずや国家がめざしているものへの批判や矛盾が噴出する可能性があるものだから，あくまで『深く考えないけど学力があるよいこちゃん』を育成しようとしているのである」。

『セクシィ古文』田中貴子・田中英一（メディアファクトリー新書）

著者の田中英一は漫画家。「古文の引用→現代語訳（漫画付き）→著者の解説」という構成。最後にはセクシィ古語辞典まで付いている。「「嫁ぐ」はもともと「と」＝陰門（女性器）を「接ぐ（つぐ）」＝欠けたところをふさぐ，つまり「Hする」から来た言葉なのだ」。「平安貴族の女性たちですが，実際は位が高ければ高いほど交際の相手は自由に選べませんでした。お付きの女房たちが，姫に届いた和歌（＝セックス申込書）のなかから家格の合う，将来性のありそうな男を選んで返事を書き，ある夜，その男を寝所に送り込むのです。……その内実はレイプである」。

『古典がもっと好きになる』田中貴子（岩波ジュニア新書）

「「古文」を理解するためには，⑴繰り返して読む，⑵状況について勘を働かせる，⑶当時の文化を理解しておく，という，この三点が重要だ」。

『古文の読解』小西甚一（ちくま学芸文庫）

昔の参考書。受験勉強の際に使った。

『知ってる古文の知らない魅力』鈴木健一（講談社現代新書）

鈴木健一は学習院大学文学部教授。専門は詩歌史，江戸時代の文学，古典の享受史。学習院大の主に1年生対象とした「日本文学史概説Ⅱ」の講義内容とほぼ同じ。『源氏物語』『平家物語』『枕草子』『おくのほそ道』『竹取物語』『伊勢物語』の6作品を中心に扱っている。「つれづれなるままに，……」は『徒然草』の冒頭として余りに有名だが，平安時代にはすでに定番表現となっており，先行する作品に「つれづれなりし折……」（和泉式部の歌集），「つれづれに侍るままに……」（『堤中納言物語』），「つれづれのままに……」（『讃岐典侍日記』）とある。「日本人の独創のように思える古典の名文にも中国文学が色濃く影を落としていて，単独で成り立つ名作というものはあり得ない」。「感動のパターンというのは何千年もの歴史の中で形成されていて，人々の心性に奥深く根付いています。人間は根っこのところでは，それほど大きく変化していないのです」。だから古文・漢文を学ぶのである。

『おもしろ古典教室』上野誠（ちくまプリマー新書）

『快楽でよみとく古典文学』大塚ひかり（小学館101新書）

『王朝文学の楽しみ』尾崎左永子（岩波新書）

『平安女子の楽しい！生活』川村裕子（岩波ジュニア新書）

『古文を楽しく読むために』福田孝（ひつじ書房）

『万葉秀歌（上下）』斎藤茂吉（岩波新書）

斎藤茂吉は歌人・精神科医（1882～1953年）。こういう本は1日1首ずつ読んでいくとよい。

『万葉びとの宴』上野誠（講談社現代新書）

『和歌とは何か』渡部泰明（岩波新書）

渡部泰明は東京大学大学院人文社会系研究科教授。専攻は和歌文学・中世文学。上高の和歌の先生です。野田秀樹率いる劇団「夢の遊眠社」の団員だった著者が，「和歌は演技している」ととらえて，そのレトリック（枕詞・序詞・掛詞・縁語・本歌取り）と儀礼的空間（贈答歌・歌合・屏風歌と障子歌・柿本人麻呂影供・古今伝授）を説明する。

『古典和歌入門』渡部泰明（岩波ジュニア新書）

『源氏物語』秋山虔（岩波新書）

『源氏物語の世界』日向一雅（岩波新書）

『光源氏の一生』池田弥三郎（講談社現代新書）

池田弥三郎（1914～82年）は国文学者・民俗学者。光源氏の一生を通して，『源氏物語』のあらすじを読める。入門書としてお薦め。1964年発行。

『源氏物語の時代―一条天皇と后たちのものがたり』山本淳子（朝日選書）

山本淳子は高校教諭を経て京都学園大学教授。上高の源氏物語の先生です。第29回サントリー学芸賞受賞。源氏物語に関する本で，『源氏物語』そのものの次にお薦めの一冊である。「一条天皇と，彼をめぐる二人の后，定子と彰子の物語を，現存する歴史資料と文学作品によって再構成したもの」である。

『平安人の心で「源氏物語」を読む』山本淳子（朝日選書）

『私が源氏物語を書いたわけ―紫式部ひとり語り』山本淳子（角川学芸出版）

『誰も教えくれなかった「源氏物語」本当の面白さ』林真理子・山本淳子（小学館101新書）

『源氏物語』大野晋（岩波現代文庫）

大野晋（1919～2008年）は国語学者。学習院大学名誉教授。藤原道長と紫式部は，男と女の関係だったのかどうかという古くからのテーマについて，国語学者の読み解きが秀逸。あったと推測し，別れのきっかけまで読み解いている。

『源氏物語ものがたり』島内景二（新潮新書）

島内景二は電気通信大学教授。源氏物語が1,000年間にわたって，どのように読み継がれてきたかを，源氏物語に取りつかれた9人の男を通して，ものがたる。本居宣長も，傍注・頭注つきのテキストで源氏物語を読んでいる。源氏物語は，口語訳で読むのでも，漫画で読むのでも，映画で見るのでも，よい。

『紫式部』清水好子（岩波新書）

『源氏物語の結婚―平安朝の婚姻制度と恋愛譚』工藤重矩（中公新書）

北の方（本妻）は同居が基本。通い婚は，序列が二番目以降の妻と愛人ということを教えられた。

『平家物語』石母田正（岩波新書）

『いくさ物語の世界―中世軍紀文学を読む』日下力（岩波新書）

日下力は早稲田大学文学学術院教授。専攻は中世軍記文学。『保元物語』･『平治物語』･『平家物語』･『承久記』を，当時の「戦後文学」として読む。軍記物話が「死」を美化する教育に悪用され，「集団自決（強制集団死）」などをもたらす伏流とされたことは知っておいてよい。『平家物語』「木曾の最期」は，今でも多くの教科書に採録されている。

『琵琶法師―〈異界〉を語る人びと』兵藤裕己（岩波新書）

兵藤裕己は学習院大学文学部教授。専攻は日本中世文学･芸能論。最後の琵琶法師と言われた山鹿良之（1901～96年）の演唱のDVDつき。視覚障害者の文化史として読むこともできる。例えば，『平家物語』を本として所持していることが，視覚障害者の組織である当道座の惣検校（総検校）の権威とされていた。「語りの正統を文字テキストとして独占的に管理することで，惣検校を頂点とした当道座のピラミッド型の内部支配が補完されたのだ」。視覚障害者の官僚機構の権威の源泉は，視覚障害者が読めない文字テキストであったのだ。

『鴨長明―自由のこころ』鈴木貞美（ちくま新書）
『新書で入門　西鶴という鬼才』浅沼璞（新潮新書）
浅沼璞は法政大学・日本大学の講師，連句人。「西鶴自身も男色を好」み，その数，千人を豪語していた。それも元服前の若衆だから少年愛である。「舞台に上がる前の修行中の歌舞伎子を陰間といったが，それが歌舞伎から離れて男色専門の少年をさすようになり，さらにカゲマをカマと略すようになる――これがオカマの語源」である。明治以来，西鶴の好色物は禁書であり，大正期でもエロティックな描写は「×」などの伏せ字だった。このように西鶴はたんなるエロ作家として扱われてきたのである。なお，西鶴は住吉神社前で一日に23,500もの俳諧を詠んだという伝説がある。
『装束の日本史―平安貴族は何を着ていたのか』近藤好和（平凡社新書）

9-4 漢文

『漢文の話』吉川幸次郎（ちくま学芸文庫）
『漢文入門』小川環樹・西田太一郎（岩波全書）
『漢文法要説』西田太一郎（朋友書店）
『漢文法基礎―本当にわかる漢文入門』二畳庵主人＝加地伸行（講談社学術文庫）
『漢文入門』前野直彬（ちくま学芸文庫）
『杜甫』川合康三（岩波新書）
『中国名文選』興膳宏（岩波新書）
興膳宏は京都大学名誉教授。専攻は中国文学。『孟子』，『荘子』，司馬遷『史記』，陶淵明，李白，柳宗元，蘇軾など12の名文を取り上げている。
『漢語日暦』興膳宏（岩波新書）
『仏教漢語50話』興膳宏（岩波新書）
『新唐詩選』吉川幸次郎・三好達治（岩波新書）
『白文攻略　漢文法ひとり学び』加藤徹（白水社）
『漢文の素養―誰が日本文化をつくったのか？』加藤徹（光文社新書）
『漢文力』加藤徹（中公文庫）
『貝と羊の中国人』加藤徹（新潮新書）
『怪力乱神』加藤徹（中央公論新社）
『新版　絵で読む漢文』加藤徹（朝日出版社）
『東洋脳×西洋脳』茂木健一郎・加藤徹（中公新書ラクレ）
加藤徹は明治大学教授。専攻は中国文学。その漢文論・中国論は，広く深くおもしろい。上高の漢文の先生です。
『受験生のための一夜漬け漢文教室』山田史生（ちくまプリマー新書）
『菜根譚―中国の処世訓』湯浅邦弘（中公新書）
『漢文と東アジア―訓読の文化圏』金文京（岩波新書）
『漢文脈と近代日本』齋藤希史（角川ソフィア文庫）
『四字熟語の中国史』冨谷至（岩波新書）

9-5 日本文学論（小説）

『海を越える日本文学』張競（ちくまプリマー新書）
張競は明治大学教授。中国上海生まれ。村上春樹は「欧米人に褒められているから」日本でも評価が高い。

三浦綾子は「東アジアに人気があったとはいえ，欧米では認められていません」。だから日本では評価が低い。鋭い。

『新しい文学のために』大江健三郎（岩波新書）

『漱石―母に愛されなかった子』三浦雅士（岩波新書）

三浦雅士は評論家。「人は，自分について考えるとき，ほとんど必ず自殺についても考えます。自殺は自分という仕組みと不可避的に結びついているのです」。「日本近代文学はじつは仁斎，徂徠から始まったと言っていい。芭蕉，西鶴，近松もその間の生まれです。仁斎，徂徠によって日本文学という概念がはっきりと打ち出された。自身の問題意識に立って中国と対等に中国の古典を論ずる，それが主体性ということの意味である。要するに自己本位ということだ」。「『吾輩は猫である』発表が1905年，明治38年，絶筆『明暗』の執筆が1916年，大正5年，漱石は文字通り20世紀の作家ですが，驚くべきはわずか11年のあいだに執筆した文学作品の質と量です」。

『新書で入門　漱石と鷗外』高橋昭男（新潮新書）

『小林多喜二―21世紀にどう読むか』ノーマ・フィールド（岩波新書）

ノーマ・フィールドはシカゴ大学教授。専攻は日本文学・日本文化。1947年東京生まれ。父は米国人，母は日本人。辺野古新基地建設に反対する一人。1965年にアメリカンスクール卒業後渡米。2004～05年小樽在住。小林多喜二の警察による拷問・虐殺後の死体の写真は秘匿され，戦後に公開された。その作品も，伏せ字や削除なしで読めるようになったのは，戦後である。

『「私」をつくる―近代小説の試み』安藤宏（岩波新書）

『ピカレスク―太宰治伝』猪瀬直樹（文春文庫）

猪瀬直樹は作家・元東京都知事。

『津軽・斜陽の家―太宰治を生んだ「地主貴族」の光芒』鎌田慧（講談社文庫）

『太宰と井伏―ふたつの戦後』加藤典洋（講談社）

加藤典洋は文芸評論家，早稲田大学国際教養学部教授。

『女が読む太宰治』雨宮処凛・井上荒野・太田治子・香山リカ・佐藤江梨子・辛酸なめ子・平安寿子・高田里惠子・津村記久子・中沢けい・西加奈子・山崎ナオコーラ（ちくまプリマー新書）

『文学者たちの大逆事件と韓国併合』高澤秀次（平凡社新書）

高澤秀次は文芸評論家。1910年に起きた大逆事件・韓国併合と文学者との関係を描く。佐藤春夫や与謝野鉄幹の知られざる一面が紹介される。

9-6　日本文学論（詩・短歌・俳諧・俳句）

『詩を読む人のために』三好達治（岩波文庫）

三好達治（1900～64年）は詩人。冒頭の「千曲川旅情の歌」についての解説が絶品である。「この詩一篇は，通じていって，――すべての芸術がそれに向ってあこがれるといわれる，「音楽の状態」に最も近いのであります」。

『詩ってなんだろう』谷川俊太郎（ちくま文庫）

谷川俊太郎（1931年～）は詩人。本のタイトルに，筆者が選ぶ詩と若干のコメントで答えている。取り上げられている詩の範囲は広く，なぞなぞ，しりとり，いるはかるた，わらべうた……。あとがきには次のように記されている。「この本は，現行のいくつかの小学校国語教科書を読んで感じた私の危機感から出発しています。教科書には私の作も含めて多くの詩が収録されているのですが，その扱い方がばらばらで，日本の詩歌の時間的，空間的なひろがりを子どもたちにどう教えていけばいいかという方法論が見あたらないのです。現場の先生がたもまた，そういう大きな視点をもてない悩みをかかえているようでした」。小学校教師・国語教師志望者には絶対お勧め。

『詩のこころを読む』茨木のり子（岩波ジュニア新書）

茨木のり子は詩人（1926～2006年）。

『もしも，詩があったら』アーサー・ビナード（光文社新書）

内容は日本文学にとどまらないが，日本語でも書く詩人なので。辺野古を訪れたようだ。

『西行』高橋英夫（岩波新書）

高橋英夫は文芸評論家。西行は，出家した身でありながら，遊女と歌のやり取りをし，世間での自らの歌の評価を気にしつづけた。旅人でありながらも，政治権力の近くにもいた。西行の人生をたどりながら，その短歌を味わうことができる。

『芭蕉―「かるみ」の境地へ』田中善信（中公新書）

田中善信は白百合女子大学教授。専攻は江戸時代の俳諧。「歌謡というのはうたって覚えるものである。逆にいえば，うたわなければ歌謡の歌詞を覚えることはできない。『貝おほひ』には，縦横無尽といってよいほど，当時のはやり歌の文句が駆使されている。これだけ縦横にはやり歌の文句を駆使できた芭蕉は，うたうことが好きな人物であったと考えて間違いあるまい。私はかつて芭蕉のことを，カラオケへ行ったらマイクを離さないような人物だったと言ったことがある」。

『小林一茶―時代を詠んだ俳諧師』青木美智男（岩波新書）

『季語集』坪内稔典（岩波新書）

坪内稔典は俳人で，京都教育大学名誉教授。上高の俳句の先生です。300の季語について400字の文章と俳句2つが紹介されている。筆者はカバ好きで，全国29か所約60頭のカバをすべて見て，それぞれの前に1時間以上いるということを達成した。筆者が見たであろう，「こどもの国」のカバを見に行くとよい。「赤い河馬（かば）」は夏の季語である。「夏の河馬は赤い。日焼けから皮膚を守るために赤い体液を分泌するからだ」。600句の中で一番よかったのは次の句である。

・　夏惜しむサーフボードの疵（きず）なでて　　（季語・サーフボード→夏）　　黛（まゆずみ） まどか

『正岡子規―言葉と生きる』坪内稔典（岩波新書）

「子規には「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」という代表句があるが，この句を調べたり考えたりしているうちに，柿が秋の代表的風物になったのは俳句が柿を詠むようになったからだと気付いた。食べ物だった柿は，雅語の詩である和歌では対象にならなかった」。「新聞『日本』は明治22年2月11日（憲法発布の日）に陸羯南によって創刊された。……『日本』紙上には漢詩や和歌による時事評がすでにあった。そこへ子規の「俳句時事評」が加わったのである」。新聞『日本』発刊の日に暗殺されたのが初代文部大臣森有礼（ありのり）である。

『正岡子規の〈楽しむ力〉』坪内稔典（NHK出版新書）

それぞれの本名をもじって，河東秉五郎（へいごろう）に碧梧桐（へきごとう），高浜清（きよし）に虚子（きょし）と名づけたのは子規である。単なる「もじり」が文学史に名を残したのである。野球に熱中した正岡子規は「野球」をベンネームに用いた。「ノボール」と読む。自分の幼名「升（のぼる）」をもじったものだった。今も使われている子規の訳語として「打者」「走者」「直球」「飛球」がある。子規は野球殿堂入りしている。

『子規と漱石―友情が育んだ写実の近代』小森陽一（集英社新書）

『季語の誕生』宮坂静生（岩波新書）

『季語百話―花をひろう』高橋睦郎（中公新書）

『［改訂］桜は本当に美しいのか―欲望が生んだ文化装置』水原紫苑（平凡社ライブラリー）

水原紫苑は歌人。「戦争に利用された桜への忌避感が次第に消えて，桜の歌が表舞台に戻って来る。」「折しも，「歴史は繰り返すが，一度目は，悲劇，二度目は茶番である」というマルクスのあまりにも有名な言葉を忠実に実行したいらしく，大根役者たちが下手な見えを切ろうとしている。とんでもない花吹雪の幕切れになる前に，舞台から引きずりおろさなければならない。」

『近代秀歌』永田和宏（岩波新書）

永田和宏は歌人，細胞生物学者。京都産業大学総合生命科学部教授・学部長。京都大学名誉教授。著者は岩

波新書の『タンパク質の一生』の著者でもある。岩波新書で文系の本と理系の本を両方書いた初めての人である。日本人ならこれだけは知っておきたい近代の歌100首を取り上げる。

『現代秀歌』永田和宏（岩波新書）

『歌仙の愉しみ』大岡信・岡野弘彦・丸谷才一（岩波新書）

『短歌の友人』穂村弘（河出文庫）

穂村弘は歌人。「我々の言葉が〈リアル〉であるための第一義的な条件としては，「生き延びる」ことを忘れて「生きる」，という絶対的な矛盾を引き受けることが要求されるはずである。詩を為すことは必ず死への接近を伴うという，しばしば語られるテーゼの本質がこれであろう。」

9-7　国語教科書

『国語教科書の思想』石原千秋（ちくま新書）

『国語教科書の中の「日本」』石原千秋（ちくま新書）

石原千秋は早稲田大学教育・総合科学学術院教授。専攻は日本近代文学。20年以上高校国語教科書の編集委員もつとめた。平成23年度実施選考試験・小学校・二次試験の模擬授業の課題とされた「ごんぎつね」のように，「小学校国語教科書には，動物が主人公の物語や，動物に関して語った説明文が異様に多い。」「文字通り「動物化」することを求める小学校国語教科書のメッセージは，受動的で与えられた環境に対して従順な「人格」を作り上げることに一役買っている可能性が高いのだ。」

『大人のための国語教科書―あの名作の“アブない”読み方！』小森陽一（角川oneテーマ21新書）

小森陽一は東京大学教授。専攻は日本近代文学。現役の高校国語教師が，大学院で「教科書と指導書を対象として，文学作品の解釈枠組について研究」したことがきっかけで生まれた本。著者も大学院生時代に高校で国語を教えたことがある。著者の「『こころ』論」（高校教科書での扱いへの批判の文章）は，すでにいくつかの教師用指導書にも掲載されている。森鷗外『舞姫』，夏目漱石『こころ』，芥川龍之介『羅生門』，宮沢賢治「永訣の朝」，中島敦『山月記』が取り上げられている。

『教科書で出会った名句・名歌300』石原千秋監修（新潮文庫）

『教科書で出会った名詩100』石原千秋監修（新潮文庫）

『教科書の文学を読みなおす』島内景二（ちくまプリマー新書）

島内景二は電気通信大学教授。専門は源氏物語。以下の5作品を取り上げる。漱石『それから』『坊っちゃん』『草枕』，鷗外『舞姫』『山椒大夫』。以上の作品を現代的視点と日本の古典の3層構造で解説する。

『国語教科書の闇』川島幸希（新潮新書）

川島幸希は学校法人秀明学園理事長，秀明大学学長。高校生の減少が教科書会社の撤退につながっている。高校国語教科書発行の出版社は，1994年15社→2003年11社→2013年9社と淘汰が進む。「羅生門」「こころ」「舞姫」「山月記」の定番小説四天王が確立していく。

9-8　国語教育

『生きていくための短歌』南悟（岩波ジュニア新書）

南悟は，兵庫県高等学校国語元教員。1979年から31年間，神戸工業高等学校（夜間定時制）に勤務。短歌はすべて定時制高校生のもの。この本の「印税収入については，定時制高校生徒の，奨学金，就学資金に活用させていただきます。」100人以上の生徒の短歌と人生が紹介されているが，匿名は2人のみ。著者は教師として生徒と卒業後まで強い信頼関係を形成している。

⑴「卒業文集を書く時に初めて語ってくれたことですが，7年前に昼の学校を退学した理由は，彼の友だちをいじめている生徒5，6人を殴ってけがをさせ，自ら先生に名乗り出て退学になったとのことで，最後まで殴っ

た理由を明かさなかったと言います。」ガソリンスタンドで正社員としてオイルまみれで働く，その生徒の卒業の歌。

二〇才過ぎ嫁さんもらって息子でき小さな家族我が支える　（2001年）

⑵日系ブラジル人の生徒の歌。

おっさんが首になった検品の作業任され頑張りとおす　（2007年）

⑶母子家庭で私立の進学高校に入学した秋に，お母さんがくも膜下出血で39歳で亡くなり，高校を中退し，バイトしながら19歳で入学した生徒の歌。

生きること疲れて手には亡き母の携帯写真温もり心に　（2008年）

⑷知的な障害を持ち，他人とのコミュニケーションをとるのが難しい生徒の歌。

ニッカポッカみながはいてるからカッコいい風ひらひらと学校へくる　A（1997年）

「仕事に就けないA君ですが，級友と同様の格好がしたくて，お母さんに無理を言ってニッカポッカで登校していたのです。クラスの者も心得ていて，「A君，今日の仕事はどうだった？」と声をかけたりしていました。」

このA君が，いじめのフラッシュバックで，泣いてばかりの状態で，心配してお母さんが授業に付き添っていたときの話。

「測量事務所で働くB君が，突然，泣いているA君の席に行き，「いつまでも，甘えるな。Aは恵まれている。僕の1歳下の弟は，喋れないし勉強もできない。中学校の障害児学級を出たけれど，行くところがないし友だちもいない。Aは，こうして定時制高校に来て幸せだろう。泣き止め。」と発言しました。

B君が，障害を持つ弟の話題を持ち出したのは初めてです。」

「そして，実に驚くことに，この日以来A君は，一度も泣かず，一日も休まずに卒業してくれました。」

⑸学校と仕事子育て疲れても子どもの笑顔で元気回復　（2006年）

震災の年，18歳で中退した彼女は，2人の子をもつ26歳のシングルマザーとして再入学してきた。2人ともアスペルガー症候群と診断されている。長男が妊娠7か月の時に震災があった。

「よく子ども連れで登校し，隣の席に座らせて漢字帳や宿題をさせていました。」

国語の授業で「勉強の「勉」も分娩の「娩」も免許の「免」も，全て女性が出産する姿が漢字になっている」

→「彼女は，自分はすべて経験している，大したもんだと，自分を誉めたくなった」

『部活で俳句』今井聖（岩波ジュニア新書）

今井聖は私立横浜高校英語教師。俳人，脚本家。

『日本の教師に伝えたいこと』大村はま（ちくま学芸文庫）

『橋本式国語勉強法』橋本武（岩波ジュニア新書）

『〈銀の匙〉の国語授業』橋本武（岩波ジュニア新書）

橋本武は2013年に101歳で亡くなった。1934年東京高等師範学校卒業。灘中学校・高等学校で50年間教壇に立ち続けた。灘は6年間1教科1教師の持ち上がり担当制の中高一貫教育。「私は，国語の基礎学力を涵養する根源は「書く」ことにあると思っています。」若輩者ながらまったく同感である。

『まともな日本語を教えない勘違いだらけの国語教育』有元秀文（合同出版）

『高校生のための現代思想エッセンス—ちくま評論選』（筑摩書房）

『高校生のための近現代文学ベーシック—ちくま小説入門』（筑摩書房）

『「国語」入試の近現代史』石川巧（講談社選書メチエ）

『教養としての大学受験国語』石原千秋（ちくま新書）

『大学生からの文章表現—無難で退屈な日本語から卒業する』黒田龍之介（ちくま新書）

黒田龍之介は，現在フリーランス語学教師。東京工業大学・明治大学などの元助教授。専門はスラブ語学，言語学。大学での「日本語表現のテクニック」の授業をもとにしている。「作文」でも「小論文」でもない「日常文」の書き方を指南している。

『「書ける」大学生に育てる―AO入試現場からの提言』島田康行（大修館書店）

島田康行は筑波大学人文社会系教授，アドミッションセンター長。日本国語教育学会理事。国立大学に進学した学生が高校時代に400字程度以上の長さの文章を書く機会のアンケート結果が衝撃的であった。0回46%，1～3回25%で7割以上である。

第10章 教育

10-1 全般

『子どもの声を社会へ―子どもオンブズの挑戦』桜井智恵子（岩波新書）

桜井智恵子は大阪大谷大学教授。川西市子どもの人権オンブズパーソン代表。専攻は教育学，思想史。教員志望者に一番読んでほしい本です。沖縄教員塾からの合格者には1冊ずつプレゼントとします。

国連・子どもの権利委員会は，2010年の日本の第3回定期報告書の審査後の総括所見で以下のように勧告した。

「・高度に競争的な学校環境が，就学年齢にある児童の間で，いじめ，精神障害，不登校，中途退学，自殺を助長している可能性があることを懸念する。

・委員会は，締結国が，質の高い教育と児童を中心に考えた能力の育成を組み合わせること，及び極端に競争的な環境による悪影響を回避することを目的とし，学校及び教育制度を見直すことを勧告する。

・委員会はまた，締結国が同級生の間でのいじめと闘う努力を強化し，及びそのような措置の策定に児童の視点を反映させるよう勧告する。」

『誰のための「教育再生」か』藤田英典編（岩波新書）

著者は6名。藤田英典（教育社会学専攻・国際基督教大学教授），尾木直樹（教育評論家・法政大学キャリアデザイン学部教授），喜多明人（教育法学・子ども支援学，早稲田大学文学学術院教授），佐藤学（教育学・東京大学大学院教育学研究科教授），中川明（弁護士・明治学院大学教授），西原博史（憲法学・早稲田大学社会科学部教授）。肩書は出版当時。

『義務教育を問いなおす』藤田英典（ちくま新書）

藤田英典は東京大学名誉教授。日本教育学会元会長。専攻は教育社会学。教育の専門家としての，日本の教育に対する危機感が，社会学者としての実証性に基づいて論じられている。改革推進論者は，20年以上「教育の危機」を叫び，20年以上「教育改革」を進めている。〈時代の趨勢〉や〈世間の意向〉を誘導し，つくりあげている。

『教師が育つ条件』今津孝次郎（岩波新書）

今津孝次郎は名古屋大学名誉教授。専攻は教育社会学，学校臨床社会学，発達社会学。名古屋大学教育学部附属中・高等学校元校長。「教職課程の期間を含む大学または短大の教育は4年ないし2年であり，教育実習にしても2～4週間と短いのに対して，実際に就く教職期間は一般に30年以上に及ぶから，時間数からしても現職経験を通じて得るものが，大学または短大での教育とは比較にならないのは当然である。」選考試験の合格はスタートラインに立ったということです。

『学校を改革する―学びの共同体の構想と実践』佐藤学（岩波ブックレット）

佐藤学は学習院大学文学部教授・東京大学名誉教授，日本教育学会元会長。国内数千校，海外 20 か国以上の 300 校以上の学校を訪問した。「学びの共同体の学校のヴィジョンを定義しておこう。学びの共同体の学校は，子どもたちが学び育ち合う学校であり，教師たちも教育の専門家として学び育ち合う学校であり，さらに保護者や市民も学校の改革に協力し参加して学び育ち合う学校である。学びの共同体の学校は，このヴィジョンによって，学校の公共的使命である「一人残らず子どもの学ぶ権利を実現し，その学びの質を高めること」と「民主主義の社会を準備すること」を実現している」。

国頭村でも，学びの共同体の取組が始まっている（http://yui.kunigami.ed.jp/）。

『教師花伝書―専門家として成長するために』佐藤学（小学館）

「私は，いつも教師たちに「職人資質」として次の3つの規範を求めてきた。その第一は，子どもは一人ひとりの尊厳を大切にすることである。第二は，教材の可能性と発展性を大切にすることである。そして，第三

は教師としての自らの哲学を大切にすることである。

授業の巧拙や授業の結果の成否はどうでもよい事柄である。どんなに困難であろうとも，子ども一人ひとりの尊厳を尊重し，教材の可能性と発展性を尊重し，教師自らの哲学を大切にしている教師こそ，教師として信頼にたる「職人気質」を会得した教師だからである。」

『学び合う教室・育ち合う学校―学びの共同体の改革』佐藤学（小学館）

『「みんなの学校」が教えてくれたこと―学び合いと育ち合いを見届けた3290日』木村泰子（小学館）

木村泰子は大阪市立大空小学校の元校長。映画「みんなの学校」を見よう。日本の教育にも，まだ希望がある。

『教育入門』堀尾輝久（岩波新書）

堀尾輝久は東京大学名誉教授。専攻は教育学，教育思想史。「子どもの心を開かせる秘訣というようなものがあるとは思いませんが，少なくともこれだけは知っておいた方がいいと思いますのは，子どもの心の扉は外側にはハンドルはない，内側にしかない。だから外側からいくらこじあけようとしても，それは開かない。子ども自身がその扉を開くのを待つ以外ないのだということです。」

『教育改革の幻想』苅谷剛彦（ちくま新書）

『教育と平等―大衆教育社会はいかに生成したか』苅谷剛彦（中公新書）

苅谷剛彦はオックスフォード大学教授。教育社会学。秋田や福井といった地方県の学力が高いのは，戦後民主主義のもとでの平等化の結果である。1972年に日本になった沖縄は，憲法と戦後民主主義の恩恵を受けていない。

『公教育をイチから考えよう』リヒテルズ直子×苫野一徳（日本評論社）

『教えることの復権』大村はま・苅谷剛彦・苅谷夏子（ちくま新書）

『評伝　大村はま―ことばを育て　人を育て』苅谷夏子（小学館）

苅谷夏子は大村はまの教え子。「大村はま記念国語教育の会」事務局長。「大村はまが，40代の働きざかりの時期に，学習指導要領や教科書編纂に関わったということは，大きな意味を持つ。」「古典は，文学史上の財産である。だからこそ「古典に親しむ」という方針であるべきだ，と，はまは強く訴えた。」「今日にいたるまで，中学国語における古典学習の姿勢は「古典に親しむ」となっている。」

『文部科学省―「三流官庁」の知られざる素顔』寺脇研（中公新書ラクレ）

『教育委員会―何が問題か』新藤宗幸（岩波新書）

『校長という仕事』代田昭久（講談社現代新書）

『日本の教育を考える』宇沢弘文（岩波新書）

『反教育論―猿の思考から超猿の思考』泉谷閑示（講談社現代新書）

『子どもと学校』河合隼雄（岩波新書）

『子どもの社会力』門脇厚司（岩波新書）

『街場の教育論』内田樹（ミシマ社）

『教師の資質―できる教師とダメな教師は何が違うのか？』諸富祥彦（朝日新書）

『残念な教員―学校教育の失敗学』林純次（光文社新書）

『「プロ教師」の流儀―キレイゴトぬきの教育入門』諏訪哲二（中公新書ラクレ）

『授業の復権』森口朗（新潮新書）

『日教組』森口朗（新潮新書）

『正しいパンツのたたみ方―新しい家庭科勉強法』南野忠晴（岩波ジュニア新書）

南野忠晴は高校英語教師として13年勤めたあとに，数少ない男性の家庭科教師になった。家庭科志望者は必読。

『ルポ保健室―子どもの貧困・虐待・性のリアル』秋山千佳（朝日新書）

養護教諭志望者は必読。

『みんなでつくろう学校図書館』成田恵子（岩波ジュニア新書）

成田恵子は，現役の学校司書。2010年より札幌南高校在職。スクールカウンセラーではなく，学校図書館司書を配置して，保健室登校と同様に図書室登校を行うとよいのだが，絶対に実施されない教育政策だろう。学校図書館の貧困化＝愚民化政策である。

『ほんとうにいいの？　デジタル教科書』新井紀子（岩波ブックレット）

『教育という病―子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』内田良（光文社新書）

『教育虐待・教育ネグレクト―日本の教育システムと親が抱える問題』古荘純一・磯崎祐介（光文社新書）

『公立高校とPTA―娘が通った保護者として考えたこと』近藤邦明（不知火書房）

『教養主義の没落―変わりゆくエリート学生文化』竹内洋（中公新書）

『現代思想2014年4月号―ブラック化する教育』（青土社）

佐藤学「例えば教師が教科書を選べないなんていうのは中国と日本くらいしかありません。学校の財政・予算・人事に関してきちんと意見が言えるかどうか，校長選出にどのように教師の意見が反映されるか，授業時間数をどのように決定できるか，といったような項目で見ていくと，日本はことごとく最低です。OECD生徒の学習到達度調査（PISA）の発表のときに，この調査結果が付随的に翻訳されていない。」

10-2 世界の教育

『こんなに違う！　世界の国語教科書』二宮皓監修（メディアファクトリー新書）

二宮皓は広島大学名誉教授。比較教育学・国際教育学の第一人者。11か国が取り上げられている。

『こんなに厳しい！　世界の校則』二宮皓監修（メディアファクトリー新書）

19か国が取り上げられている。「オランダでは，初等・中等学校で公立は3割にすぎず，あとの7割は私立。親が，自分の子どもに合った学校，価値観や宗教観の合致した学校を自由に選択できるわけだ。しかも，義務教育（4～18歳）期間の授業料は共に無料である。」モンテッソーリ校160校，ドルトンプラン校260校，フレイネ校16校，シュタイナー校95校，イエナプラン校220校がある。

『こんなに違う！　世界の性教育』橋本紀子監修（メディアファクトリー新書）

『自由と規律―イギリスの学校生活』池田潔（岩波新書）

池田潔（1903～90年）の専攻は英文学，英語学。リース・スクール卒業。20世紀はじめのイギリスの私立学校・寄宿学校での学校生活を知ることができる。

『ミュンヘンの小学生―娘が学んだシュタイナー学校』子安美知子（中公新書）

10-3 教育史

『文明としての教育』山崎正和（新潮新書）

山崎正和は，劇作家・評論家。中央教育審議会元会長。平成22年度実施選考試験・専門国語で出題された。「教育は人間が人間にたいしておこなう営みであって，そこで教え教えられる人間の熱い積極性が大切だからです。報酬の分だけ働くとか，対価の分だけ商品を渡すという考え方ではなくて，そこに何らかの精神的迫力が加わらなければ人は人を教えられないのです」。

『江戸の教育力』高橋敏（ちくま新書）

高橋敏は国立歴史民俗博物館名誉教授。専門は近世教育・社会史，アウトロー研究。「著者の勝手な思い入れであるが，教育の今，そして未来を憂える多くの人々に読まれることを願っている。……決して即効薬ではないが，厳しい教育現場で苦闘をつづける教師の皆さんに元気をつける漢方薬ぐらいになればと念じている」。

『日本の教育改革―産業化社会を育てた130年』尾崎ムゲン（中公新書）

尾崎ムゲンは関西大学文学部教授。専攻は教育学，日本教育史。1999年発行。近代以降の日本教育史をしっ

かり学ぶのに，とてもよい。

『日本教育小史―近・現代』山住正己（岩波新書）

山住正己（1931～2003年）は東京都立大学名誉教授。教育学者。1986年までが対象となっている。「教育への国家統制が強められるときは，常に教育内容と教師が同時に統制の対象となってきたのである」。1970年家永教科書裁判第二次訴訟の地裁での原告勝訴判決で，その後10年間は教科書検定が緩やかになった。当時，教科書訴訟支援全国連絡会会員の比率が全国一だったのは八重山である。教科書問題において，八重山は全国を動かす位置を占めているのである。

『学校の戦後史』木村元（岩波新書）

木村元は一橋大学大学院社会学研究科教授。専攻は教育学・教育史。「近代学校のもっとも基本的な性格は，「教える」という文化伝達を軸にして，生活の場から距離をとって構成された特別の時空間に，対象となるすべての子どもを一定の期間収容するところにある。近代以前は，共同体社会（ムラ）の統治や職業技能の伝承など，新しい世代が先行の世代の文化を「学ぶ」ことで結果として人づくりが行われていた。」「「教育」ということばは，学校の普及にともなって定着していったのである。」

『ある小学校校長の回想』金沢嘉市（岩波新書）

金沢嘉市（1908～86年）は小学校教師・校長。1967年発行。「教育委員会の任命制，勤評，学テ，教科書の統制（広域採択制），検定の強化等のなりゆきを冷静に反省して見ると，教育の中央集権的統制が見事な計画のもとに進められてきたことに気づくにちがいない」。「お上のいうことに順応していく教育と，教師を求めているのが今日の文教政策の大筋の流れであると見てよい」。

『日本を教育した人々』齊藤孝（ちくま新書）

『大学の誕生（上）―帝国大学の時代』『大学の誕生（下）―大学への挑戦』天野郁夫（中公新書）

天野郁夫は東京大学名誉教授。専攻は教育社会学，高等教育論。英語などの外国語で教授することから始まった日本の大学にとって，日本語で教授することが夢だった。せっかく日本語で教授できるようになったのに，再び英語で教授しようとしているからパラドキシカルである。

『教育思想史』今井康雄編（有斐閣アルマ）

10-4　国家による教育統制

『教科書が危ない―「心のノート」と公民・歴史』入江曜子（岩波新書）

『教育と国家』高橋哲哉（講談社現代新書）

高橋哲哉は東京大学大学院総合文化研究科教授。専攻は哲学。「文部科学省が発行した全国一律の教材（事実上の国定教科書）によってすべての小・中学生に9年間，「心の教育」を施すことは，国家の推奨する道徳を子どもたちの心の中に9年間語り続けることになります。これは恐いことです。内心の自由に対する権力の介入と言ってもいいし，法的に言えば，子どもの権利条約，日本国憲法，現行の教育基本法などに違反している疑いが強い。仮に内容がよいものであっても，これはよくないと私は思うのです。」

『新しい道徳―「いいことをすると気持ちがいい」のはなぜか』北野武（幻冬舎）

『ルポ　良心と義務―「日の丸・君が代」に抗う人びと』田中伸尚（岩波新書）

『性教育裁判―七生養護学校事件が残したもの』児玉勇二（岩波ブックレット）

児玉勇二は七生養護学校事件の原告側弁護団長。政治による教育への介入・破壊のすさまじさに戦慄する。障害児は性犯罪の被害者にも加害者になりやすい傾向がある。先進的な性教育を進めてきた「養護学校」で2003年7月に起きた事件を是非知ってほしい。「命令に服している非主体的な教師に主体的人間を育てる真の教育を期待することはできず，そこにあるのは非主体的人間を造成する「教化」にほかなりません」とある。

『学校から言論の自由を考える』土肥信雄・藤田英典・尾木直樹・西原博史・石坂啓（岩波ブックレット）

土肥信雄は東京都立三鷹高校長として2006年，都教委の「挙手や採決などの方法で教職員の意思を確認し

てはならない」という通知に現職校長として反対の声をあげた。生徒全員の名前を覚えているすごい校長先生です。「この10数年の教育政策・改革には，東京の「非常識」（すなわち歪んだ政策・施策）を全国各地に広める傾向が目立つ」（藤田）。

『福島から問う教育と命』中村晋・大森直樹（岩波ブックレット）

10-5 教育格差

『子どもの最貧国・日本―学力・心身・社会におよぶ諸影響』山野良一（光文社新書）

山野良一は児童福祉司。神奈川県の児童相談所勤務（福祉専門職の公務員）。ワシントン大学でソーシャルワーク修士（MSW）。PISA2003の結果について福田誠治氏のコメント。「日本の子どもたちは家庭では勉強しない割には成績がよい。また，勉強意欲も低いにもかかわらず，不本意ながらも短時間で効率よく勉強し，平均点では好成績をあげている。これらの結果からすると，これまでの日本の学校教育の成果，したがって，日本の教師の努力の成果は高いといえよう。日本のマスコミは，まず，日本の学校と教師の快挙をほめたたえるべきであった。もしここで，日本の学校の良さを壊して，教育を競争主義の市場原理に委ねるならば，アメリカ並みの低学力しか約束されないだろう」。

『日本の教育格差』橘木俊詔（岩波新書）

橘木俊詔は京都大学名誉教授。日本経済学会元会長。「格差社会」の火付け役である。「学力が最も下位にある沖縄県は貧困率の高さもさることながら，全国で最も平均所得の低い県である。したがって，かなり多くの家庭が貧困状態であることが推測できる。そのために子どもの学力も低くなっていると考えられる。貧困は子どもの学力向上にとって大きな障害となることを認識する必要がある。」

『子ども格差―壊れる子どもと教育現場』尾木直樹（角川oneテーマ21新書）

尾木直樹は教育評論家。法政大学特任教授。「1998（平成10）年6月，国連の子どもの権利委員会は，日本の子どもが，「高度に競争的な教育制度のストレス及びその結果として（中略）発達障害にさらされていること」を懸念し，改善するようにと勧告していました。しかし日本政府は，その勧告を深刻に受け止めることはなく，学力向上を目指した「詰め込み教育」を進めていきました。そのため，2004（平成16）年にも国連は「以前に勧告しているのにまったく改善されない」と，再度の警告を出していました。」

『進学格差―深刻化する教育費負担』小林雅之（ちくま新書）

小林雅之は東京大学・大学総合教育研究センター教授。専攻は教育社会学。「大学4年間では，少なくても400万円，多ければ1000万円をこえる費用がかかる。……普通の人は1000万円を越える買い物は，持ち家くらいだろう。いまや大学進学は人生で二番目に高い買い物なのだ。」

『学歴分断社会』吉川徹（ちくま新書）

吉川徹は大阪大学大学院人間科学研究科准教授。計量社会学専攻。「いま日本人の7割は，親が高卒ならば子も高卒，親が大卒ならば子も大卒というように，親と同じ学歴を得るようになっています。」

『ブラックバイト―学生が危ない』今野晴喜（岩波新書）

10-6 学力

『学力を育てる』志水宏吉（岩波新書）

志水宏吉は大阪大学大学院人間科学研究科教授。学校臨床学，教育社会学専攻。信頼できる教育学者の一人。効果的な学校（通塾しなくても成績を伸ばしている公立学校）として著者が対象とした小中学校は，ともに同和地区を含む学区にある学校であり，解放教育としての伝統が継承されている学校である。

『公立学校の底力』志水宏吉（ちくま新書）

小学校4校・中学校6校・高校2校が取り上げられている。「仕事柄，いろいろな地域のさまざまな学校を訪問

する機会が多いが，先生方は本当にがんばっている」。「私などは，「教育は買うものである」という感覚は大嫌いである。教育は「選ぶ」ものではなく，「一緒につくる」ものである。できあがったものを顧客が消費するというイメージではなく，たまたま出会った人々が汗を流しながら共同作業を進めるイメージ」。

『検証　大阪の教育改革―いま，何が起こっているのか』志水宏吉（岩波ブックレット）

『「つながり格差」が学力格差を生む』志水宏吉（亜紀書房）

『学力幻想』小玉重夫（ちくま新書）

『学力があぶない』大野晋・上野健爾（岩波新書）

『本当の学力をつける本』陰山英男（文藝春秋）

『教育力』齊藤孝（岩波新書）

『教育の力』苫野一徳（講談社現代新書）

『「学力」の経済学』中室牧子（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

『予備校が教育を救う』丹羽健夫(文春新書)

『ルポ　塾歴社会』おおたとしまさ（幻冬舎新書）

10-7 いじめ・暴力・体罰

『いじめと不登校』河合隼雄（新潮文庫）

河合隼雄（1928～2007年）は，日本のユング派心理学の第一人者，臨床心理学者。文化庁長官も務めた。京都大学理学部卒。高校教師も3年間やっている。対談や講演を集めた本。道徳の教科化に対して，本書の次のことばは強烈な批判となっている。「中教審でも僕は一番初めに言ったんですけど，とりわけ心の教育というのは，育てるとか育つとかの「育」のほうが大事なんで，「教」は関係ないんです。教えることは心つぶしになってしまうんです。今の学校の先生は教えるのが好きすぎます」。

『教室の悪魔―見えない「いじめ」を解決するために』山脇由貴子（ポプラ社）

山脇由貴子は東京都児童相談所の元児童心理司。いじめの現実と対策が分かりやすく簡潔に書かれている。かつてのいじめの加害者・被害者・傍観者という構造ではなくなってきている。一人の被害者にクラス全員が加害者（ただし被害者は，いつ変わるか分からない。）という構図が多い。教員志望者には，中学生に中学生を殺させないために絶対に読んでほしい本。

『震える学校―不信地獄の「いじめ社会」を打ち破るために』山脇由貴子（ポプラ社）

『いじめの構造―なぜ人が怪物になるのか』内藤朝雄（講談社現代新書）

内藤朝雄は明治大学文学部准教授。専門は，社会学・いじめ学。うるま市の中学生による集団暴行殺人事件の心理・論理が，手に取るように分かる。「被害者が他殺や自殺にまで至るような深刻ないじめは，最初の段階で「いじめをすると自分も酷い目に遭う」と思わせることさえできればその大多数は食い止めることができるものですが，「たいした罰は受けない」と思わせたが最後，破滅的な事態を招きかねません」。

『〈いじめ学〉の時代』内藤朝雄（柏書房）

『いじめとは何か―教室の問題，社会の問題』森田洋司（中公新書）

森田洋司は大阪樟蔭女子大学前学長。専門は社会学（教育社会学，犯罪社会学，社会病理学，生徒指導論）。生徒指導提要の作成に関する協力者会議座長。中央教育審議会初等中等教育分科会の臨時委員。いじめの4層構造（加害者―観客―傍観者―被害者）を唱えた人である。「私たちの調査では，いじめ発生率の高い学級では，正直者が馬鹿を見るような空気が教室に漂っていたり，教師によるえこひいきなど公平を欠く学級運営が行われていたり，教師が子どもたちに迎合する態度が見られるなどの傾向が強いことが分かっている。また，指導のブレをなくすことも大切である。とくにいじめについては，外からは被害の実情が分かりづらく，人によって解釈の幅が出やすい。教員の間で共通理解を図ることが大切となる」。

『学校と暴力―いじめ・体罰問題の本質』今津孝次郎（平凡社新書）

今津孝次郎は名古屋大学名誉教授。専攻は教育社会学，学校臨床社会学，発達社会学。名古屋大学教育学部附属中・高等学校元校長。

「「A　暴力を誘発する学校」の特徴として考えられることは，①子どもたち一人ひとりの発達を育むよりも，学校組織の秩序を重視する。②そのために学校組織が縦型の管理主義に貫かれていて，力で押さえ込む「権力」関係の原理に囚われている。③学力テストの結果を上げる数値目標が決められ，それに向けた教育に集中するのが組織目標となっている。④学校のさまざまな情報が外部には伝えられず，保護者からの情報も学校内で共有されずに学校組織が閉鎖的である。⑤こうした学校組織の下で，各教師は孤立しやすく，互いが協働してともに仕事をする連帯意識が弱い。

これに対する「B　暴力を誘発しない学校」の特徴として考えられることは，①子どもたち一人ひとりに寄り添って，その発達を達成できるように同じクラスの仲間とともに取り組むことを重視する。②そのために学校組織は教師の自律を可能な限り許容し，教師が尊敬されて，「権威」関係をつくり出せるような横型の組織原理に貫かれている。③学力テストの結果を参考にしながら，一人ひとりの子どもの次の学習課題を明らかにし，授業の内容と方法を改善するために教師自身の自己評価を積み上げることを目標にする。④学校の取り組みに関するさまざまな情報を外部に公開し，保護者からの情報も学校内で共有して，学校組織を開放的にする。⑤こうした学校組織文化の下で，各教師は相互に尊重し合い，協働してともに仕事をする連帯意識が強い。」

『いじめ問題をどう克服するか』尾木直樹（岩波新書）

『夜回り先生 いじめを断つ』水谷修（日本評論社）

『現代思想12月臨時増刊号　緊急復刊imago　いじめ　学校・社会・日本』（青土社）

『少年にわが子を殺された親たち』黒沼克史（草思社）

黒沼克史はジャーナリスト。6家族を取り上げているが，最初が1992年の八重山中学2年生の集団暴行殺人事件である。犯人は，中学2年生6人，中学1年生3人である。事件後の，生徒アンケートで1年間に717件の金銭巻き上げがあった。被害総額約700万円。全校生徒903人のうち約200人が被害者となっていた。2つ目の事件は，1996年の石垣市の高校2年生の集団暴行殺人事件である。犯人は5人で，4年前の事件のとき中学1年生だった，同じ不良グループの者もいた。

『「少年A」被害者遺族の慟哭』藤井誠二（小学館新書）

藤井誠二はジャーナリスト。2009年にうるま市で起きた，中学生による集団暴行殺人事件のその後を知ることができる。

『教室内カースト』鈴木翔（集英社新書）

鈴木翔は東京大学大学院教育学研究科博士課程在籍。専門は教育社会学。いじめの土壌がわかる。

『スクールセクハラ―なぜ教師のわいせつ犯罪は繰り返されるのか』池谷孝司（幻冬舎）

「入江さんは，教え子が教師になった途端に常識が通じなくなると感じる。学校が社会と遊離していることにすら気付かない。社会では通用しないような理屈を「学校だから，そんなことは当たり前です。」と平気で話し，体罰を「愛のむちだ」と容認する元教え子も多い。」

「学校という組織は自浄能力が極めて低いんです。生徒を守ることよりも，組織防衛に走りがちです。」

「国連で1989年に採択された「子どもの権利条約」が，日本でなかなか批准されなかった歴史がある。94年までずれ込み，日本は158番目の批准国になった。」

10-8 高校中退・生徒指導

『ドキュメント高校中退―いま，貧困がうまれる場所』青砥恭（ちくま新書）

青砥恭は，元埼玉県立高校教諭。関東学院大学非常勤講師。地域の住民・若者との学習グループ「子育てと教育を語る会」代表。著者のような県立高校教師が沖縄にも増えて欲しいと切に願う。

「「○○人やめさせて，ずいぶん楽になりました。」といった言葉が，底辺校では日常的に聞かれる。「彼ら

がいなくなったら学校は落ち着く」「彼らがいたら他の生徒に迷惑になる」と退学を正当化する論理がまかりとおるのである。それでも，自分を権力的な存在だと考えている教師は不思議なほど多くない」。

学区の拡大によって「貧困世帯の子どもたちを底辺校に囲い込むことで，同世代の異なる階層の若者たちと出会う機会がなくなり，同世代の若者たちからも孤立する状況が生まれている」。

「孤立した若者を見つけ，手をさしのべ，社会とつなごう。それが教師の仕事だ。今，多くの教師たちもまた，「競争の教育」の中にどっぷり浸かって，それがどのような社会につながっているか，考えることをやめている」。

高校教員志望者には，絶対に読んでほしい。公教育は平等化を進めるべきである。しかし，沖縄では公教育である高校教育によって，格差と貧困が拡大再生産されている。

『高校中退―不登校でも引きこもりでもやり直せる！』杉浦孝宣（宝島社新書）

杉浦孝宣は，NPO「高卒支援会」主宰。「不登校の生徒は真面目な子，よく考えている子が多いです。……高校が予備校化して，生徒の進路に対する動機付けがなくなったんですね。「偏差値上げろ，国公立目指せ」ばっかり。それだけだと，自分の進路や未来に対して，子どもでなくても疑問を持ちますよ」。

「学校が生徒に引導を渡す際に使う言葉は「高校は義務教育じゃない」です。組織の輪を乱すから，学力指導できないから辞めさせる。これは学校の教育放棄であるわけです」。

『先生のホンネ―評価，生活・受験指導』岩本茂樹（光文社新書）。

岩本茂樹は30年間にわたり小学校，中学校，高校の教師を勤めた。関西学院大学社会学部任期制准教授。「学校の秩序を維持する先生にとって，依拠する枠組みは校則である。生徒の服装の乱れを見過ごすことは自分たちが拠って立つ支柱を揺るがすこととなる。そのことは，学校の主導権が生徒に奪われかねない危険を意味するわけである。それゆえ，「服装の乱れ」が生じることは「生徒の心の乱れ」というよりも，「先生の心の乱れ」を意味する。だからこそ，服装の乱れを取り締まることによって，先生の心を安定させなければならないのである。つまり，「服装の乱れは心の乱れ」とは，先生たちの自己防衛が作り出した言説なのである」。

『高校の現実―生徒指導の現場から』喜入克（草思社）

喜入克は公立高校教諭，生徒指導部長（出版時）。「今日のようにリスク不安の高まった世の中では，どんなに努力してもどうにもならないことや，今すぐに分からないことに対して，耐えられなくなってくる。だから性急に，その原因や責任者が特定できるはずだと思ってしまい，一律で過剰な対策に走ってしまう」。

『夜回り先生』水谷修（小学館文庫）

『女子高生の裏社会―「関係性の貧困」に生きる少女たち』仁藤夢乃（光文社新書）

10-9 進路指導・職業教育

『君たちはどう生きるか』吉野源三郎（岩波文庫）

『13歳のハローワーク』村上龍（幻冬舎）

『キャリア教育のウソ』児美川孝一郎（ちくまプリマー新書）

児美川孝一郎は法政大学キャリアデザイン学部教授。専攻は教育学。就職率最低の沖縄がキャリア教育先進県であるカラクリがわかる。「流行りのキャリア教育が，〈「やりたいこと（仕事）」の選択→その職業（仕事）についての調べ学習〉といったベクトルでの段階論に立っているとしたら，そんなことはすぐにもやめたほうがいい」。「子どもや若者には，現在の日本の産業構造がどうなっていて，職業構成がどう変化し，実際の職場における労働（仕事）の実態が，いかなる状況にあるのかといった，職業や仕事についての理解を深める学習に力を入れることを薦めたい」。

『教育の職業的意義―若者，学校，社会をつなぐ』本田由紀（ちくま新書）

本田由紀は東京大学大学院教育学研究科教授。「高校生の大半を擁している普通科は，若者を仕事の世界に向けて備えさせる機能を，まったくと言っていいほど欠いている」。「高校普通科卒の就労者の中では非正社員

比率が高いだけでなく，正社員となった者は長時間労働に巻き込まれる比率が高く，逆に非正社員となった者は労働密度や就労意識が希薄である」。

『バカ学生に誰がした？―進路指導教員のぶっちゃけ話』新井立夫＋石嶺嶺司（中公新書ラクレ）

『教員採用試験のカラクリ―「高人気」職のドタバタ受験事情』新井立夫＋石嶺嶺司（中公新書ラクレ）

『公務員試験のカラクリ』大原瞠（光文社新書）

大原瞠は公務員試験評論家。大学卒業後，いくつかの公務員試験に合格。資格試験スクールや大学で公務員の受験指導を行った経験をもつ。

10-10 沖縄の教育

『裸足で逃げる―沖縄の夜の街の少女たち』上間陽子（太田出版）

上間陽子は，琉球大学教育学部研究科教授。専攻は教育学，生活指導の観点から主に非行少年少女の問題を研究。

沖縄の若者の現実を知ることから，沖縄の教育・若者支援を始めよう。

『沖縄で教師をめざす人のために』上地完治・西本裕輝編著（協同出版）

『沖縄子ども白書―地域と子どもの「いま」を考える』「沖縄子ども白書」編集委員会（ボーダーインク）

現在の沖縄の子どもたちを知るために必読の書。

『激震・沖縄の教育―「凡事徹底」県教育長ドキュメント』仲村守和（沖縄タイムス出版部）

仲村守和は元沖縄県教育長（07～09年）。元読谷高校校長（02～05年）。教員志望者が，採用者の考えを知っておくのは当然。

『揺れるデイパック―沖縄新教育事情』（琉球新報社）

1995年の新聞連載をまとめた本。当時の沖縄の旧教育事情がわかる。

『戦後沖縄教育運動史―復帰運動における沖縄教職員会の光と影』奥平一（ボーダーインク）

奥平一は1941年台湾生まれ。宮古島市出身。小学校1年時の1949年末中部に移り住んだ。大学卒業後の1968年沖縄で教員に。竹富町立船浮中学校教頭，浦添市立沢岻小学校校長，ドイツハンブルグ日本人学校校長，浦添市立浦添小学校校長を歴任。「本書を脱稿した今，復帰までの沖縄戦後史について筆者の感想を一言で表現すると，「米政府は沖縄の魂をズタズタに切り裂き愚弄し，それを日本政府が終始一貫追認・黙認してきた」という激しい憤りと悲痛な思いである。」

『若者の未来をひらく―親，学校，現場体験が育む「就業意識」』うつみ恵美子（なんよう文庫）

『それぞれの歩幅で―発達支援を考える』（新報新書）

沖縄県の教職員は必読。第30回ファイザー医学記事賞優秀賞を受賞した連載記事を加筆修正してまとめた。「乳幼児期」「学童期」「思春期」「青年期」と成長段階に応じてまとめられている。沖縄県の発達支援の取り組みが具体的にわかる。

『まちかんてぃ！　動き始めた学びの時計』珊瑚舎スコーレ編著（高文研）

夜間中学校の生徒たちの聞き書きである。泊高校の定時制に進学した人たちも多い。沖縄教員塾の授業料から夜間中学校に毎年寄付しています。

10-11 特別支援教育

『障害児教育を考える』茂木俊彦（岩波新書）

茂木俊彦は最後の東京都立大学総長，桜美林大学大学院心理学研究科教授。専攻は教育心理学，障害児心理学。「今日，特別支援教育への教師や関係者の関心の向け方は，障害が相対的に軽い障害児の教育にやや傾斜しているように思われる。言い換えれば重度・重症の子どもとその教育が，視野の周辺部分に追いやられてい

るのではないか。」という問題意識から，本のタイトルに「特別支援教育」ではなくて，あえて「障害児教育」ということばを使っている。

『障害児と教育』茂木俊彦（岩波新書）

「障害についていくら深く知ったとしても，それだけでは，その障害児の子どもとしての全体像がわかったということにはならない。いいかえれば，障害児とは障害をもつ「子ども」なのだ」。「子どもの教育は，つねに現在を充実させることに重点をおき，そこに明日への挑戦を含みこむという構図でとりくまれるべきであり，そういう教育こそが子どもの発達の法則にも合っているのである」。

『特別支援教育―多様なニーズへの挑戦』柘植雅義（中公新書）

『ある盲学校教師の三十年』鈴木栄助（岩波新書）

1978年発行。鈴木栄助は1917年生まれ県立山形盲学校に30余年勤務。全日本盲学校教育研究会長などを務めた。「盲児（者）たちは点字を触読できるようになると，奇妙に童顔を取り戻し，荒んだ心が落ち着くことを体験して来た。それは『知性人』（homo sapiens）としての人間が文化を摂りいれる媒体としての文字＝点字を修得して自己を確立したことを意味した」。電話機を発明したベルは，ボストン聾学校教師であった。視話法（発声による空気振動を視覚化して聾児の読話に役立たせる教育法）の研究実践が，電話機発明につながったのである。彼が1898年（明治31年）東京盲唖学校で行った講演で呼びかけたのは，「第一に盲唖学校教員養成機関の設置」であり，「第二項は，盲と聾唖とを分離して各府県が，必ず一つの盲学校と聾唖学校とを設ける」ことだった。

『発達障害の子どもたち』杉山登志郎（講談社現代新書）

『発達障害のいま』杉山登志郎（講談社現代新書）

杉山登志郎は専門が児童青年期精神医学の医師。「特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議」で，特別支援教育コーディネーターを専門職とすることを主張した人である。発達障害の入門書として，まずは『発達障害の子どもたち』を読む。

『発達障害かもしれない―見た目は普通の，ちょっと変わった子』磯部潮（光文社新書）

『高機能自閉症児を育てる―息子・Tの自立を育てた20年の記録』高橋和子（小学館101新書）

高橋和子は金沢大学子どものこころの発達研究センター特任助教。言語聴覚士，臨床発達心理士スーパーバイザー，特別支援教育士スーパーバイザー。高機能自閉症の息子の初語は，3歳8か月の時である。そして京都大学の工学系の大学院博士課程前期在学中（2010年現在）。「私は，障害名というのは，子どもを理解するために役立てるもの，と思っています。障害名が何であろうとも実際の子どもは存在していて，その特徴は変わらないわけです。つまり子どもの特徴をよく理解することが大切だと思います」。

『障害と子どもたちの生きるかたち』浜田寿美男（岩波現代文庫）

浜田寿美男は奈良女子大学名誉教授。専攻は発達心理学・法心理学。自閉症のたかし君，右手の指がないみつ子さんとのかかわりを描きながら，障害を一つの〈文化〉，一つの〈生きるかたち〉と考えることを提案している。

『自閉症スペクトラム障害―療育と対応を考える』平岩幹男（岩波新書）

平岩幹男は東京大学医学部卒業，医学博士。自閉症の療育，高機能自閉症での社会生活訓練（SST）に詳しい。

『うちの火星人―5人全員発達障がいの家族を守るための“取扱説明書”』平岡禎之（光文社）

平岡禎之はコピーライター・CMディレクター（広告代理店勤務）。沖縄タイムスの連載をもとにしている。

『自閉症の僕が跳びはねる理由』『自閉症の僕が跳びはねる理由2』東田直樹（角川文庫）

28か国で翻訳されている。会話のできない当事者の思いを知ることができる。

『アスペルガー症候群の難題』井出草平（光文社新書）

『五体不満足』乙武洋匡（講談社文庫）

乙武洋匡は2007年から2010年まで小学校教諭。2010年から2012年まで中央教育審議会・初等中等教育分科

会・特別支援教育の在り方に関する特別委員会の委員。2013年から2015年まで東京都教育委員。500万部，日本第3位のベストセラーの本である。「なぜ彼はスポーツライターとして活躍していたにもかかわらず，わざわざ教員免許を取得してまで教師になったのか」が分かる。彼が登校している間，母親が廊下などで付き添うことなどが条件で，彼は初めて普通学校に通えた。

第11章 自然科学

11-1 全般

『科学と科学者のはなし―寺田寅彦エッセイ集』池内了編（岩波少年文庫）
『科学の現在を考える』村上陽一郎（講談社現代新書）
『高校生のための科学キーワード100』久我羅内（ちくま新書）
『科学者が人間であること』中村桂子（岩波新書）
『市民科学者として生きる』高木仁三郎（岩波新書）
『原発はなぜこわいか　増補版』天笠啓祐（高文研）
『科学者は戦争で何をしたか』益川敏英（集英社新書）

11-2 数学

『零の発見―数学の生いたち』吉田洋一（岩波新書）
吉田洋一（1898～1989年）の専攻は数学。1939年発行。「タレスはみずからも幾何学の研究に手を染め，例えば，二等辺三角形の底角が相等しい，という定理は彼の発見にかかわるものといわれている」。「ピュタゴラスの天文学は，また，その音楽理論と切り離すことのできないものであった」。
『数学的思考法』芳沢光雄（講談社現代新書）
『数に強くなる』畑村洋太郎（岩波新書）
『数学受験術指南―一生を通じて役に立つ勉強法』森毅（中公文庫）
森毅（1928～2010年）の専攻は数学。昔の京大受験生の多くが読んだ。

11-3 宇宙

『宇宙と生命の起源―ビッグバンから人類誕生まで』『宇宙と生命の起源2―素粒子からから細胞まで』
嶺重慎・小久保英一郎編（岩波ジュニア新書）
『宇宙は何でできているのか―素粒子物理学で解く宇宙の謎』村山斉（幻冬舎新書）
村山斉は東京大学数物連携宇宙研究機構（IPMU）の初代機構長。専門は素粒子物理学。新書大賞2011受賞。「のちに「アトム」の語源となった「atomon」とは，「それ以上は分割できない」という意味です。タレスやアリストテレスが自分の知っているものを「物質の根源」と考えたのとは違い，デモクリトスは目に見えないものを想定しました。素粒子物理学者はしばしば未知の粒子の存在を予言しますが，この分野で最初の「予言者」はデモクリトスだったと言えるでしょう」。
『宇宙になぜ我々が存在するのか―最新素粒子論入門』村山斉（ブルーバックス）

11-4 生物

『生物と無生物のあいだ』福岡伸一（講談社現代新書）
福岡伸一は青山学院大学教授。専攻は分子生物学。新書大賞2008受賞。評判どおり面白い。「極上の科学ミステリー」と広告されているが，物語を読むように，分子生物学の最前線を学ぶことができる。宗教や哲学や法律よりも，ましてや国が強制する道徳教育ではなく，生物学を学ぶことで，自らの存在そのものが「奇跡」

であることを知り，他の存在も同じように「奇跡」であることを知ることが，倫理を学ぶ一番の近道であると思う。

『新版　動的平衡―生命はなぜそこに宿るのか』（小学館新書）

『動的平衡２』福岡伸一（木楽舎）

『世界は分けてもわからない』福岡伸一（講談社現代新書）

『できそこないの男たち』福岡伸一（光文社新書）

新書大賞2009第2位。福岡伸一の2冊目はこれがいい。男が生物学的にダメな性であることがわかる。

『ゾウの時間　ネズミの時間―サイズの生物学』本川達雄（中公新書）

本川達雄は琉球大学助教授などを経てより東京工業大学名誉教授。専攻は動物生理学。高校の生物の教科書も執筆している。

『生命をつなぐ進化のふしぎ―生物人類学への招待』内田亮子（ちくま新書）

『発酵』小泉武夫（中公新書）

『働かないアリに意義がある』長谷川英祐（メディアファクトリー新書）

『縮む世界でどう生き延びるか？』長谷川英祐（メディアファクトリー新書）

長谷川英祐は進化生物学者。北海道大学大学院准教授。「私たちが最初に「働きアリの2割ほどはずっと働かない」という結果を学会で発表したところ，ある新聞がそれを記事にしました。すると翌日「――働きアリの2割働かず――この研究やった人ヒマだよね」という読者の投稿ジョークが紙面に載り，思わず笑ってしまいました（本当におかしかった）。実際は1日に7～8時間の観察を2ヵ月以上続けるというハードな研究で，観察を担当した1名は疲労から途中で点滴を打ちながら観察を続け，血尿まで出した，という大変な実験だったからです。まさに血の滲む思いで遂行された研究なので，いまこうして本になると感慨深いものがあります。」

『昆虫はすごい』丸山宗利（光文社新書）

『虫捕る子だけが生き残る』養老孟司・池田清彦・奥本大三郎（小学館101新書）

『植物はすごい―生き残りをかけたしくみと工夫』田中修（中公新書）

『栽培植物と農耕の起源』中尾佐助（岩波新書）

『花と木の文化史』中尾佐助（岩波新書）

11-5　赤ちゃん

『胎児の世界―人類の生命記憶』三木成夫（中公新書）

三木成夫（1925～87年）は解剖学者。こういう人のことを博覧強記と言うのだろう。「個体発生は系統発生の短い反復」であるという考えに基づき，堕胎された胎児の死体を解剖して，スケッチしている。「受胎32日目の胎児の顔＝古代魚類の顔」「受胎34日目の胎児の顔＝両生類の顔」「受胎36日目の胎児の顔＝原始爬虫類の顔」「受胎38日目の胎児の顔＝原始哺乳類の顔」「受胎40日目の胎児の顔＝ヒトの顔」。「地球の生物のからだには，7日目ごとに，何か目に見えぬ不可思議な波がそっと忍び寄ってくるのか」として，1週間・初七日・49日・女性の月の周期28日を例示している。

『私は赤ちゃん』松田道雄（岩波新書）

『私は二歳』松田道雄（岩波新書）

松田道雄（1908～98年）は小児科医。それぞれ1960年・1961年発行。半世紀以上読まれ続けている本である。「危険の起こらない条件を用意しておいて捨て育ちにするというのが赤ちゃんをうまく育てるコツです。」

『赤ちゃんの不思議』開一夫（岩波新書）

開一夫は東京大学大学院総合文化研究広域システム科学系教授。専攻は赤ちゃん学，発達認知神経科学，機械学習。工学博士。「発達心理学の世界では神様的な存在である，ジャン・ピアジェは，自分自身の3人の子どもが赤ちゃんのころから「実験」を行い，それに基づいて膨大な数の著作物を出版し，発達心理学の理論的基

礎を築きました。また，進化論で有名なチャールズ＝ダーウィンも，1877年に自分の長男（ウィリアム＝ダーウィン）の育児日記に基づいた論文を『マインド（*Mind*）』という科学ジャーナルで発表しています」。

『ことばの発達の謎を解く』今井むつみ（ちくまプリマー新書）

今井むつみは慶應義塾大学環境情報学部教授。専門は認知科学，言語心理学，発達心理学。「多くの人は，子どもが「大人にことばの意味を直接教わり，間違いを直してもらいながら覚える」と誤解していますが，実際には，子どもは大人の話しかけを自分で分析し，自分でことばの意味を覚えていくのです。」

第12章　共生社会・看護・医療

12-1　高齢者

『沖縄が長寿でなくなる日』沖縄タイムス「長寿」取材班編（岩波書店）
『介護保険―地域格差を考える』中井清美（岩波新書）
『介護―現場からの検証』結城康博（岩波新書）
『下流老人―一億総老後崩壊の衝撃』藤田孝典（朝日新書）
藤田孝典はNPO法人ほっとプラス代表理事，社会福祉士。1982年生まれ。新書大賞2016第5位。

12-2　子ども

『子どもの貧困』阿部彩（岩波新書）
阿部彩は首都大学東京教授。「15歳児の貧困」→「限られた教育機会」→「恵まれない職」→「低所得」→「低い生活水準」という貧困の連鎖を指摘する。「家庭の貧困は，子どもが非行にかかわってしまう確率をも高める。しかし，この事実にも，日本は目をつぶってきた」。「少年がかかわった犯罪の度合いが重いほど，その少年が貧困世帯である確率が高いのである」。岩波新書の3冊『ルポ　貧困大国アメリカ』堤未果・『反貧困―「すべり台社会」からの脱出』湯浅誠・『子どもの貧困』阿部彩は，「貧困3部作」としてまとめて推薦する。
『子どもの貧困Ⅱ―解決策を考える』阿部彩（岩波新書）
『子どもが育つ条件―家族心理学から考える』柏木惠子（岩波新書）
柏木惠子は東京女子大学名誉教授。専攻は発達心理学・家族心理学。子育て支援は，子育てする「大人」への支援である。子ども自身の育ちとはなっていない。「「つくらない」という選択もある中で「つくる」と決めて「つくった」子は親の「もちもの」的存在となりがちです」。「子どもが育つ条件をつくるためには，おとな自身も発達し，成長しつづけることが前提です」。観察学習の「バンデュラは「子どもは（親から）いわれたことはしない，親にみたことをする」と記しています」。教師が何をどのように教えるかだけではなく，教師がどのような人間であるのかが大切である。
『それでも子どもは減っていく』本田和子（ちくま新書）
本田和子はお茶の水女子大学初の女性学長。児童学，児童文化論，児童社会史専攻。子ども学の権威が78歳で書いた本（2009年出版）。「20世紀の初めに，スウェーデンの女流思想家エレン・ケイは，近代の訪れを「婦人と子どもの時代」と歓迎し，彼・彼女らの生きやすい社会の構築が輝かしい未来に繋がると主張した。彼女は，当時新興科学であった「優生学」を踏まえて，良質の遺伝子を持った子どもこそが未来を進化させると説き，子どもにバラ色の夢を託した」「彼女にとって，「母性」こそが何物にも勝る女性の価値と見なされていたのである」。「3歳までは母親が養育すべきとする「3歳児神話」は，関係者たちの継続的な努力によって真実度が試され，現在母親の養育の絶対視は否定されている。3歳児神話の根拠とされたのは，英国の精神分析家ジョン・ボウルビイの「アタッチメント理論（情緒的愛着行動の意）」であった。つまり，乳幼児の発達の阻害は，「母性的養育の喪失」であるとして，母子の密着を奨励したのである。彼のこの理論は，WHOの要請に応えて1951年に提出された。しかし，1980年以降，ボウルビイ説に疑義を呈する研究が相次ぎ，彼も，後には「主要な養育者に代わって，二次的養育者もその責を果たすことが出来る」として，自身の「母親絶対説」を修正している」。
『ひとり親家庭』赤石千衣子（岩波新書）
『児童虐待―現場からの提言』川﨑二三彦（岩波新書）
『ルポ虐待―大阪二児置き去り死事件』杉山春（ちくま新書）

杉山春はルポライター。生活保護家庭で育った青年たちの支援にも携わる。新書大賞2014第7位。

『誕生日を知らない女の子　虐待―その後の子どもたち』黒川祥子（集英社）

12-3 障害者

『声が生まれる―聞く力・話す力』竹内敏晴（中公新書）

竹内敏晴（1925～2009年）は16歳まで聴覚障害で，ほとんど聞こえなかったが，一高から東大に進学・卒業した演出家。ある程度自在に話すことができるようになったのは，聞こえてから20数年後の40歳代半ばになってからである。彼はそれを「ことばが劈（ひら）かれた」と表現した。宮城教育大学教授などで教育に携わりながら，「からだとことばのレッスン」を行った。「子どもが自分がイヤなことはイヤだと言え，相手に合わせるのではない自分がほんとうに感じていることを，十分にことばにできるようになるためには，なによりも，母の，父の，友だちの，そして教師の，じかに子どもにふれてくる呼びかけが必要です。それに応えることによって，子どもの声は成長し，自分のことばになる。人という生きものは，ことばによって，人間になるのですから」。「『話す』とは，声によって人に働きかけ，相手の行動＝存在の仕方を変えることだ」。

『重い障害を生きるということ』髙谷清（岩波新書）

髙谷清は医師，重症心身障害児施設である第一びわこ学園園長（1984～97年）。第20回（2011年）ペスタロッチー教育賞受賞者。「さまざまな生きもの，それに人類も長い歴史のなかで多くの変化を遂げ，また死に絶えた生物種も多い。種全体の変貌とともに，個々の個体の多様性があり，「障害」といわれる生きるのに不利な状態も存在することになる。その原因は遺伝性を含む出生前のこともあるし，出生時や出生後の無酸素症などが原因のこともある。どのような生物種も病気や障害を抱えながら変貌を遂げている。というよりは変貌が障害を生み出したとも言えるし，その生物種に障害の個体を生み出しつつ，変貌を遂げてきたとも言える。そういう意味では，人類の障害を引き受けている個体は「人類戦士」であると言ってよいのではないだろうか」。重度の障害者の問題を通して，人間とは何かを根本的に考える哲学書として推薦する。

『輝―いのちの言葉』臼田輝（自費出版）

臼田輝は，5歳でマンション5階から転落し，頭部損傷による，四肢体幹機能に重い障害を負い，16歳で亡くなった。私立の特別支援学校・愛育学園に通い，都立特別支援学校の中等部1年生からパソコン指導を介して文章表現を開始した。ことばを発することがなく，ことばを持たないと考えられていた重度の障害者が，ことばを理解し，ことばで思考していることを教えてくれる。自費出版のため注文は愛育学園にメールかファックスで。

『さわっておどろく！―点字・点図がひらく世界』広瀬浩二郎・嶺重慎（岩波ジュニア新書）

広瀬浩二郎は国立民族学博物館准教授。専門は日本宗教史，障害者文化論。13歳で失明。筑波大学附属盲学校から京都大学文学部に進学。上高の1年後輩。彼の入学の際に大学のスロープづくりなどのバリアフリー化が行われた。嶺重慎は京都大学大学院理学研究科教授。専門は宇宙物理学。

『目の見えない人は世界をどう見ているのか』伊藤亜紗（光文社新書）

伊藤亜紗は東京工業大学リベラルアーツセンター准教授。専門は美学，現代アート。

「個人の「できなさ」「能力の欠如」としての障害のイメージは，産業社会の発展とともに生まれたとされています。現代まで通じる大量生産，大量消費の時代が始まる時期，均一な製品をいかに速くいかに大量に製造できるかが求められるようになりました。その結果，労働の内容も画一化されていきます。車を作るのに，Aさんが作ったのとBさんが作ったので出来上がりが違うのでは困る。「誰が作っても同じ」であることが必要であり，それは「交換可能な労働力」を意味します。

こうして労働が画一化したことで，障害者は「それができない人」ということになってしまった。それ以前の社会では，障害者には障害者のできる仕事が割り当てられていました。ところが「見えないからできること」ではなく「見えないからできないこと」に注目が集まるようになってしまったのです。」

『しょうぶ学園40周年記念誌　創ってきたこと、創っていくこと　ここには屈託のない笑いがある。』
社会福祉法人太陽会・SHOBU STYLE
『累犯障害者』山本譲司（新潮文庫）
山本譲司は元衆議院議員。政策秘書給与の流用事件で逮捕・起訴。実刑判決を受け433日間の獄中生活を経験。「被害者になる障害者のほうが，加害者になる障害者よりも，何十倍も多い」事実を踏まえて，触法障害者の問題を取り上げている。彼らの多くが刑務所を「一番暮らしやすかった」と言うからだ。2004年の「新受刑者総数32090名のうち7172名（全体の約22%）が知能指数69以下の受刑者」，「測定不能者も1687名おり，これを加えると，実に3割弱の受刑者が知的障害者として認定される」。「善悪の判断が定かでないため，たまたま反社会的な行動を起こし検挙された場合も，警察の取調べや法廷において，自分を守る言葉を口述できない。反省の言葉も出てこない。」「司法の場での心証は至って悪く，……反省なき人間と看做され，実刑判決を受ける可能性が高くなるのだ」。「知的障害のある受刑者の7割以上が刑務所への再入所者」。そのうち「10回以上服役している者が約2割を占める」。
「我が国の障害者福祉に使われる予算」は，「対国内総生産比に占める障害者予算」で「スウェーデンの約1/9，ドイツの約1/5，イギリスやフランスの約1/4，そして社会保障制度の不備が指摘されるアメリカと比べても，その1/2以下となっている。」

12-4 看護・医療

『いのちの始まりと終わりに』柳澤桂子（草思社）
『医療の原点』中川米造（岩波書店）
『医療の倫理』星野一正（岩波新書）
『「生きている」を見つめる医療』中村桂子＋山岸敦（講談社現代新書）
『はじめて学ぶ生命倫理―「いのち」は誰が決めるのか』小林亜津子（ちくまプリマー新書）
『「尊厳死」に尊厳はあるか―ある呼吸器外し事件から』中島みち（岩波新書）
中島みちはノンフィクション作家。日本医療機能評価機構評議員。2006年の富山県射水市民病院での人工呼吸器外し事件に半分以上の分量が割かれている。当該医師の「アバウトな理解・対応」「独善的な行動」「過剰手術＝切りすぎ」の実態は，目に余るものがある。この事件が発覚したのは，病院改革の一環としての看護師の意識改革によるものである。看護担当副院長として迎えられた看護師の意識改革の取り組みによって，当該医師の呼吸器はずしに何の疑問も出なかった現場から，疑問の声が出たのである。患者と家族の側に立って医師に意見できる看護師の存在は，どうしても必要である。
『移植医療』櫛島次郎・出河雅彦（岩波新書）
『看護師という生き方』宮子あずさ（ちくまプリマー新書）
宮子あずさは職歴30年の現役看護師。
『看護の力』川嶋みどり（岩波新書）
川嶋みどりは看護師歴60年。日本赤十字看護大学名誉教授。
『看護―ベッドサイドの光景』増田れい子（岩波新書）
『リハビリテーション』砂原茂一（岩波新書）
『新しいリハビリテーション―人間「復権」への挑戦』大川弥生（講談社現代新書）
『地域リハビリテーション―あせらずあきらめず』長谷川幹（岩波アクティブ新書）
『タバコはなぜやめられないか』宮里勝政（岩波新書）
『感染症と文明―共生への道』山本太郎（岩波新書）
山本太郎は医師，長崎大学熱帯医学研究所教授。専門は国際保健学，熱帯感染症学。アフリカ，ハイチなどで感染症対策に従事。感染症による免疫を持っているか，持っていないかが異文化接触で果たした役割を歴史

的に紹介する。歴史が違って見えてくる。

第13章　哲学･宗教･思想

13-1　哲学全般

『〈子ども〉のための哲学』永井均（講談社現代新書）

永井均は日本大学教授。専攻は哲学，倫理学。哲学の入門書として一番のお薦め。

『哲学入門』三木清（岩波新書）

『入門！　論理学』野矢茂樹（中公新書）

野矢茂樹は東京大学大学院総合文化研究科教授。専攻は哲学。「「論理」とは，ことばとことばの関係の一種なのです」。否定・「かつ」・「または」・「ならば」・命題論理・「すべて」・「存在する」・述語論理について，説明する本である。

『物語　哲学の歴史―自分と世界を考えるために』伊藤邦武（中公新書）

伊藤邦武は京都大学大学院文学研究科教授。専攻は哲学，思想史。「魂の哲学―古代・中世」，「意識の哲学―近代」，「言語の哲学―20世紀」，「生命の哲学―21世紀へ向けて」という4章立てである。

『西洋哲学史―古代から中世へ』『西洋哲学史―近代から現代へ』熊野純彦（岩波新書）

熊野純彦は東京大学教授。専攻は倫理学，哲学史。論理の切れ味は抜群。文体が小気味よい。上高の哲学の先生です。以下のような話が紹介されている。ベーコンの秘書を務めていたのが社会契約説のホッブズであり，ベーコンの侍医（じい）を務めていたのが血液循環論のハーヴェーである。ホッブズは，デカルトの『省察』初稿を読み，疑問点を提出して，デカルトが応えた。ロックの『人間知性論』が出版されると，ライプニッツは『人間知性新論』を執筆したものの，ロックの死の報に接して公刊をひかえる。ロックの友人が万有引力の法則のニュートンである。ニュートンとライプニッツの微積分法の発見にまつわるプライオリティの争いは有名である。ヒュームの友人が古典派経済学の祖アダム＝スミスである。

『近代哲学の名著―デカルトからマルクスまでの24冊』熊野純彦編（中公新書）

以下は24冊の一部。デカルト『方法序説』。バークリ『人知原理論』。カント『純粋理性批判』。フィヒテ『全知識学の基礎』。ロック『人間知性論』。ライプニッツ『人間知性新論』。ヘーゲル『精神現象学』。ライプニッツ『形而上学叙説』。ヒューム『人性論』。カント『判断力批判』。ヘーゲル『論理学』。デカルト『省察』。スピノザ『エチカ』。シェリング『人間的自由の本質』。ルソー『言語起源論』。スミス『道徳感情論』。カント『実践理性批判』。マルクス『経済学批判要綱』。

『現代哲学の名著―20世紀の20冊』熊野純彦編（中公新書）

以下は20冊の一部。ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』。ハイデガー『存在と時間』。西田幾多郎『西田幾多郎哲学論集』。ベルクソン『時間と自由』。和辻哲郎『倫理学』。ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』。アドルノ『否定弁証法』。

『日本哲学小史―近代100年の20篇』熊野純彦編著（中公新書）

西田幾多郎，和辻哲郎，三木清などが取り上げられる。

『日本倫理思想史』佐藤正英（東京大学出版会）

佐藤正英は東京大学名誉教授。倫理学・日本倫理思想史専攻。

『西洋哲学の10冊』左近司祥子編著（岩波ジュニア新書）

左近司祥子は学習院大学名誉教授。専門はギリシア哲学。プラトン『饗宴』，アリストテレス『ニコマコス倫理学』，アウグスティヌス『告白』，デカルト『方法序説』，カント『純粋理性批判』，ルソー『告白』，ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』，ベルグソン『時間と自由』，ハイデガー『存在と時間』，ラッセル『幸福論』の10冊。

『哲学マップ』貫成人（ちくま新書）

『日本語の哲学』長谷川三千子（ちくま新書）

『言語と「期待」』重松健人（関西学院大学出版会）

重松健人は京都大学大学院文学研究科などの非常勤講師で，上高の大学の同級生。20年以上も会っていないのに，同じような本を読んでいるのには驚いた。大学生向けの哲学の入門書。

『正義論の名著』中山元（ちくま新書）

中山元は思想家・翻訳家。以下は30冊の一部。ホメロス『オデュッセイアー』。プラトン『国家』。アリストテレス『ニコマコス倫理学』。キケロ『義務について』。アウグスティヌス『神の国』。トマス・アクィナス『神学大全』。マキアヴェッリ『君主論』。ホッブズ『リヴァイアサン』。スピノザ『エチカ』。ロック『市民政府論』。ルソー『社会契約論』。カント『人倫の形而上学』。ヒューム『人性論』。アダム＝スミス『道徳感情論』。ベンサム『道徳および立法の諸原理序説』。ヘーゲル『法の哲学』。マルクス『ドイツ・イデオロギー』。ニーチェ『道徳の系譜学』。ベンヤミン『暴力批判論』。ロールズ『正義論』。ハーバーマス『討議倫理』。レヴィナス『全体性と無限』。

『自己啓発の名著30』三輪裕範（ちくま新書）

13-2 ギリシア哲学

『ソクラテスの弁明』『クリトーン』『パイドン』プラトン

『哲学者の誕生―ソクラテスをめぐる人々』納富信留（ちくま新書）

納富信留は慶応大学文学部教授。古代ギリシアの時代状況・社会状況の中で，いかに哲学が生まれたかを知ることができる。同性愛・少年愛が当たり前の時代だから，ソクラテスの同性の恋人の話もでてくる。

『知者たちの言葉―ソクラテス以前』斎藤忍随（岩波新書）

斎藤忍随（1917～86年）の専攻は哲学。ヘラクレイトスとエンペドクレスを中心に扱い，補足的にデモクリトスを取り上げている。次のようにある。「原子論の哲学者として知られるデモクリトスは，知識の広い点ではアリストテレスにも匹敵するのではないかと思われるほどの天才であった」。彼が「ペルシア，バビロニア，エジプトまで旅行したことは確かであるし，インド，エチオピアまでも足を伸したという説さえある」。彼の著作目録は「原子論の基本理論，宇宙論，天文学，地理学，生理学，医学，感覚論，知識論，数学，磁気学，植物学，音楽理論，言語学，倫理学，農業，絵画，その他の領域をおおっているのである」。

『ソクラテス』田中美知太郎（岩波新書）

田中美知太郎（1902～85年）の専攻は西洋古代哲学。「いろいろな知識を外から注ぎこむよりも，むしろ自分で考え，自分で発見させることが，教育者の仕事であり，外来の知識は，出産を助けるための投薬や呪文として，適当に用いなければならないことが言われているのである。もしソクラテスが，新しい教育運動の主動者であったとするならば，それはこのような教育原理の主張者としてであっただろう」。

『プラトン』斎藤忍随（岩波新書）

「アリストテレスが言うように，「プラトンの対話篇が詩と散文の中間にある」とすれば，対話篇は一種の文学作品であると言ってよいが，そうなると，主人公ソクラテスにもプラトンの虚構の手が入っていることになるだろう」。

『プラトンの哲学』藤沢令夫（岩波新書）

藤沢令夫（1925～2004年）の専攻は西洋哲学史，ギリシア哲学。「プラトンのアカデメイアでは，「問答・対話の術」（ディアレクティケー）を学ぶための予備学問として，数学的諸学科――算数・幾何学・天文学・音楽理論など――が重要視されたことが特色となっている」。

『アリストテレス―自然学・政治学―』（岩波新書）

山本光雄（1905～81年）の専攻は西洋古代哲学。「弁論術はギリシア人の自由な弁論を愛好する素質に発し，民主主義の発展に応じて発達し，アリストテレスによって学問的に術として組織された」。

13-3 宗教全般

『ものがたり宗教史』浅野典夫（ちくまプリマー新書）

浅野典夫は大阪府立高校社会科教諭。ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教・仏教・ヒンドゥー教について基本的な内容を解説している。「24日はクリスマスイブ。イブを前日の意味だと思っている人がいますが，イブはイブニング，夜の意味です。では，25日クリスマスのイブニングがなぜ24日なのでしょうか。これは，ユダヤ人の風習に由来します。われわれは日の出を一日の始まりと考えますが，ユダヤ人は日没を一日の始まりとしていました。ですから，25日の夜は，その前日の夜なのです」。

「世界中に仏塔はどのくらいあるかわかりませんが，その地下には必ずガウタマの遺骨が納めてある建前です。だからガウタマの遺骨はどんどん細かく分割されて米粒ほどに小さくなっており，これを仏舎利（ぶっしゃり）といいます。寿司屋さんで米のことをシャリというのはここから来ています。世界中の仏舎利を集めると数十人の人骨になるそうです」。

『教科書の中の宗教―この奇妙な実態』藤原聖子（岩波新書）

藤原聖子は東京大学教授。専門は比較宗教学。公民志望者は必読。「日本の倫理教科書はみな，例外なく，古代ユダヤ教を「律法主義」「形式主義」「選民思想」の言葉（いずれか，またはすべて）で形容している。それに対して，少なくともイギリス，アメリカ，ドイツ，フランスの教科書は，ユダヤ教を説明するときに「律法主義」「選民思想」という単語は使わないのが常識のようである」。「「主義」という接尾語をつけると，非難めいたニュアンスが強まる。「律法主義」や「形式主義」という言葉は，ユダヤ教に対するマイナスのステレオタイプであり，一種の差別語なのである。「選民思想」もしかりである」。

『宗教学の名著30』島薗進（ちくま新書）

島薗進は東京大学名誉教授。主な研究領域は比較宗教運動論，近代日本宗教史。以下は30冊の一部。空海『三教指帰（さんごうしいき）』。ウェーバー『プロテスタンティズムと資本主義の精神』。エリクソン『幼児期と社会』。ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』。ヤスパース『哲学入門』。

13-4 キリスト教・イスラーム

『新約聖書マタイ伝』

『聖書入門』小塩力（岩波新書）

『マルティン・ルター―ことばに生きた改革者』徳善義和（岩波新書）

徳善義和はルーテル学院大学，ルーテル神学校名誉教授。専攻は歴史神学（宗教改革）。ルター作詞・作曲の「神はわがやぐら」は，ナチスが軍靴音を響かせた行進曲として利用した。そのため，過去の過ちを忘れない人たちの多くは，この讃美歌を歌うことにためらいを感じるそうである。

『ふしぎなキリスト教』橋爪大三郎×大澤真幸（講談社現代新書）

橋爪大三郎は東京工業大学名誉教授，社会学者。大澤真幸は，京都大学元教授，社会学者。新書大賞2012受賞。対談なので読みやすい。「近代の根拠となっている西洋とは何か。もちろん，西洋の文明的なアイデンティティを基礎づけるような特徴や歴史的条件はいろいろある。だが，その中核にあるのがキリスト教であることは，誰も否定できない」。

『ウオッチマン・ニーの証し』（日本福音書房）

『〈カラー版〉メッカ』野町和嘉（岩波新書）

野町和嘉は写真家でムスリム。メッカとメディナは，ムスリム以外は入ることができない。筆者はムスリムだから，メッカに入り，写真を撮ることができた。ラマダーン（断食）について以下のように解説している。「ひと月のあいだ，地球上で12億もの人間が等しく体験している，飢えと渇きの果ての食の輝き，いのちの更新の感動を，生きることに忙しすぎる私たちは感知できないでいる」。

13-5　仏教

『〈カラー版〉ブッダの旅』丸山勇（岩波新書）

美しい風景の中で，ブッダの足跡をたどれる。思想・宗教を，それが生まれた時代背景や土地と結びつけて理解することは大切である。

『新釈尊伝』渡辺照宏（ちくま学芸文庫）

『仏教　第二版』渡辺照宏（岩波新書）

『日本の仏教』渡辺照宏（岩波新書）

渡辺照宏（1907～77年）の専攻はインド哲学・仏教。サンスクリット語，パーリ語，アルダマーガディー語，プラークリット語，チベット語などに精通した。

『ブッダは，なぜ子を捨てたか』山折哲雄（集英社新書）

『ゆかいな仏教』橋爪大三郎×大澤真幸（サンガ新書）

橋爪大三郎は東京工業大学名誉教授，社会学者。大澤真幸は，京都大学元教授，社会学者。対談なので読みやすい。

13-6　諸子百家･儒教･儒学

『孔子』貝塚茂樹（岩波新書）

貝塚茂樹（1904～87年）の専攻は中国古代史。。ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹（1907～81年）の実兄である。1951年初版。「孔子の伝記として，もっとも古いのは，漢の武帝時代に出た，中国の歴史の父ともいうべき大歴史家であった司馬遷の著わした，『史記』と名づける通史の一篇をなしている「孔子世家」である。中国第一等歴史家であった上に，孔子の学問と人格に深く傾倒して，自分こそ孔子の道を漢の世にひろめる使徒であると自任していた司馬遷が，とくに精魂をこめて筆をふるったので，高遠な理想を抱きながら，その志を得ず，諸国に流浪してたびたび危難に遇った孔子の不運の生涯が，まざまざと描き出されて，読者の胸をうつものがある。」

『論語入門―真意を読む』湯浅邦弘（中公新書）

湯浅邦弘は大阪大学教授。専攻は中国哲学。「古代中国の諸子百家の中で，自らを「○○家」とか「○○者」と自称して集団的活動を展開したのは，儒家と墨家のみである」。

『論語入門』井波律子（岩波新書）

井波律子は国際日本文化研究センター名誉教授。中国文学研究者。「『論語』には数えきれないほどの注釈書や解説書があるが，そのもとになるのは，いわゆる「古注」と「新注」である。古注とは，魏の何晏（190ごろ～249）がそれまでの注釈を整理し編纂した『論語集解』を指し，新注とは，南宋の朱子（1130～1200）の著した注釈を指す。また，日本におけるすぐれた注釈書としては，江戸時代，伊藤仁斎（1627～1705）の著した『論語古義』，荻生徂徠（1666～1728）の著した『論語徴』があげられる。」

『本当は危ない『論語』』加藤徹（NHK出版新書）

加藤徹は明治大学教授。専攻は中国文学。「もともと二級の副読本にすぎなかった『論語』が一級の聖典にまで格上げされるまでの歴史のダイナミズム」を描く。「孔子の死から現行の『論語』ができあがるまで，約700年もの歳月がたっていた」。

『儒教とは何か』加地伸行（中公新書）

『孔子―時を越えて新しく』加地伸行（集英社文庫）

加地伸行は大阪大学名誉教授。専攻は中国哲学史。孔子は「怨む」ことも「憎む」ことも認めていた。孔子は魯の司寇（法務大臣兼警察庁長官・警視総監）になった際，ライバルを政治的に粛清している。その遺体を3日さらしたという伝説もある。

『諸子百家―中国古代の思想家たち』貝塚茂樹（岩波新書）
『諸子百家―儒家・墨家・道家・法家・兵家』湯浅邦弘（中公新書）
『古代中国の文明観―儒家・墨家・道家の論争』浅野裕一（岩波新書）
浅野裕一は東北大学大学院環境科学研究科教授。専攻は中国哲学。古代中国の文明発生時，巨大な都市文明の建設に伴って大規模な自然破壊が行われた。環境問題を孔子・墨子・老子がどのように考えていたかを解説する。
『孟子』金谷治（岩波新書）
金谷治（1920～2006年）の専攻は中国哲学。1966年初版。後年，大乗仏教の「悉有仏性（しつうぶっしょう）の説がひろく受け容れられるようになったのも，この性善思想の普及と深い関係があったと思われる」。
『朱子学と陽明学』島田虔次（岩波新書）
島田虔次（1917～2000年）の専攻は中国近世・近代思想史。1967年初版。昭和39年度の京大の東洋史の学生のための講義がもとになっている。朱子学は仏教の汎神論（はんしん）的思想の影響，道家の汎神論的な感情の影響を受けている。陽明学は，道教・仏教を肯定し，三教一致にすすむ。
『入門　朱子学と陽明学』小倉紀蔵（ちくま新書）
小倉紀蔵は京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専門は東アジア哲学。著者自身が上記の『朱子学と陽明学』（島田虔次・岩波新書）の入門書と記している。「朱子学は朱子（朱熹：1130～1200）の死の直前に「偽学」というレッテルを貼られて弾圧されたが，元の時代には官学となってその後20世紀まで東アジアをほぼ支配したといってよい。特に朝鮮は14世紀終わりから20世紀初めという長期にわたって，ほとんど朱子学一辺倒となった。陽明学は王陽明（王守仁：14720～1528）が朱子学を継承しつつそれを批判・超克したラディカルな「心の哲学」である。」
『入門　老荘思想』湯浅邦弘（ちくま新書）
『荘子―古代中国の実存主義』福永光司（中公新書）
福永光司（1918～2001年）は京都大学名誉教授。老荘思想研究の第一人者。1964年の出版。「荘子はいつわりのないもの，飾りのないもの，純粋なものを熱愛する。彼は生命を害うもの，真実を歪めるもの，自由を束縛するものを何よりも激しく憎む。彼にとって芸術とは人生と宇宙を貫くいつわりなき生命の主体的な表現であり，詩とは常識的な価値の世界を超えた万象の根源的な真実を赤裸々な言葉として語ることであった。」
『軍国日本と『孫子』』湯浅邦弘（ちくま新書）

13-7 ヨーロッパの思想

『ミケルアンヂェロ』羽仁五郎（岩波新書）
『ガリレオ・ガリレイ』青木靖三（岩波新書）
『デカルト』野田又夫（岩波新書）
野田又夫（1910～2004年）は京都大学名誉教授。哲学者。もとはNHK古典講座の放送講演の原稿なので読みやすい。デカルトの秘書的な役割を担ったメルセンヌがいたパリの修道院は，メルセンヌアカデミーと称されるほど学者の集まるサロンだった。モラリスト・数学者・物理学者のパスカル，フェルマーの最終定理の数学者フェルマー，フランス亡命中の社会契約説のホッブズ，『太陽の都』のカンパネラが出入りした。デカルトは「世間という書物」に学ぶために旅に出た。
『パスカル』野田又夫（岩波新書）
『社会契約論―ホッブズ，ヒューム，ルソー，ロールズ』重田園江（ちくま新書）
重田園江は明治大学政治経済学部教授。専門は，現代思想・政治思想史。フーコー。
『人間不平等起源論』ルソー
『ルソー』福田歓一（岩波現代文庫）

福田歓一（1923～2007年）は東京大学名誉教授，明治学院大学学長。政治哲学専攻。その人と生涯，思想の全体像を知る上で入門書としてお薦め。「『エミール』の副題はたしかに「教育論」である。そして日本では学校教師やその卵がまずこの書物に取りつき，多くのものを引き出して来た。しかしここでの教育は，ルソーが明示的に「ひとが学院とよぶかの笑うべき施設」と言っているように，学校教育とは何の関係もない。このことは教育という言葉が西洋風の学校制度の導入と同時に翻訳語として成り立った，したがって百年たった今でも圧倒的に学校教育の意味をもちつづけている日本の場合，特に注意すべきところである。」

『今こそルソーを読み直す』仲正昌樹（NHK出版新書）

仲正昌樹は金沢大学法学類教授。専攻は社会思想史，比較文学。ルソーは，外国人に基本的な立法を任せることを示唆し，自身も『ポーランド統治論』と『コルシカ憲法草案』で外国人立法者の役割を果たそうとした。GHQ中心に作られた日本国憲法を考えるうえで興味深い。

『ヘーゲルとその時代』権左武志（岩波新書）

『アダム＝スミス―『道徳感情論』と『国富論』の世界』堂目卓生（中公新書）

堂目卓生は大阪大学大学院経済学研究科教授。2008年度サントリー学芸賞受賞。スミスが，単に市場主義経済を擁護した思想家ではないことを，教えられる。スミスは，自己利益の追求は，第三者である公平な観察者の共感が得られる範囲に限られると考えていた。しかも最低水準の富さえあれば，それ以上に富が増大しても，幸福には影響しないと考えたのである。「『国富論』の原語タイトルは，Wealth of a Nationではなく，Wealth of Nationsと，最後が複数形になっている。『国富論』は，一国民または特定国民の豊かさではなく，諸国民の豊かさを探究する書物なのである」。「スミスは，（アメリカ植民地の）分離の提案を『国富論』を締めくくる言葉とした」。

『共産党宣言』『資本論（第1巻)』『ドイツ＝イデオロギー』マルクス・エンゲルス

『共産党宣言』は，「ヨーロッパに妖怪があらわれた，共産主義という妖怪が」という有名な冒頭から，「万国の労働者よ，団結せよ」という有名な末尾まで，一挙に読める。

『経済学・哲学草稿』『フランスにおける階級闘争』『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』

『フランスの内乱』『賃労働と資本』『賃金，価格および利潤』マルクス

『空想から科学へ』『家族，私有財産および国家の起源』エンゲルス

『今こそマルクスを読み返す』廣松渉（講談社現代新書）

『帝国主義論』『国家と革命』『帝国主義と民族・植民地問題』レーニン

『実践論』『矛盾論』毛沢東

『これがニーチェだ』永井均（講談社現代新書）

『ハイデガーの思想』木田元（岩波新書）

『サルトル―「人間」の思想の可能性』海老坂武（岩波新書）

海老坂武はフランス文学者。サルトルは片目が見えず，「奇妙な声」をし，身長150cmほどだったが，デートの相手には事欠かなかったことが紹介されている。またアルジェリア解放闘争を支持したために，自宅にプラスチック爆弾をしかけられたこともある。

『現代思想の断層―「神なき時代」の模索』徳永恂（岩波新書）

徳永恂は大阪大学名誉教授。専門は現代ドイツ哲学・社会思想史。1962から64年にドイツ留学し，アドルノに師事した。1929年生まれ。長崎で被爆。「この本で取り上げた思想家の主著は――ウェーバーの『世界宗教の経済倫理』，フロイトの『モーゼと一神教』，ベンヤミンの『パサージュ論』，アドルノの『啓蒙の弁証法』，ハイデガーの『存在と時間』を含めて――ことごとく未完に終った。その中断した断面の前に，われわれは立っている」。

『寝ながら学べる構造主義』内田樹（文春新書）

内田樹は神戸女学院大学名誉教授。専門は，フランス現代思想，映画論，武道論。平成28年度実施選考試験の小学校･国語で出題された。次のように構造主義を整理している。構造主義前史としてマルクス，フロイト，

ニーチェ，構造主義の始祖としてソシュール，構造主義の四銃士としてフーコー，バルト，レヴィ＝ストロース，ラカンである。

『闘うレヴィ＝ストロース』渡辺公三（平凡社新書）

渡辺公三は立命館大学大学院先端総合学術研究科教授。レヴィ＝ストロースの文化人類学の研究の全体像はもちろん，社会主義者だった青年時代，ブラジルでの先住民調査，アメリカへの亡命，ユネスコ社会科学国際委員会事務局長を務めた中年時代も描かれている。

『私家版・ユダヤ文化論』内田樹（文春新書）

第6回小林秀雄賞受賞作。「帰納法的推論の致命的な欠点は「未知のファクターの関与」や「既知のファクターの未知のふるまい」を想定しない点にある。そして現実には，私たちの社会で起こる事象のほとんどは，わずかな入力差が大きな出力差をもたらす「複雑系」なので，帰納法的推理はあまり役に立たない」。

『学問の春―〈知と遊び〉の10講義』山口昌男（平凡社新書）

山口昌男（1931～2013年）は元札幌大学学長，東京外国語大学名誉教授。文化人類学者。ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』を読みながらの講義録。

13-8 日本の思想・宗教

『日本を創った思想家たち』鷲田小彌太（PHP新書）

『日本宗教史』末木文美士（岩波新書）

末木文美士は国際日本文化研究センター名誉教授・東京大学名誉教授。仏教学・日本思想史専攻。「仏教は単に一つの宗教に留まらず，壮麗な寺院は最先端の建築・工芸の粋を尽し，医学・治水などの科学技術から音楽などの娯楽にまでわたるすべてをカバーするオールラウンドの文化であった」。

『仏教vs倫理』末木文美士（ちくま新書）

『仏典を読む』末木文美士（新潮社）

『遊行経』，『無量寿経』，『法華経』，『般若心経』，最澄『山家学生式』，空海『即身成仏義』，親鸞『教行信証』，道元『正法眼蔵』，日蓮『立正安国論』などを取り上げている。

『日本仏教史』末木文美士（新潮文庫）

最澄と空海の入唐について。「第二船に乗った最澄はこのとき38歳」。「第一船に乗った空海はこのとき31歳」。「無事に明州に到着したのは第二船のみ，第一船は唐とはいえ，はるか南に流されて福州に漂着，第三船はふたたび九州にもどり，第四船にいたっては行方不明のままという惨状であった」。

鎌倉仏教を三期に分ける。「第一期は大きな社会的変動の時代を背景に鎌倉仏教が形成される時期で，重源・栄西・法然・貞慶・俊芿・慈円らが活躍する。第二期は比較的平和で安定した社会を背景に思想が深められる時期で，明恵・良遍・親鸞・道元らが活躍する。第三期はふたたび社会的不安が高まると同時に，元寇による国家意識の高まりなど新しい要因が加わる思想の展開期で，叡尊・忍性・日蓮・一遍・凝然などが活躍する」。

『神仏習合』義江彰夫（岩波新書）

『忘れられた思想家―安藤昌益のこと（上下）』E.ハーバート・ノーマン（大窪愿二訳）（岩波新書）

E.ハーバート・ノーマン（1909～57年）は元駐日カナダ代表部主席。昌益の批判は苛烈を極める。「かれは日本史上の三大人物をとくに憎むべきものとして指摘する。この3人は聖徳太子，秀吉，家康である」。「「自然眞營道」第二十四巻は「法世物語巻」と題する。「法世」とは昌益の特殊的新造語であって，その當時の武士が特權者として上に立ちその下の無知な農民大衆を収奪する嚴重な身分制社會を指している。昌益はこの社會の僞善と野蠻を嫌惡し，獸，鳥，魚，蟲の對話にかりてこれを諷刺した」。「犬が法世の「仲間」だといっている聖賢」は孟子，老子，朱子，聖徳太子，林羅山，荻生徂徠である。

『本居宣長とは誰か』子安宣邦（平凡社新書）

子安宣邦は大阪大学名誉教授。専攻は近世日本思想史。「小学校教育を戦前の昭和初期に受けられた方々は，

5年生の国語読本に載っていた「松坂の一夜」という宣長と師賀茂真淵との出会いの物語を記憶されているでしょう」。昭和14年修正印刷された『小学国語読本』巻11では「第10「日本海海戦」，第11「皇国の姿」，第12「古事記の話」があり，それに続けて第13「松坂の一夜」となります。この目次を見ただけでも国学的な色彩の濃い，皇国主義的な国語読本であることが分かります」。

『横井小楠―維新の青写真を描いた男』徳永洋（新潮新書）

『近代国家を構想した思想家たち』『近代社会と格闘した思想家たち』鹿野政直（岩波ジュニア新書）

『三酔人経綸問答』中江兆民

『貧乏物語』河上肇

『近代日本の思想家たち―中江兆民・幸徳秋水・吉野作造』林茂（岩波新書）

『菅野すが―平民社の婦人革命家像』絲屋寿雄（岩波新書）

『田中正造』由井正臣（岩波新書）

由井正臣（1933～2008年）は早稲田大学名誉教授。専攻は日本近現代史。1901年に東京で鉱毒調査有志会が結成される。参加者には，三宅雪嶺，陸羯南，徳富蘇峰，内村鑑三がいた。この年，天皇直訴事件を起こす。直訴状は幸徳秋水の筆による。中学生だった石川啄木は新聞配達で得た義捐金を被害民に送った。

『代表的日本人』内村鑑三（鈴木範久訳）（岩波文庫）

1908年に英文で書かれた。ドイツ語訳したのは，ヘルマン＝ヘッセの父である。内村は，日清戦争を日本にとって「義戦」であるとして支持する論陣をはった。そのために日本が正義に立脚していることを訴えるための著作であり，そのため西郷隆盛・上杉鷹山（ようざん）・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮の5人の人選となった。内村はその後，日清戦争が「義戦」でないことを知り，激しく恥じた。そして日露戦争に対する「非戦論」となる。そのために本の題名も内容も改めた。それでも愛国主義的な印象が強い。

『内村鑑三』鈴木範久（岩波新書）

鈴木範久は立教大学名誉教授。専攻は宗教史学。不敬事件のあと，内村鑑三は重い流感にかかり意識不明の状態が続いた。そのあいだに出された辞職願は明らかに筆跡が異なる。外からの抗議者への対応に追われた妻は，3か月後に同じ流感で亡くなった。

『西田幾多郎―無私の思想と日本人』佐伯啓思（新潮新書）

『和辻哲郎―文人哲学者の軌跡』熊野純彦（岩波新書）

熊野純彦は東京大学教授。専攻は倫理学，哲学史。北鎌倉の東慶寺には，「西田幾多郎，鈴木大拙，安倍能成，岩波茂雄，小林秀雄などの墓碑とならんで，本書の主人公，和辻哲郎の墓所もある」。歴史に名を残す人物がどれほどの研究・思索をしたかという事実に圧倒される。夏目漱石，谷崎潤一郎，西田幾多郎，新渡戸稲造などとの関係によって，その時代を知ることもできる。

『遠野物語へようこそ』三浦佑之・赤坂憲雄（ちくまプリマー新書）

三浦佑之は千葉大学名誉教授，立正大学教授，古代文学・伝承文学専攻。赤坂憲雄は学習院大学教授・福島県立博物館館長。2010年が『遠野物語』が刊行されて100周年ということで発行された。『遠野物語』の入門書として軽く読める。『遠野物語』は最初わずか350部が印刷されただけだった。柳田は官僚時代「大学で農政学を講義する学者」でもあった。また「その一方で，少年の頃から短歌を作り，学生時代には叙情的な詩を作る文学青年でもあった柳田は，国木田独歩や田山花袋らと『叙情詩』という詩集も刊行しています。そうした，「経世済民」（世の中を治め人びとの苦しみを救うこと）の意志と文学青年としての叙情的な性向とが，官僚から民俗学者へとたどる柳田の生涯を方向づけていったと考えられます」。

『禅と日本文化』鈴木大拙（北川桃雄訳）（岩波新書）

1940年発行。英文で書かれた“Zen Buddhism and its Influence on Japanese Culture.”（1938）の一部を和訳したものである。序文は，鈴木大拙の中学時代からの友人・西田幾多郎が書いている。禅と美術，武士，剣道，儒教，茶道，俳句との関係を論じている。「禅は無政府主義やファシズムにも，共産主義や民主主義にも，無神論や唯心論にも，またいかなる政治的，経済的な教説（ドグマ）にも結びついている。ある意味では，

禅はいつも，革命的精神の鼓舞者ともいえる」。

『現代日本の思想―その五つの渦』久野治・鶴見俊輔（岩波新書）

久野収（1910～99年）の専攻は哲学。鶴見俊輔（1922～2015年）の専攻は哲学。1956年発行。「日本の観念論―白樺派」「日本の唯物論―日本共産党の思想」「日本のプラグマティズム―生活綴り方運動」「日本の超国家主義―昭和維新の思想」「日本の実存主義―戦後の世相」の5つが解説される。

『加藤周一―二十世紀を問う』海老坂武（岩波新書）

『国家神道と日本人』島薗進（岩波新書）

『必生　闘う仏教』佐々井秀嶺（集英社新書）

佐々井秀嶺は1935年生まれ。インド仏教指導者。真言宗智山派で得度。タイ留学を経て1967年に渡印。2003年にはインド政府少数者委員会仏教徒代表に任命された。インド国籍。当時のラジヴ・ガンディー首相からインド名，アーリア・ナーガールジュナを授与される。2009年6月に44年ぶりに日本に帰国した。最後の帰国であった。その著者が自らの人生を語った内容。

『創価学会』島田裕巳（新潮新書）

島田裕巳は元日本女子大学教授。宗教学者。創価学会は政権与党の公明党の最大の支持母体である。日本人の「およそ7人に1人は創価学会員である可能性がある」。その歴史と実態を知ることができる。

第14章　小説・随筆・詩集・ノンフィクション

14-1　日本

紫式部『源氏物語』
島崎藤村『破戒』
田山花袋『蒲団』
夏目漱石『吾輩は猫である』『倫敦塔』『坊つちやん』『草枕』『虞美人草』『坑夫』『夢十夜』『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『こころ』『道草』『明暗』

夏目漱石は，不登校だった15～16歳頃に荻生徂徠（江戸時代の儒学者）を書写し，その後も漢詩を詠むほどに中国の古典を学んでいる。また俳句を詠み，鴨長明の『方丈記』を英訳するほどに日本の古典を学んでいる。イギリス留学から帰国後に一高（現在の東京大学教養部）の日本人初の英語教師になるほどにイギリス文学を学んでいる。つまり日本の近代化を体現した人である。『三四郎』は，『それから』『門』につづく前期三部作の最初の作品である。

森鷗外『舞姫』『青年』『雁』『阿部一族』『山椒大夫』『高瀬舟』
永井荷風『墨東綺譚』
谷崎潤一郎『卍』『春琴抄』
武者小路実篤『友情』
志賀直哉『城の崎にて』『和解』『暗夜行路』
倉田百三『出家とその弟子』
芥川龍之介『羅生門』『鼻』『手巾（ハンケチ）』『戯作三昧』『蜘蛛の糸』『地獄変』『枯野抄』『蜜柑』『舞踏会』『秋』『杜子春』『藪の中』『トロッコ』『侏儒の言葉』『河童』『歯車』『或阿呆の一生』『一塊の土』
山本有三『路傍の石』
中勘助『銀の匙』
小林多喜二『蟹工船』『党生活者』
川端康成『伊豆の踊子』「掌の小説」
井伏鱒二『山椒魚』『黒い雨』
梶井基次郎『檸檬』『冬の蠅』
堀辰雄『風立ちぬ』『美しい村』
伊藤左千夫『野菊の墓』
石川啄木『一握の砂』
高村光太郎『智恵子抄』
中原中也『山羊の歌』『在りし日の歌』
中島敦『名人伝』『山月記』『李陵』
太宰治『晩年』『道化の華』『虚構の春』『狂言の神』『二十世紀旗手』『満願』『富嶽百景』『女生徒』『走れメロス』『ろまん燈籠』『右大臣実朝』『佳日』『津軽』『新釈諸国噺』『お伽草子』『冬の花火』『パンドラの匣』『トカトントン』『ヴィヨンの妻』『斜陽』『人間失格』『桜桃』『グッド・バイ』『家庭の幸福』

中学2年生の国語の授業で太宰治の『走れメロス』を読まされた。大人になって，こんな話をわざわざ書く太宰という作家はつまらないと思った。高校生になり，いろいろな人がいろいろな本を勧める中で，よくあげられていたのが『人間失格』であった。だまされたつもりで読んでみた。それまでクラスの中のお調子者を引き受けていた自分は，クラスの中では誰とも口をきかなくなった。それもいれてたぶん5回くらいは読んでい

ると思う。
坂口安吾『**堕落論**』
三木清『**人生論ノート**』
宮沢賢治『**注文の多い料理店**』
福永武彦『**愛の試み**』『**草の花**』『**風土**』『**廃市**』『**忘却の河**』『**海市**』『**風のかたみ**』『**死の島**』『**告別**』
恋愛論の中では『愛の試み』が一番よい。
大岡昇平『**野火**』
三島由紀夫『**仮面の告白**』『**潮騒**』『**金閣寺**』
竹山道雄『**ビルマの竪琴**』
壺井栄『**二十四の瞳**』
遠藤周作『**海と毒薬**』
安部公房『**砂の女**』
開高健『**パニック**』『**巨人と玩具**』『**裸の王様**』『**流亡記**』
松本清張『**点と線**』
高橋和巳『**悲の器**』『**散華**』『**我が心は石にあらず**』『**邪宗門**』『**憂鬱なる党派**』『**捨子物語**』『**日本の悪霊**』（新潮文庫），『**わが解体**』（河出文庫）
灰谷健次郎『**兎の眼**』『**太陽の子**』
阿佐田哲也『**麻雀放浪記（一～四）**』『**ドサ健ばくち地獄（上下）**』（角川文庫）
星新一『**ノックの音が**』『**未来いそっぷ**』『**にぎやかな部屋**』『**おせっかいな神々**』『**午後の恐竜**』『**マイ国家**』『**おのぞみの結末**』『**悪魔のいる天国**』『**ようこそ地球さん**』『**ボッコちゃん**』『**たくさんのタブー**』（新潮文庫）
三浦哲郎『**忍ぶ川**』（新潮文庫）
宮本輝『**蛍川・泥の河**』『**道頓堀川**』（新潮文庫）
村上春樹『**ノルウェイの森**』（講談社文庫）
石牟礼道子『**苦海浄土―わが水俣病**』（集英社文庫）
向田邦子『**思い出トランプ**』（新潮文庫）
三浦綾子『**塩狩峠**』（新潮文庫）
松浦理英子『**葬儀の日**』『**セバスチャン**』『**ナチュラル・ウーマン**』『**親指Ｐの修業時代**』（河出文庫）『**裏ヴァージョン**』（文春文庫），『**犬身**』（朝日文庫），『**奇貨**』（新潮文庫），『**最愛の子ども**』（文藝春秋）『**ポケット・フェティッシュ**』（白水uブックス）
生きている作家の中では，松浦理英子が最も好きな作家である。
川上弘美『**風花**』（集英社文庫），『**真鶴**』（文春文庫）
山田詠美『**ベッドタイムアイズ**』（河出文庫），『**ぼくは勉強ができない**』（新潮文庫）
多和田葉子『**犬婿入り**』（講談社文庫）
宮部みゆき『**あかんべえ**』『**模倣犯**』『**理由**』『**堪忍箱**』『**初ものがたり**』『**幻色江戸ごよみ**』『**火車**』『**淋しい狩人**』『**かまいたち**』『**本所深川ふしぎ草紙**』『**返事はいらない**』『**レベル7（セブン）**』『**魔術はささやく**』『**孤宿の人**』『**ソロモンの偽証**』（新潮文庫）
小川洋子『**博士の愛した数式**』（新潮文庫）
江國香織『**きらきらひかる**』『**つめたいよるに**』（新潮文庫）
よしもとばなな『**なんくるない**』（新潮文庫）
村山由佳『**すべての雲は銀の…**』（講談社文庫）
三浦しをん『**舟を編む**』（光文社文庫）

川上未映子『**先端で，さすわ　さされるわ　そらええわ**』(青土社),『**乳と卵**』『**六つの星星―川上未映子対話集**』(文春文庫),『**わたくし率　イン　歯―、または世界**』『**ヘヴン**』(講談社文庫)

川上未映子を読もうと思ったのは,『六つの星星―川上未映子対話集』(文春文庫)の6人の対談相手が，斎藤環・福岡伸一・松浦理英子・穂村弘・多和田葉子・永井均だったからである。いずれもこの推薦図書で本を紹介している。

山崎ナオコーラ『**人のセックスを笑うな**』(河出文庫)

綿谷りさ『**蹴りたい背中**』(河出文庫)

金原ひとみ『**蛇にピアス**』(集英社文庫)

大沢在昌『**新宿鮫**』『**毒猿　新宿鮫Ⅱ**』『**屍蘭　新宿鮫Ⅲ**』『**無間人形　新宿鮫Ⅳ**』『**炎蛹　新宿鮫Ⅴ**』『**氷舞　新宿鮫Ⅵ**』『**灰夜　新宿鮫Ⅶ**』『**風化水脈　新宿鮫Ⅷ**』『**狼花　新宿鮫Ⅸ**』『**鮫島の貌　新宿鮫短編集**』『**絆回廊　新宿鮫Ｘ**』(光文社文庫)

西村賢太『**苦役列車**』(新潮文庫)

森見登美彦『**夜は短し歩けよ乙女**』(角川文庫)

万城目学『**鴨川ホルモー**』(角川文庫)

百田尚樹『**永遠の0**』(講談社文庫)

小池昌代編著『**通勤電車でよむ詩集**』『**恋愛詩集**』(NHK出版新書)

小池昌代は詩人。『通勤電車でよむ詩集』では41の詩が紹介されている。トーマ・ヒロコ（1982年～，2005沖国大卒）の詩が時代を見事に写し取っていてすばらしい。朝日新聞の鷲田清一の「折々のことば」でも取り上げられた。

柴田トヨ『**くじけないで**』(飛鳥新社)

白寿（99歳）の処女詩集。150万部突破。一語・一語しっかり考え，選び抜かれている。

最果タヒ『**グッドモーニング**』(新潮文庫)

高野悦子『**二十歳の原点**』(新潮文庫)

沢木耕太郎『**深夜特急(1)**』(新潮文庫)

猪瀬直樹『**ミカドの肖像**』(小学館文庫)

佐野眞一『**東電ＯＬ殺人事件**』(新潮文庫)

三山喬『**ホームレス歌人のいた冬**』(東海教育研究所)

朝日新聞歌壇に立てつづけに投稿が掲載され，そして消えたホームレス歌人の正体を追うノンフィクション。

ビートたけし『**間抜けの構造**』(新潮新書)

林真理子『**野心のすすめ**』(講談社現代新書)

新書大賞2014第4位。

阿川佐和子『**聞く力―心をひらく**』(文春新書)

新書大賞2013第5位。2012～13年の150万部超のベストセラー。

14-2　沖縄

『**新装版　沖縄文学選　日本文学のエッジからの問い**』(勉誠出版)

芥川賞受賞4作品すべてを含む以下の作品が読める。

第一部　沖縄文学の近代

小説「**九年母**」山城正忠,「**奥間巡査**」池宮城積宝,「**滅びゆく琉球女の手記**」久志富佐子

琉歌三首　真境名安興

短歌三首　摩文仁朝信

詩**「夕の賦」**末吉安持,**「首里城」**世禮國男,**「妹へおくる手紙」「会話」「沖縄よどこへ行く」**山之口貘
第二部　アメリカ占領下の沖縄文学
小説**「カクテル・パーティー」**大城立裕,**「オキナワの少年」**東峰夫
詩**「村　その一」「村　その二」**牧港篤三,**「ある挽歌」**大湾雅常,**「コッテキ吹く男」**あしみねえいいち
「慟哭」新川明,**「島（Ⅱ）」**川満信一,**「家郷への逆説」**清田政信
第三部　復帰後の沖縄文学
小説**「嘉間良心中」**吉田スエ子,**「海鳴り」**長堂英吉
戯曲**「人類館」**知念正真
詩**「ソールランドを素足の女が」**仲地裕子,**「骨のカチャーシー」**芝憲子
「優しいたましひは埋葬できない」知念榮喜,**「喜屋武岬」**高良勉,**「沈黙の渚」**中里友豪
「死骸の海」与那覇幹夫,**「おきなわのうた」**上原紀善
第四部　沖縄文学の挑戦（90年代以降の沖縄文学）
小説**「豚の報い」**又吉栄喜,**「水滴」**目取真俊,**「風水譚」**崎山多美
『現代沖縄文学作品選』（講談社文芸文庫）
次の作品が読める。
安達征一郎**「鱶に曳きずられて沖へ」**，大城貞俊**「K共同墓地死亡者名簿」**，大城立裕**「棒兵隊」**
崎山麻夫**「ダバオ巡礼」**，崎山多美**「見えないマチからションカネーが」**，長堂英吉**「伊佐浜心中」**
又吉栄喜**「カーニバル闘牛大会」**，目取真俊**「軍鶏（タウチー）」**，山入端信子**「鬼火」**，山之口貘**「野宿」**
大城立裕**『小説　琉球処分』**（講談社文庫）
大城貞俊**『椎の川』**（朝日新聞社）
平成26年度実施選考試験・専門国語で出題された。
池上永一**『バガージマヌパナス—わが島のはなし』『テンペスト（一～四）』**（角川文庫）
『沖縄詩人アンソロジー　潮境　第1号』
川満信一**『川満信一詩集』**（オリジナル企画）
川満信一は詩人。反復帰論・琉球共和社会憲法C私（試）案で有名。2016年4月24日沖縄教員塾で講演会をしていただいた。
新城兵一**『流亡と飢渇』**（根元書房）,**『詩集　いんまぬえる』**（あすら舎）
松原敏夫**『ゆがいなブザのパリヤー』**（あすら舎）
新城兵一さん，松原敏夫さんは宮古島出身の詩人。上高は何度かお会いして，お話を伺っている。
佐々木薫**『ディープ・サマー』『詩集　那覇・浮き島』**（あすら舎）
芝憲子**『芝憲子詩集　さかさま階段—沖縄から南半球へ』**（OFFICE KON）
沖縄教員塾を開いた際,佐々木薫さん･芝憲子さんは一緒に詩集と同人誌をもって,塾を訪ねてくださった。

14-3 海外

魯迅**『狂人日記』『阿Q正伝』**
許南麒**『火縄銃のうた—長篇叙事詩』**
スティーブンソン**『宝島』『ジキル博士とハイド氏』**
ゲーテ**『若きウェルテルの悩み』**
ヘルマン・ヘッセ**『車輪の下』『郷愁』『デミアン』**
カフカ**『変身』**
ミヒャエル・エンデ**『モモ』**
ラ・ロシュフコー**『箴言集』**

ヴォルテール『**カンディード**』
アンドレ・ジード『**狭き門**』
サン・テグジュペリ『**星の王子様**』
カミュ『**異邦人**』
サガン『**悲しみよこんにちは**』
ツルゲーネフ『**初恋**』
ドストエフスキー『**罪と罰**』『**カラマーゾフの兄弟**』『**賭博者**』
マーク・トウェーン『**王子と乞食**』
ヘミングウェイ『**老人と海**』
サリンジャー『**ライ麦畑でつかまえて**』
ジョン・アーヴィング『**ガープの世界**』『**ホテル・ニューハンプシャー**』（新潮文庫）
イプセン『**人形の家**』
ロバート・キャパ『**ちょっとピンぼけ**』（文春文庫）

第15章　芸術・趣味・スポーツ・マンガ

15-1　芸術

『君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか』布施英利（ちくまプリマー新書）
『構図がわかれば絵画がわかる』布施英利（光文社新書）
　布施英利は芸術学者。専門は美術解剖学。ダ・ヴィンチやミケランジェロが人体の解剖を行ったように，自らも解剖を行っている。
『名画を見る眼』『続名画を見る眼』高階秀爾（岩波新書）
　高階秀爾は東京大学名誉教授。専攻は西洋美術史。ナショナルギャラリー（ロンドン），ルーブル美術館・オルセー美術館（パリ），バチカン美術館（ローマ）に行く前に読んでおけばよかった，と強く後悔した。
『フィレンチェ―初期ルネサンス美術の運命』高階秀爾（中公新書）
　「フィレンチェは，12世紀以来，厳然たる共和国であった。……その「都市国家」においては，少なくとも制度上は，ほとんど完璧に近い民主制が行なわれていた。」「ルネサンスは新しい世界の発見であった。それは，文字どおり地理上の「新世界」が歴史の表面に登場してきた時代でもあり，科学上の新知識が外界に対するそれまでとはまったく違った眼をもたらした時代でもあった。」
『増補　日本美術を見る眼―東と西の出会い』高階秀爾（岩波現代文庫）
『ルネサンス三巨匠の物語―万能（レオナルド）・巨人（ミケランジェロ）・天才（ラファエロ）の軌跡』池上英洋（光文社新書）
『学校で教えてくれない音楽』大友良英（岩波新書）

15-2　趣味

『Ａクラス麻雀』阿佐田哲也（双葉文庫）
『科学する麻雀』とつげき東北（講談社現代新書）
『カーマ・スートラ』ヴァーツヤーヤナ（角川ソフィア文庫）
『暴力団』『続・暴力団』溝口敦（新潮新書）
『ネットのバカ』中川淳一郎（新潮新書）
　中川淳一郎はネットニュース編集者・PRプランナー。
「【ネットに関する基本4姿勢】
・人間はどんなツールを使おうが，基本的能力がそれによって上がることはない
・ツールありきではなく，何を言いたいか，何を成し遂げたいかによって，人は行動すべき。ネットがそれを達成するために役立つのであれば，積極的に活用する
・ネットがあろうがなかろうが有能な人は有能なまま，無能な人はネットがあっても無能なまま
・1人の人間の人生が好転するのは人との出会いによる」

15-3　中日ドラゴンズ

『なぜ日本人は落合博満が嫌いか？』テリー伊藤（角川oneテーマ21新書）
『采配』落合博満（ダイヤモンド社）
『参謀―落合監督を支えた右腕の「見守る力」』森繁和（講談社）
『中日ドラゴンズ論』今中慎二（ベスト新書）

15-4　マンガ

『どんぐりの家』山本おさむ（小学館）

聾学校での重複障害の子どもたちを描いた漫画である。作者自身が重複障害の子どものための学校づくりの運動を担った。部屋の中にいる，聴覚障害を抱えた子どもとその母親。雪が降っていることに気づいた母親が，聴覚障害を抱えた子どもに「雪がシンシンと音を立てているのに，どうして気づかなかったの？」と問いかけられ，ショックを受ける場面が強く記憶に残っている。「雨がザーザーと降る」と「雪がシンシンと降る」の違いは，「聞こえない人」には自明ではない。

『今日もいい天気―原発事故編』山本おさむ（双葉社）

『遥かなる甲子園』で知られる漫画家自身の被災・避難生活を描く。

『いちえふ　福島第一原子力発電所労働記⑴⑵⑶』竜田一人（講談社）

『神様の背中―貧困の中の子どもたち』さいきまこ（秋田書店）

『健康で文化的な最低限度の生活⑴～⑸』柏木ハルコ（小学館）

第16章　絵本･図鑑･児童文学

絵本は「50刷」「100刷」という定番のものから始めるとよい。対象年齢は，それほど気にしなくてもよい。絵本は高いので，絵本の有名な出版社で月刊で購入するとお買い得。

16-1　絵本

『家族のこころの病気を子どもに伝える絵本①ボクのせいかも…―お母さんがうつ病になったの』
『家族のこころの病気を子どもに伝える絵本②お母さんどうしちゃったの…―統合失調症になったの・前編』
『家族のこころの病気を子どもに伝える絵本③お母さんは静養中―統合失調症になったの・後編』
『家族のこころの病気を子どもに伝える絵本④ボクのことわすれちゃったの？…―お父さんはアルコール依存症』プルスアルハ（ゆまに書房）

すべての学校の職員室・保健室に置いて欲しい本です。沖縄でこそ読まれるべき本です。

『おめん』作わだことみ・絵ささきようこ（ポプラ社）
『じゃあ　じゃあ　びりびり』まついのりこ（偕成社）
『なにいろ？』『１・２・３』作・絵 本信公久（くもん出版）
『あいうえお』本文イラスト いのうえ栄（永岡書店）
『ねないこ　だれだ』『あ～ん　あん』『いやだ　いやだ』せなけいこ さく・え（福音館書店）
『ぴよちゃんのありがとう』『ぴよちゃんのおともだち』さく・え いりやまさとし（学習研究社）
『がたんごとん　がたんごとん』安西水丸さく（福音館書店）
『ねこさんスパゲッティ』作・絵 夏目尚吾（チャイルド本社）
『ノンタン　はっくしょん』キヨノサチコ作・絵（偕成社）
『のりものえほん　トラック』『のりものえほん　ひこうき』バイロン・バートンさく・え（金の星社）
『しゃしんえほん　ひこうき・ふね』写真小賀野実（ポプラ社）
『パオちゃんのいちねん』なかがわみちこ さく・え（PHP研究所）
『どんな　かお？』しらいしょうこ文・ふかのただし絵（女子パウロ会）
『おててがでたよ』『おつきさま　こんばんは』林明子さく（福音館書店）
『くっついた』『バスがきました』三浦太郎（こぐま社）
『こねこがにゃあ』ひろのたかこ（福音館書店）
『だっこ　だっこ　だーいすき』かみじょうゆみこ ぶん（福音館書店）
『こりゃ　まてまて』中脇初枝ぶん・酒井駒子え（福音館書店）
『ぼくのおべんとう』さくスギヤマカナヨ（アリス館）
『ひとりでうんちできるかな』『いただきますあそび』『いないいないばああそび』
『いいおへんじできるかな』きむらゆういち さく（偕成社）
『いいもの　どっち？』さく わだことみ・え あらかわしずえ（学習研究社）
『どんどこももんちゃん』とよたかずひこ（童心社）
『どうぶつのおかあさん』小森厚ぶん・薮内正幸え（福音館書店）
『くだもの』『やさい』平山和子さく（福音館書店）
『ころころころ』元永定正さく（福音館書店）
『くだものだもの』石津ちひろ文・山村浩二絵（福音館書店）
『こんにちは』わたなべしげお ぶん・おおともやすお え（福音館書店）
『しろくまちゃんのほっとけーき』わかやまけん（こぐま社）

『おふろでちゃぷちゃぷ』いわさきちひろ え・松谷みよ子 ぶん（童心社）
『でんき　つけて！』さいとうしのぶ（ひさかたチャイルド）
『てじな』土屋富士夫 作（福音館書店）
『もけらもけら』山下洋輔ぶん・元永定正え・中辻悦子構成（福音館書店）
『ねずみさんのながいパン』多田ヒロシ（こぐま社）
『めのまどあけろ』谷川俊太郎ぶん・長新太え（福音館書店）
『ピーのおはなし』きもとももこ さく（福音館書店）
『イエペはぼうしがだいすき』石亀泰郎写真（文化出版局）
『おばけのてんぷら』作・絵せなけいこ（ポプラ社）
『バスでおでかけ』作・絵 間瀬なおかた（ひさかたチャイルド）
『うしろにいるのだあれ』ふくだとしお さく（新風社）
『おやすみなさいコッコさん』片山健さく・え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『きんぎょがにげた』五味太郎作（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『へんなおにぎり』長新太さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『とべ　かぶとむし』得田之久さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『かじだ　しゅつどう』山本忠敬さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『ぶたのさんぽ』白川三雄さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『これ　なーに？』きたむらえり さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『ほんやのおじさん』ねじめ正一ぶん・南伸坊え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『たこらすとまいかちゃん』安江リエ文・いまきみち え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『ハンバーグーチョキパー』長新太さく・え／和田誠しあげ（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『こんにちは　みんな！』にしむらあつこ さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『うさぎ　うさぎ　なにたべてるの』松野正子さく・大沢昌介え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『みんな　みーつけた』きしだえりこ さく・やまわきゆりこ え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『あみものじょうずのいのししばあさん』こさかまさみ文・山内彩子え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『まてまてタクシー』西村敏雄さく　（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『どうぶつのこどもたち』小森厚ぶん・藪内正幸え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『はぐ』佐々木マキ（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『ちんころりん　高知の昔話』中脇初枝再話・ささめやゆき絵（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『ずかん・じどうしゃ』山本忠敬さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『おさらのこども』西平あかね さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『あつい　あつい』垂石眞子さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『ぼくのおじいちゃんのかお』天野祐吉文・沼田早苗写真（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『ピーン』古賀充 作（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『いしころ　とこ　とこ』古賀充 作（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『おやおや，おやさい』石津ちひろ文・山村浩二絵（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『おかあさんとあかちゃん』中谷千代子ぶん・え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『また　あした』ぱくきょんみ文・伊部年彦絵（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『にんじん　だいこん　ごぼう』植垣歩子再話・絵（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『おべんとう』小西英子さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『ラスチョのせつじょうしゃ』アンヴィル奈宝子さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『はっぱのおうち』征矢清さく・林明子え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『おひさま　ぽかぽか』笠野裕一（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）

『**ひまわり**』和歌山静子（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**ももいろのちいさないえ**』おかいみほ さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**ちいさな　くろいいし**』マレーク・ベロニカ作／石津ちひろ訳（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**おにぎり**』平山英三ぶん・平山和子え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**いろいろおせわになりました**』やぎゅうげんいちろう さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**まる　まる**』中辻悦子さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**どうすればいいのかな？**』わたなべしげお ぶん･おおともやすお え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**きょうのおべんとうなんだろうな**』きしだえりこ さく・やまわきゆりこ え
（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**ちいさいもの　みつけた**』冨田百秋さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**かさかしてあげる**』こいでやすこ さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**がちゃがちゃ　どんどん**』元永定正（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**こんにちは**』わたなべしげお ぶん・おおともやすお え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**コンニチハエホン**』イノウエヨースケ（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**にゃん　にゃん**』せなけいこ さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**ブルくんのおうち**』ふくざわゆみこ さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**しゅっぱつ　しんこう！**』山本忠敬さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**ブルブルさんのあかいじどうしゃ**』平山暉彦（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**ねてるの　だあれ**』神沢利子さく・山内ふじ江え（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**どんどこ　どん**』和歌山静子作（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**くろねこかあさん**』東君平さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**とん　ころころころ**』荒川薫 文／村田朋泰造形・写真（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**おかあさんといっしょ**』 薮内正幸さく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**くまとりすのおやつ**』きしだえりこ ぶん／ほりうちせいいち・ほりうちもみこ え
（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**おばけがぞろぞろ**』ささきまき（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**たまごのあかちゃん**』かんざわとしこ ぶん・やぎゅうげんいちろう え
（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**くものもいち**』こしだミカさく（えほんのいりぐち福音館月刊えほん）
『**ぶたぶたくんのおかいもの**』土方久功さく・え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**カニ　ツンツン**』金関寿夫ぶん・元永定正え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**くろうまブランキー**』伊東三郎再話・堀内誠一画（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**ごろはちだいみょうじん**』中川正文さく・梶山俊夫え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**ぼく　びょうきじゃないよ**』角野栄子さく・垂石眞子え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**まじょのかんづめ**』佐々木マキ さく（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**もりのひなまつり**』こいでやすこ さく（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**まほうのえのぐ**』林明子さく（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**あひるのたまご**』さとうわきこ さく・え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**だいちゃんとうみ**』太田大八さく・え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**かばくんのふね**』岸田衿子さく・中谷千代子え（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**たからさがし**』なかがわりえこ・おおむらゆりこ（福音館月刊絵本ものがたり新36）
『**ぐりとぐらのおきゃくさま**』なかがわりえこ･やまわきゆりこ（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『**ゆうびんやさんのホネホネさん**』にしむらあつこ さく・え（福音館月刊絵本こどものともセレクション）

『ぞうくんのさんぽ』なかのひろたか さく・え／なかのまさたかレタリング
（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『ぞうくんのあめふりさんぽ』なかのひろたか さく・え（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『まゆとおに』富安陽子文・降矢なな絵（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『いちごばたけのちいさなおばあさん』わたりむつこ さく・中谷千代子え
（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『さんまいのおふだ　～新潟の昔話～』水沢謙一再話・梶山俊夫画
（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『ちょっとだけ』瀧村有子さく・鈴木永子え（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『あな』谷川俊太郎作・和田誠画（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『ねこどけい』きしだえりこ さく・やまわきゆりこ え（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『トマトさん』田中清代さく（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『あめふり』さとうわきこ さく・え（福音館月刊絵本こどものともセレクション）
『ままです　すきです　すてきです』谷川俊太郎ぶん・タイガー立石え（福音館書店）
『ねずみのでんしゃ』作山下明生・いわむらかずお（ひさかたチャイルド）
『14ひきのあさごはん』いわむらかずお（童心社）
『ぼくにもそのあいをください』『あなたをずっとずっとあいしてる』作・絵宮西達也（ポプラ社）
『せんろはつづく』竹下文子文・鈴木まもる絵（金の星社）
『モチモチの木』斉藤隆介作・滝平二郎絵（岩崎書店）
『はじめてのうちゅうえほん』さく・え てづかあけみ（パイ インターナショナル）
『はしれ！マンモス・ゴン～巨大ライオンと戦う巻～』作・黒川光広（童心社）
『けがをした恐竜～化石が語るティラノサウルスの話～』黒川みつひろ（こぐま社）
『恐竜　トリケラトプスとひみつの湖』『恐竜　トリケラトプスとギガノトサウルス』黒川みつひろ作・絵
（小峰書店）
『せみとりめいじん』かみやしん作・奥本大三郎監修（福音館書店）
『たくさんのふしぎ～琉球という国があった～』上里隆史文・富山義則写真・一ノ関圭絵（福音館書店）
『ごんぎつね』原作：新美南吉（シーズ）
『ふくはうち　おにもうち』内田麟太郎作・山本孝 絵（岩崎書店）
『おかあさんはおこりんぼうせいじん』スギヤマカナヨ（PHP研究所）
『おおきくなるっていうことは』中川ひろたか文・村上康成絵（童心社）
『だいじょうぶ　だいじょうぶ』いとうひろし作・絵（講談社）
『ちからたろう　日本の昔話』文・片岡輝／絵・村上豊（チャイルド本社）
『きいろいばけつ』もりやまみやこ作・つちだよしはる絵（あかね書房）
『ガタガタ村と大ナマズ』山王三・四丁目自治会 文・寺田順三絵（Z会）
『新・おきなわ昔ばなし⑥（竹の笛／獅子のことづけ）』
文・石川きよ子／絵・安室二三男，文・宮城康博／絵・大城美千代（沖縄出版）
『100かいだてのいえ』『ちか100かいだてのいえ』いわいとしお（偕成社）
『ピリカ，おかあさんへの旅』越智典子文・沢田としき絵（福音館書店）
『そらまめくんのベッド』『そらまめくんとめだかのこ』『そらまめくんのぼくのいちにち』なかやみわ・さく
（小学館）
『ぐりとぐら』『そらいろのたね』なかがわりえこ・おおむらゆりこ（福音館書店）
『マフィンおばさんのぱんや』竹林亜紀さく・河本祥子え（福音館書店）
『しょうぼうじどうしゃ　じぷた』渡辺茂男さく・山本忠敬え（福音館書店）

『**おおきなかぶ**』内田莉莎子再話・佐藤忠良画（福音館書店）
『**恐竜絵本　恐竜学入門**』（今人舎）
『**進化の迷路～原始の海から人類誕生まで～**』作・絵香川源太郎（PHP研究所）
『**メアリー・スミス**』アンドレア・ユーレン作／千葉茂樹訳（光村教育図書）
『**まよなかのだいどころ**』モーリス・センダックさく／じんぐうてるお やく（冨山房）
『**マイク・マリガンとスチーム・ショベル**』ぶんとえバージニア・リー・バートン／やく いしいももこ（童話館出版）
『**ちいさい　おうち**』バージニア・リー・バートン文・絵／石井桃子訳（岩波書店）
『**いろいろへんないろのはじまり**』アーノルド・ローベルト作／まきたまつこ やく（冨山房）
『**どろんここぶた**』アーノルド・ローベル作／岸田衿子訳（文化出版局）
『**きょうりゅうたち**』ベギー・パリッシュ文／アーノルド・ローベル絵／杉浦宏訳編（文化出版局）
『**みにくいあひるのこ**』ハンス・クリスチャン・アンデルセンさく
スペン・オットー・Sえ／きむらゆりこ やく（ポルプ出版）
『**ビロードのうさぎ**』マージョリィ・W・ビアンコ原作／酒井駒子絵・抄訳（ブロンズ新社）
『**うさぎ小学校**』アルベルト・ジクストゥス文／フリッツ・コッホニゴータ絵／はたさわゆうこ訳（徳間書店）
『**王さまと九人のきょうだい**』君島久子訳・赤羽末吉絵（岩波書店）
『**ちきゅうはみんなのいえ**』リンダ・グレイザー文／エリサ・クレヴェン絵／加島葵訳（くもん出版）
『**ぞうのババール～こどものころのおはなし～**』ジャン・ド・ブリュフさく／やまがわすみこ やく（評論社）
『**Le Petit Prince絵本版 星の王子さま**』原作サンテグジュペリ・訳池澤夏樹（集英社）
『**ねぼすけ　はとどけい**』ルイス・スロボドキン作／くりやがわけいこ訳（偕成社）
『**しろいうさぎとくろいうさぎ**』ガース・ウィリアムズぶん・え／まつおかきょうこ やく（福音館書店）
『**ほんをよめばなんでもできる**』ジュディ・シエラ文／マーク・ブラウン絵／辺律子訳（セーラー出版）
『**ねえ，どれがいい？**』ジョン・バーニンガムさく／まつかわまゆみ やく（評論社）
『**うんがにおちたうし**』フィリス・クラシロフスキー作／ピーター・スパイアー絵
みなみもとちか訳（ポプラ社）
『**ひとまねこざるときいろいぼうし**』H.A.レイ文・絵／光吉夏弥訳（岩波書店）
『**百まいのきもの**』文エリノア・エスティーズ／絵ルイス・スロボドキン／訳石井桃子（岩波書店）
『**せいめいのれきし**』バージニア・リー・バートン文・え／いしいももこ やく（岩波書店）
『**たいせつなきみ**』マックスルケード／セルジオ・マルティネス絵／松波史子訳（フォレストブックス）
『**バナナのおはなし**』伊沢尚子文・及川賢治絵（福音館書店月刊かがくのとも）
『**すずめくんどこでごはんたべるの？**』たしろちさと ぶん・え（福音館書店月刊かがくのとも）
『**しぜん　いちご**』指導・佐藤紀男／絵・斉藤雅緒（フレーベル館）
『**しぜん　セキセイインコ**』指導・宗近功／絵・外園勉（フレーベル館）
『**しぜん　とうもろこし**』指導・竹内栄次郎／絵・鶴田修（フレーベル館）

16-2 図鑑

『**1　こんちゅう**』三芳悌吉え・矢島稔しどう（はじめてであうずかん福音館書店）
『**2　けもの**』相笠昌義え・小森厚しどう（はじめてであうずかん福音館書店）
『**3　とり**』安徳瑛え・高野伸二しどう（はじめてであうずかん福音館書店）
『**4　さかな**』笠木實え・久田迪夫しどう（はじめてであうずかん福音館書店）
『**5　しょくぶつ**』高森登志夫え・古矢一穂しどう（はじめてであうずかん福音館書店）
『**学研の図鑑　宇宙**』（学研教育出版）

『小学館の図鑑NEO　地球』（小学館）
『小学館の図鑑NEO　大むかしの生物』（小学館）
『小学館の図鑑NEO　恐竜』（小学館）

16-3 児童文学

『本へのとびら―岩波少年文庫を語る』宮崎駿（岩波新書）

宮崎駿はアニメーション映画監督。『トム・ソーヤーの冒険』など児童文学の紹介書。著者の3・11の受け止め方をぜひ読んでほしい。「本には効き目なんかないんです。振り返ってみたら効き目があったということにすぎない。あのときのあの本が，自分にとってああいう意味があったとか，こういう意味があったとか，何十年も経ってから気がつくんですよ。だから，効き目があるから渡す，という発想はやめたほうがいいと思っています。読ませようと思っても，子どもは読みません」。「要するに児童文学というのは，「どうにもならない，これが人間という存在だ」という，人間の存在に対する厳格で批判的な文学とはちがって，「生まれてきてよかったんだ」というものなんです。生きていてよかったんだ，生きていいんだ，というようなことを，子どもたちにエールとして送ろうというのが，児童文学が生まれた基本的なきっかけだと思います」。「「子どもにむかって絶望を説くな」ということなんです」。

『今こそ読みたい児童文学100』赤木かん子（ちくまプリマー新書）

『エルマーのぼうけん』『エルマーとりゅう』『エルマーと16ぴきのりゅう』ルース・スタイルス・ガネット（福音館書店）